

坊っちゃん

夏目漱石





親おやゆず譲りの無鉄砲むてつぽうで小供の時から損ばかりしている。

小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰こしを抜ぬかした事がある。なぜそんな無闇むやみをしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談じやうだんに、いくら威張いばつても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と囃はやしたからである。小使こづかいに負ぶさつて

歸つて来た時、おやじが大きな眼めをして二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴やつがあるかと云いったから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

親類のものから西洋製のナイフを貰もらつて奇麗きれいな刃はを日に翳かざして、友達ともだちに見せていたら、一人が光る事は光るが切れそうもないと云った。切れぬ事があるか、何でも切ってみせると受け合つた。そんなら君の指を切ってみると注文したから、何だ指ぐらいこの通りだと右の手の親指の甲こうをはすに切り込こんだ。幸さいわいナイフが小さいのと、親指の骨が堅かたかつたので、今だに親指は

手に付いている。しかし創痕きずあとは死ぬまで消えぬ。

庭を東へ二十歩に行き尽つくすと、南上がりにいささかばかりの菜園があつて、真中まんなかに栗くりの木が一本立っている。これは命より大事な栗だ。実の熟する時分は起き抜けに背戸せどを出て落ちた奴を拾つてきて、学校で食う。菜園の西側が山城屋やましろうやという質屋の庭続きで、この質屋に勘太郎かんたろうという十三四の倅せがれが居た。勘太郎は無論弱虫である。弱虫の癖くせに四つ目垣を乗りこえて、栗を盗ぬすみにくる。ある日の夕方折戸おりどの蔭かげに隠かくれて、とうとう勘太郎を捕つかまえてやった。その時勘太郎は逃にげ路みちを失つ

て、一生懸命いっしょうけんめいに飛びかかってきた。向うは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。鉢はちの開いた頭を、こっちの胸へ宛あててぐいぐい押おした拍子ひょうしに、勘太郎の頭がすべって、おれの袷あわせの袖そでの中にはいった。邪魔じやまになつて手が使えぬから、無暗に手を振ふつたら、袖の中にある勘太郎の頭が、右左へぐらぐら靡なびいた。しまいに苦しがつて袖の中から、おれの二の腕うでへ食い付いた。痛かったから勘太郎を垣根へ押しつけておいて、足捌あしがらをかけて向うへ倒たおしてやった。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩くずして、自分

の領分へ真逆様まつさかさまに落ちて、ぐうと云った。勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になった。その晩母が山城屋に詫わびに行つたついでに袷の片袖も取り返して来た。

この外いたずらは大分やつた。大工の兼公かねこうと肴屋さかなやの角かくをつれて、茂作もさくの人参にんじん畠はたけをあらした事がある。人参でそろの芽ところが出揃そろわぬ処わらへ藁わらが一面に敷しいてあつたから、その上で三人が半日相撲すもうをとりつづけに取つたら、人参がみんな踏ふみつぶされてしまった。古川ふるかわの持つている田圃たんぼの井戸いどを埋うめて尻しりを持ち込まれた事もある。太い

孟宗もうそうの節を抜いて、深く埋めた中から水が湧わき出て、そこいらの稲いねにみずがかかる仕掛しかけであつた。その時分はどんな仕掛か知らぬから、石や棒ぼうちぎれをぎゅうぎゅう井戸の中へ挿さし込んで、水が出なくなつたのを見届けて、うちへ歸つて飯を食つていたら、古川が真赤まっかになつて怒鳴どなり込んで来た。たしか罰金ばっきんを出して済んだようである。

おやじはちつともおれを可愛かわいがつてくれなかつた。母は兄ばかり鼯ひいきにしていた。この兄はやに色が白くつて、芝居しばいの真似まねをして女形おんながたになるのが好きだつた。

おれを見る度にこいつはどうせ碌ろくなものにはならないと、おやじが云った。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が云った。なるほど碌なものにはならない。ご覧の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役ちようえきに行かないで生きているばかりである。

母が病気で死ぬにあ二三日にさんち前台区で宙返りをしてへつっいの角で肋骨あばらばねを撲うつて大いに痛かった。母が大層怒おこつて、お前のようなものの顔は見たくないと云うから、親類へ泊とまりに行っていた。するととうとう死んだと云

う報知しらせが来た。そう早く死ぬとは思わなかった。そんな大病なら、もう少し大人おとなしくすればよかったと思つて歸つて来た。そうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれのために、おつかさんが早く死んだんだと云つた。口惜くやしかったから、兄の横つ面を張つて大變叱しかられた。母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮くらしていた。おやじは何にもせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様は駄目だめだ駄目だと口癖のように云っていた。何が駄目なんだか今に分らない。妙みょうなおやじがあつたもんだ。兄は実業家になるとか云つてしきりに英語を勉強してい

た。元来女のような性分で、ずるいから、仲がよくなかった。十日に一遍ぐらいの割で喧嘩けんかをしていた。あの時将棋しょうぎをさしたら卑怯ひきような待駒まちごまをして、人が困ると嬉うれしそうに冷やかした。あんまり腹が立ったから、手に在った飛車を眉間みけんへ擲たきつけてやった。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやじに言付いけた。おやじがおれを勘当かんどうすると言ひ出した。

その時はもう仕方がないと観念して先方の云う通り勘当されるつもりでいたら、十年来召し使っている清きよという下女が、泣きながらおやじに詫あやまつて、ようや

くおやじの怒りいかが解けた。それにもかかわらずあまり
おやじを怖いこわとは思わなかった。かえつてこの清と云
う下女に気の毒であつた。この下女はもと由緒ゆいしよのある
ものだつたそうだが、瓦解がかいのときに零落れいらくして、つい
奉公ほうこうまでするようになったのだと聞いている。だから
婆ばあさんである。この婆さんがどういふ因縁いんえんか、おれを
非常に可愛がつてくれた。不思議なものである。母も
死ぬ三日前に愛想あいそをつかした——おやじも年中持て余
している——町内では乱暴者の悪太郎と爪弾つまはじきをする
——このおれを無暗に珍重ちんちようしてくれた。おれは到底人

に好かれる性たちでないとあきらめていたから、他人から木の端はしのように取り扱あつかわれるのは何とも思わない、かえってこの清のようにちやほやしてくれるのを不審ふしんに考えた。清は時々台所で人の居ない時に「あなたは真ま直すぐでよいご気性だ」と賞ほめる事が時々あつた。しかしおれには清の云う意味が分からなかった。好いい気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだろうと思つた。清がこんな事を云う度におれはお世辞は嫌きらいだと答えるのが常であつた。すると婆さんはそれだから好いご気性ですと云つては、嬉しそうにおれの顔を

眺^{なが}めている。自分の力でおれを製造して誇^{ほこ}つてゐるように見える。少々気味がわるかった。

母が死んでから清はいよいよおれを可愛がった。時々こづかは小供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思つた。つまらない、廃^よせばいいのと思つた。氣の毒だと思つた。それでも清は可愛がる。折々は自分の小遣^{きんづば}いで金鍰^{こうばい}や紅梅焼^{やき}を買つてくれる。寒い夜などはひそかに蕎麦粉^{そばこ}を仕入れておいて、いつの間にか寝^ねてゐる枕元^{まくらもと}へ蕎麦湯を持って来てくれる。時には鍋焼饅頭^{なべやきうどん}さえ買つてくれた。ただ食い物ばかりではな

い。靴足袋くつたびももらつた。鉛筆えんぴつも貰つた、帳面も貰つた。これはずっと後の事であるが金を三円ばかり貸してくれた事さえある。何も貸せと云つた訳ではない。向うで部屋へ持つて来てお小遣いがなくてお困りでしよう、お使いなさいと云つてくれたんだ。おれは無論入らないと云つたが、是非使えと云うから、借りておいた。実は大変嬉しかった。その三円を蝦蟇がまぐち口へ入れて、懷ふところへ入れたなり便所へ行ったら、すぽりと後架こうかの中へ落おとしてしまった。仕方がないから、のそのそ出てきて実はこれこれだと清に話したところが、清は早速竹の

棒を捜さがして来て、取つて上げますと云った。しばらくすると井戸端いどばたでざあざあ音がするから、出てみたら竹の先へ蝦蟇口の紐ひもを引き懸かけたのを水で洗つていた。それから口をあけて壺いちえんさつ円札を改めたら茶色になって模様が消えかかっていた。清は火鉢で乾かわかして、これでいいでしょうと出した。ちよつとかいでみて臭くさいやと云つたら、それじゃお出しなさい、取り換かえて来て上げますからと、どこでどう胡魔化ごまかしたか札の代りに銀貨を三円持つて来た。この三円は何に使つたか忘れてしまった。今に返すよと云つたぎり、返さない。今と

なつては十倍にして返してやりたくても返せない。

清が物をくれる時には必ずおやじも兄も居ない時に限る。おれは何が嫌いだと云つて人に隠れて自分だけ得をするほど嫌いな事はない。兄とは無論仲がよくなけれども、兄に隠して清から菓子かしや色鉛筆を貰いたくはない。なぜ、おれ一人にくれて、兄さんには遣やらないのかと清に聞く事がある。すると清は澄すましたものでお兄様あにいさまはお父様とうさまが買つてお上げなさるから構いませんと云う。これは不公平である。おやじは頑固がんこだけれども、そんな依怙えこひ負いはせぬ男だ。しかし清の眼から

見るとそう見えるのだろう。全く愛に溺^{おぼ}れていたに違^{ちが}いない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。単にこればかりではない。最負目は恐ろしいものだ。清はおれをもつて将来立身出世して立派なものになると思い込んでいた。その癖勉強をする兄は色ばかり白くつて、とても役には立たないとい人できめてしまった。こんな婆さんに逢^あつては叶^{かな}わない。自分の好きなものは必ずえらい人物になつて、嫌いなひとはきつと落ち振れるものと信じている。おれはその時から別段何になると云^りう了^{りようけん}見もなかつた。し

かし清がなるなると云うものだから、やつぱり何かに成れるんだろうと思つていた。今から考えると馬鹿馬鹿しい。ある時などは清にどんなものになるだらうと聞いてみた事がある。ところが清にも別段の考えもなかつたようだ。ただ手車へ乗つて、立派な玄関げんかんのある家をこしらえるに相違そういないと云つた。

それから清はおれがうちでも持つて独立したら、一所いっしょになる気でいた。どうか置いて下さいと何遍も繰り返して頼んだ。おれも何だかうちが持てるような気がして、うん置いてやると返事だけはしておいた。と

ころがこの女はなかなか想像の強い女で、あなたはど
こが大好き、麴町こうじまちですか麻布あざぶですか、お庭へぶらんこ
をおこしらえ遊ばせ、西洋間は一つでたくさんですな
どと勝手な計画を独りで並ならべていた。その時は家なん
か欲しくも何ともなかった。西洋館も日本建にほんだても全く不
用であつたから、そんなものは欲しくないと、いつで
も清に答えた。すると、あなたは欲がすくなくつて、
心が奇麗だと云つてまた賞めた。清は何と云つても賞
めてくれる。

母が死んでから五六年の間はこの状態で暮してい

た。おやじには叱られる。兄とは喧嘩をする。清には菓子を貰う、時々賞められる。別に望みもない。これでたくさんだと思っていた。ほかの小供も一概いちがいにこんなものだろうと思っていた。ただ清が何かにつけて、あなたはかわいそうお可哀想だ、不仕合だふしあわせと無暗に云うものだから、それじゃ可哀想で不仕合せなんだろうと思った。その外に苦になる事は少しもなかった。ただおやじが小遣いをくれないには閉口した。

母が死んでから六年目の正月におやじも卒中で亡くなった。その年の四月におれはある私立の中学校を卒

業する。六月に兄は商業学校を卒業した。兄は何とか会社の九州の支店に口があつて行^ゆかなければならん。おれは東京でまだ学問をしなければならぬ。兄は家を出て財産を片付けて任地へ出立^{しゅつたつ}すると云い出した。おれはどうでもするがよかろうと返事をした。どうせ兄の厄介^{やっかい}になる気はない。世話をしてくれるにしたらところで、喧嘩をするから、向うでも何とか云い出すに極^{きま}っている。なまじい保護を受ければこそ、こんな兄に頭を下げなければならぬ。牛乳配達をしても食^くつてられると覚悟^{かくご}をした。兄はそれから道具屋を呼

んで来て、先祖代々の瓦落多がらくたを二束三文にそくさんもんに売った。
家屋敷いえやしきはある人の周旋しゅうせんである金満家に譲った。この方
は大分金になったようだが、詳しい事は一向知らぬ。
おれは一ヶ月以前から、しばらく前途の方向のつくま
で神田の小川町おがわまちへ下宿していた。清は十何年居たうち
が人手に渡わたるのを大いに残念がったが、自分のもので
ないから、仕様がなかった。あなたがもう少し年をとつ
ていらつしやれば、ここがご相続が出来ますものをと
しきりに口説いていた。もう少し年をとって相続が出
来るものなら、今でも相続が出来るはずだ。婆さんは

何なんにも知らないから年さえ取れば兄の家がもらえると信じている。

兄とおれはかように分れたが、困ったのは清の行く先である。兄は無論連れて行ける身分でなし、清も兄の尻にくっ付いて九州下りくだりまで出掛ける気は毛頭なし、と云つてこの時のおれは四畳半よじようはんの安下宿にこも籠つて、それすらもいざとなれば直ちに引き払はらわねばならぬ始末だ。どうする事も出来ん。清に聞いてみた。どこかへ奉公でもする気かねと云つたらあなたがおうちを持つて、奥おくさまをお貰いになるまでは、仕方がないか

ら、甥おいの厄介になりましたようにようやく決心した返事をした。この甥は裁判所の書記でまず今日には差支さしつかえなく暮していたから、今までも清に来るなら来いと二三度勧めたのだが、清はたとい下女奉公はしても年来住み馴なれた家うちの方がいいと云つて応じなかった。しかし今の場合知らぬ屋敷へ奉公易ほうこうがえをして入らぬ気兼きがねを仕直すより、甥の厄介になる方がまじだと思つたのだらう。それにしても早くうちを持ての、妻さいを貰えの、来て世話をするのと云う。親身しんみの甥よりも他人のおれの方が好きなのだらう。

九州へ立つ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出してこれを資本にして商買しょうばいをするなり、学資にして勉強をするなり、どうしても随意ずいに使うがいい、その代りあとは構わないと云った。兄にしては感心なやり方だ、何の六百円ぐらい貰わんでも困りはせんと思つたが、例に似ぬ淡泊たんぱくな処置が気に入ったから、礼を云つて貰つておいた。兄はそれから五十円出してこれをついでに清に渡してくれと云ったから、異議なく引き受けた。二日立つて新橋の停車場ていしやばで分れたぎり兄にはその後一遍も逢わない。

おれは六百円の使用法について寝ながら考えた。商買をしたって面倒めんどくさくつて旨うまく出来るものじゃない、ことに六百円の金で商買らしい商買がやれる訳でもなかろう。よしやれるとしても、今のようじゃ人の前へ出て教育を受けたと威張れないからつまり損になるばかりだ。資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。六百円を三に割つて一年に二百円ずつ使えば三年間は勉強が出来る。三年間一生懸命にやれば何か出来る。それからこの学校へはいろうと考えたが、学問は生来しやうらいどれもこれも好きでない。

ことに語学とか文学とか云うものは真平まっぺらご免めんだ。新体詩などと来ては二十行あるうちで一行も分らない。どうせ嫌いなものなら何をやっても同じ事だと思つたが、幸い物理学校の前を通り掛かつたら生徒募集の広告が出ていたから、何も縁だと思つて規則書をもらつてすぐ入学の手続きをしてしまった。今考えるとこれも親譲りの無鉄砲ひとなみから起おこつた失策だ。

三年間まあ人並に勉強はしたが別段かんじようたちのいい方でもないから、席順はいつでも下から勘定する方が便利であつた。しかし不思議なもので、三年立つたらとう

とう卒業してしまった。自分でも可笑おかしいと思ったが苦情を云う訳もないから大人しく卒業しておいた。

卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何か用だろうと思つて、出掛けて行つたら、四国辺のある中学校で数学の教師が入る。月給は四十円だが、行つてはどうだという相談である。おれは三年間学問はしたが実を云うと教師になる気も、田舎いなかへ行く考えも何もなかった。もつとも教師以外に何をしようと云うあてもなかったから、この相談を受けた時、行きましようよくせきと即席に返事をした。これも親譲りの無鉄砲が崇たかつ

たのである。

引き受けた以上は赴任せねばならぬ。この三年間は

ちつきよ

四畳半に蟄居して小言はただの一度も聞いた事がな

い。喧嘩もせずに済んだ。おれの生涯のうちでは

ひかくてきのんき

比較的呑気な時節であつた。しかしこうなると四畳半

も引き払わなければならぬ。生れてから東京以外に踏

み出したのは、同級生と一所に鎌倉へ遠足した時ばかりである。今度は鎌倉どころではない。大変な遠くへ

かまくら

行かねばならぬ。地図で見ると海浜で針の先ほど小さく見える。どうせ碌な所ではあるまい。どんな町で、

どんな人が住んでるか分らん。分らんでも困らない。心配にはならぬ。ただ行くばかりである。もつとも少々面倒臭い。

家を^{たた}畳んでからも清の所へは折々行つた。清の甥と
いうのは存外結構な人である。おれが行くたびに、居
りさえすれば、何くれと款待^{もて}なしてくれた。清はおれ
を前へ置いて、いろいろおれの自慢^{じまん}を甥に聞かせた。
今に学校を卒業すると麴町辺へ屋敷を買つて役所へ通
うのだなどと吹聴^{ふいしやう}した事もある。独りで極^きめて一人^{ひとり}で
喋^{しゃべ}舌るから、こっちは困^こまつて顔を赤くした。それも

一度や二度ではない。折々おれが小さい時寝小便をした事まで持ち出すには閉口した。甥は何と思つて清の自慢を聞いていたか分らぬ。ただ清は昔風むかしふうの女だから、自分とおれの関係を封建時代ほうけんの主従しゅじゆうのように考えていた。自分の主人なら甥のためにも主人に相違ないと合点がてんしたものらしい。甥こそいい面の皮だ。

いよいよ約束が極まつて、もう立つと云う三日前に清を尋ねたら、北向きの二畳に風邪かぜを引いて寝ていた。おれの来たのを見て起き直るが早いのか、坊っちゃんぼいっつ家うちをお持ちなさいますと聞いた。卒業さえすれば金

が自然とポケットの中に湧いて来ると思っている。そんなにえらい人をつらまえて、まだ坊っちゃんと呼ぶのはいいよ馬鹿氣ている。おれは単簡に当分うち
は持たない。田舎へ行くんだと云つたら、非常に失望した容子ようすで、胡麻塩ごましおの鬢びんの乱れをしきりに撫なでた。あまり氣の毒だから「行く事ゆは行くがじき帰る。来年の夏休みにはきつと帰る」と慰なぐさめてやった。それでも妙な顔をしているから「何を見やげに買つて来てやろう、何が欲しい」と聞いてみたら「越後えちごの笹飴ささあめが食べたい」と云つた。越後の笹飴なんて聞いた事もない。第一方

角が違ふ。「おれの行く田舎には笹飴はなさそうだ」と云つて聞かしたら「そんなら、どつちの見当です」と聞き返した。「西の方だよ」と云うと「箱根はこねのさきですか手前ですか」と問う。随分持てあました。

出立の日には朝から来て、いろいろ世話をやいた。

とちゅう

はみがき

ようじ

てぬぐい

来る途中とちゅう小間物屋で買って来た齒磨はみがきと楊子ようじと手拭てぬぐいをズツクの革鞆かばんに入れてくれた。そんな物は入らないと云つてもなかなか承知しない。車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、車へ乗り込んだおれの顔をじつと見て「もうお別れになるかも知れ

ません。随分ご機嫌きげんよう」と小さな声で云った。目に涙なみだが一杯いっぱいたまっている。おれは泣かなかった。しかもう少しで泣くところであつた。汽車がよつぽど動き出してから、もう大丈夫だいじょうぶだろうと思つて、窓から首を出して、振り向いたら、やっぱり立っていた。何だか大変小さく見えた。

二

ぶうと云いつて汽船がとまると、舢はしけが岸を離はなれて、漕こぎ

寄せて来た。船頭は真まつ裸はだかに赤ふんどしをしめている。野や蛮ばんな所だ。もつともこの熱さでは着物はきられまい。日が強いで水がやに光る。見つめていても眼めがくらむ。事務員に聞いてみるとおれはここへ降りるのだそうだ。見るところでは大森おおもりぐらいな漁村だ。人を馬鹿ばかにしていられ、こんな所に我慢がまんが出来るものかと思つたが仕方がない。威勢いせいよく一番に飛び込んだ。続つづいて五六人は乗つたろう。外に大きな箱はこを四つばかり積み込んで赤ふんは岸へ漕もとぎ戻して来た。陸おかへ着いた時も、いの一い番に飛び上がった、いきなり、磯いそに立って

いた鼻たれ小僧こぞうをつらまえて中学校はどこだと聞いた。小僧はぼんやりして、知らんがの、と云った。気の利かぬ田舎いなかものだ。猫ねこの額ぬかほどな町内の癖くせに、中学校のありかも知らぬ奴やつがあるものか。ところへ妙みょうな筒つつっぽうを着た男がきて、こっちへ来いと云うから、尾ついて行ったら、港屋とか云う宿屋へ連れて来た。やな女が声こゑを揃そろえてお上がりなさいと云うので、上がるのがいやになった。門口へ立ったなり中学校を教えろと云ったら、中学校はこれから汽車で二里ばかり行かなくつつちやいけないと聞いて、なお上がるのがいやに

なつた。おれは、筒つぽうを着た男から、おれの革靴かばんを二つ引きたくつて、のそのそあるき出した。宿屋のものは変な顔をしていた。

停車場はすぐ知れた。切符きっぷも訳なく買った。乗り込

んでみるとマッチ箱のような汽車だ。ごろごろと五分包かり動いたと思つたら、もう降りなければならぬ。

道理で切符が安いと思つた。たった三銭である。それから車を傭やとつて、中学校へ来たら、もう放課後で誰も

居ない。宿直はちよつと用達ようたしに出たと小使こづかいが教えた。

随分ずいぶん気楽な宿直がいるものだ。校長でも尋ねたずようかと

思つたが、草臥くたびれたから、車に乗つて宿屋へ連れて行
けと車夫に云い付けた。車夫は威勢よく山城屋やましろうやと云う
うちへ横付けにした。山城屋とは質屋の勘太郎かんだろうの屋号
と同じだからちよつと面白く思つた。

何だか二階の楷子段はしごだんの下の暗い部屋へ案内した。熱
くつて居られやしない。こんな部屋はいやだと云つた
らあいにくみんな塞ふさがつておりますからと云いながら
革鞆ほうを抛り出したまま出て行つた。仕方がないから部
屋の中へはいつて汗あせをかいて我慢がまんしていた。やがて湯
に入れと云うから、ざぶりと飛び込んで、すぐ上がつ

た。帰りがけに覗のぞいてみると涼すずしそうな部屋がたくさん空いている。失敬な奴だ。嘘うそをつきやあがつた。それから下女が膳ぜんを持って来た。部屋は熱あつかったが、飯は下宿のよりも大分旨うまかった。給仕をしながら下女がどちらからおいでになりましたと聞くから、東京から来たと答えた。すると東京はよい所でございましたよと云ったから当あたり前だと答えてやった。膳を下げた下女が台所へいった時分、大きな笑い声が聞きこえた。くだらないから、すぐ寝ねたが、なかなか寝られない。熱いばかりではない。騒々しい。下宿の五倍ぐらいやか

ましい。うとうとしたら清きよの夢ゆめを見た。清が越後えちごの笹飴ささあめを笹ぐるみ、むしゃむしゃ食っている。笹は毒だからよしたらよかろうと云うと、いえこの笹がお薬でございますと云いつて旨いそうに食っている。おれがあきれ返って大きな口を開いてハハハハと笑ったら眼が覚めた。下女が雨戸を明けている。相変らず空の底が突つき抜ぬけたような天気だ。

どうちゆう道中をしたら茶代をやるものだそまつと聞いていた。茶代をやらないと粗末そまつに取り扱おわれると聞いていた。こんな、狭せまくて暗い部屋へ押おし込めるのも茶代をやらない

せいだろう。見すばらしい服装なりをして、ズツクの革靴と毛繻子けじゆすの蝙蝠傘こうもりを提げてるからだろう。田舎者の癖に人を見括みくびったな。一番茶代をやつて驚おどろかしてやろう。おれはこれでも学資のあまりを三十円ほど懐ふところに入れて東京を出て来たのだ。汽車と汽船の切符代と雑費を差し引いて、まだ十四円ほどある。みんなやつたつてこれからは月給を貰もらうんだから構わない。田舎者はしみつたれだから五円もやれば驚おどろいて眼を廻まわすに極きまつている。どうするか見ろと済すまして顔を洗つて、部屋へ歸つて待つてると、夕べの下女が膳を持って来た。盆ぼん

を持つて給仕をしながら、やににやにや笑つてゐる。失敬な奴だ。顔のなかをお祭りでも通りやしまいし。これでもこの下女の面つらよりよつぽど上等だ。飯を済ましてからにしようと思つていたが、癩しやくに障さわつたから、途中で五円札さつを一枚まい出して、あとでこれを帳場へ持つて行けと云つたら、下女は変な顔をしていた。それから飯を済ましてすぐ学校へ出懸でかけた。靴くつは磨みがいてなかった。学校は昨日きのう車で乗りつけたから、大概たいがいの見当は分つてゐる。四つ角を二三度曲がったらすぐ門の前へ出た。門から玄関げんかんまでは御影石みかげいしで敷しきつめてある。きのうこ

の敷石の上を車でがらと通つた時は、無暗むやみに仰山ぎょうさんな音がするので少し弱つた。途中から小倉こくらの制服を着た生徒にたくさん逢あつたが、みんなこの門をはいつて行く。中にはおれより背が高くつて強そうなのが居る。あんな奴を教えるのかと思つたら何だか気味が悪わるくなつた。名刺めいしを出したら校長室へ通した。校長は薄髯うすひげのある、色の黒い、目の大きな狸たぬきのような男である。やにもつたいぶつていた。まあ精出して勉強してくれと云つて、恭うやうやしく大きな印の捺おさつた、辞令を渡わたした。この辞令は東京へ帰るとき丸めて海の中へ抛り込こんで

しまった。校長は今に職員に紹介しょうかいしてやるから、一々その人にこの辞令を見せるんだと云つて聞かした。余計な手数だ。そんな面倒めんどうな事をするよりこの辞令を三日間職員室へ張り付ける方がましだ。

教員が控所ひかえじよへ揃そろうには一時間目の喇叭らっぱが鳴らなくて、はならぬ。大分時間がある。校長は時計を出して見て、追々ゆると話すつもりだが、まず大体の事を呑のみ込んでおいてもらおうと云つて、それから教育の精神について長いお談義を聞かした。おれは無論いい加減に聞いていたが、途中からこれは飛んだ所へ来たと思つ

た。校長の云うようにはとても出来ない。おれみたような無鉄砲むてつぽうなものをつらまえて、生徒の模範もはんになれの、一校の師表しひょうと仰あおがれなくてはいかんの、学問以外に個人の徳化およを及およばさなくては教育者になれないの、と無暗に法外な注文をする。そんなえらい人が月給四十円で遙々こんな田舎へくるもんか。人間は大概似たもんだ。腹が立てば喧嘩けんかの一つぐらいは誰でもするだろうと思つてたが、この様子じゃめつたに口も聞けない、散歩も出来ない。そんなむずかしい役なら雇やとう前にこれこれだと話すがいい。おれは嘘うそをつくのが嫌いだか

ら、仕方がない、だまされて来たのだとあきらめて、
思い切りよく、ここで断ことわつて帰かえつちまおうと思つた。
宿屋へ五円やつたから財布さいふの中には九円なにがししか
ない。九円じゃ東京までは帰れない。茶代なんかやら
なければよかつた。惜おしい事をした。しかし九円だつ
て、どうかならない事はない。旅費は足りなくつても
嘘をつくよりましだと思つて、到底とうていあなたのおつしや
る通りにや、出来ません、この辞令は返しますと云つ
たら、校長は狸のような眼をぱちつかせておれの顔を
見ていた。やがて、今のはただ希望である、あなたが

希望通り出来ないのはよく知っているから心配しなくつてもいいと云いながら笑った。そのくらいよく知つてゐるなら、始めから威嚇おどささなければいいのに。

そう、こうする内に喇叭が鳴った。教場の方が急にがやがやする。もう教員も控所へ揃いましたらうと云うから、校長に尾いて教員控所へはいった。広い細長い部屋の周囲に机を並ならべてみんな腰こしをかけている。おれがはいったのを見て、みんな申し合せたようにおれの顔を見た。見世物じやあるまいし。それから申し付けられた通り一人一人の前へ行つて辞令を出して挨拶あいさつ

をした。大概たいがいは椅子いすを離れて腰をかがめるばかりであつたが、念の入つたのは差し出した辞令を受け取つて一応拝見をしてそれを恭うやうやしく返却へんきやくした。まるで宮芝居の真似まねだ。十五人目に体操たいそうの教師へと廻つて来た時には、同じ事を何返もやるので少々じれつたくなつた。向うは一度で済む。こつちは同じ所作しよさを十五返繰り返している。少しはひとの了見りようけんも察してみるがいい。

挨拶をしたうちに教頭のなにがしと云うのが居た。これは文学士だそうだ。文学士と云えば大学の卒業生だからえらい人なんだろう。妙みように女のような優しい声

を出す人だった。もつとも驚いたのはこの暑いのにフ
ランネルの襯衣しやつを着ている。いくら薄うすい地には相違そうい
なくつても暑いには極つてゐる。文学士だけにご苦労
千万な服装なりをしたもんだ。しかもそれが赤シャツだか
ら人を馬鹿ばかにしている。あとから聞いたらこの男は年
が年中赤シャツを着るんだそうだ。妙な病気があつた
者だ。当人の説明では赤は身体からだに薬になるから、衛生
のためにわざわざ誂あつらえるんだそうだが、入らざる心
配だ。そんならついでに着物も袴はかまも赤にすればいい。
それから英語の教師に古賀こがとか云う大変顔色の悪わるい

男が居た。大概顔の蒼いあお人は瘠やせてるもんだがこの男は蒼くふくれている。昔むかし小学校へ行く時分、浅井あさいの民たみさんと云う子が同級生にあつたが、この浅井のおやじがやはり、こんな色つやだった。浅井は百姓ひやくしやうだから、百姓になるとあんな顔になるかと清に聞いてみたら、そうじゃありません、あの人はいくらりの唐茄子とうなすばかり食べるから、蒼くふくれるんですと教えてくれた。それ以来蒼くふくれた人を見れば必ずくらなりの唐茄子を食った酬むくいだと思う。この英語の教師もくらなりばかり食つてるに違ちがひない。もつともくらなりとは何

の事か今もって知らない。清に聞いてみた事はあるが、清は笑つて答えなかつた。大方清も知らないんだらう。それからおれと同じ数学の教師に堀田ほったというのが居た。これは遅いたぐま毬栗坊主で、叡山えいざんの悪僧あくそうと云うべきつらがまえ面構である。人が町寧ていねいに辞令を見せたら見向きもせず、やあ君が新任の人か、ちと遊びに來給えきたまアハハハと云つた。何がアハハハだ。そんな礼儀れいぎを心得ぬ奴の所へ誰が遊びに行くものか。おれはこの時からこの坊主やまあらしに山嵐あだなという渾名をつけてやつた。漢学の先生はさすがに堅いかたものだ。昨日お着きで、さぞお疲れで、それ

でもう授業をお始めで、大分ご励精れいせいで、——とのべつに弁じたのは愛嬌あいきょうのあるお爺じいさんだ。画学の教師は全く芸人風だ。べらべらした透綾すきやの羽織を着て、扇子せんすをぱちつかせて、お国はどちらでげす、え？　東京？　そりや嬉しい、お仲間が出来て……私わたしもこれで江戸えどっ子ですと云った。こんなのが江戸っ子なら江戸には生れたくないもんだと心中に考えた。そのほか一人一人についてこんな事を書けばいくらでもある。しかし制限がないからやめる。

挨拶が一通り済んだら、校長が今日はもう引き取っ

てもいい、もつとも授業上の事は数学の主任と打ち合せをしておいて、明後日あさってから課業を始めてくれと云つた。数学の主任は誰かと聞いてみたら例の山嵐であつた。忌々しい、こいつの下に働くのかおやおやと失望した。山嵐は「おい君どこに宿とまつてるか、山城屋か、うん、今に行つて相談する」と云い残して白墨はくぼくを持つて教場へ出て行つた。主任の癖に向うから来て相談するなんて不見識な男だ。しかし呼び付けるよりは感心だ。

それから学校の門を出て、すぐ宿へ帰ろうと思つた

が、帰ったって仕方がないから、少し町を散歩してやろうと思つて、無暗に足の向く方があるき散らした。県庁も見た。古い前世紀の建築である。兵營も見た。あざぶ麻布のれんたい聯隊より立派でない。大通りも見た。かぐらざか神楽坂を半分に狭くしたぐらいな道幅で町並はあれより落ちる。二十五万石の城下だつて高の知れたものだ。こんな所に住んでご城下だなどと威張いばつてる人間は可哀想なものだと思えながらくると、いつしか山城屋の前に出た。広いようでも狭いものだ。これで大抵たいていは見尽みつくしたのだらう。帰って飯でも食おうと門口をはいった。

帳場に坐^{すわ}つていたかみさんが、おれの顔を見ると急に飛び出してきてお帰り……と板の間へ頭をつけた。靴を脱^ぬいで上がると、お座敷^{ざしき}があきましたからと下女が二階へ案内をした。十五畳^{じゅうごう}の表二階で大きな床^{とこ}の間^まがついている。おれは生れてからまだこんな立派な座敷へはいった事はない。この後いつはいれるか分らないから、洋服を脱いで浴衣^{ゆかた}一枚になつて座敷の真中^{まんなか}へ大の字に寝てみた。いい心持ちである。

昼飯を食つてから早速清へ手紙をかいてやった。おれは文章がまずい上に字を知らないから手紙を書くの

が大嫌いだ。だいきら またやる所もない。しかし清は心配しているだろう。難船して死にやしないかなどと思っちゃ困るから、奮発ふんぱつして長いのを書いてやった。その文句はこうである。

「きのう着いた。つまらん所だ。十五畳の座敷に寝ている。宿屋へ茶代を五円やった。かみさんが頭を板の間へすりつけた。夕べは寝られなかった。清が笹飴を笹ごと食う夢を見た。来年の夏は帰る。今日学校へ行つてみんなにあだなをつけてやった。校長は狸、教頭は赤シャツ、英語の教師はうらなり、数学は山嵐、画学

はのだいこ。今にいろいろな事を書いてやる。さようなら」

手紙をかいてしまったら、いい心持ちになつて眠氣ねむけがさしたから、最前のように座敷の真中へのびのびと大の字に寝た。今度は夢も何も見ないでぐっすり寝た。この部屋かいと大きな声がするので目が覚めたら、山嵐がはいって来た。最前は失敬、君の受持ちは……と人が起き上がるや否や談判を開かれたので大いに狼狽ろうばいした。受持ちを聞いてみると別段むずかしい事もなさそうだから承知した。このくらいの事なら、明後日は

愚、明日あしたから始めろと云ったって驚ろかない。授業上

の打ち合せが済んだら、君はいつまでこんな宿屋に居るつもりでもあるまい、僕ぼくがいい下宿しゅうせんを周旋してやるから移りたまえ。外のものでは承知しないが僕が話せばすぐ出来る。早い方がいいから、今日見て、あす移つて、あさつてから学校へ行けば極りがいいと一人で呑み込んでゐる。なるほど十五畳敷しゆくりようにいつまで居る訳にも行くまい。月給をみんな宿料しゆくりように払はらつても追つつかないかもしれない。五円の茶代ふんぱつを奮発ふんぱつしてすぐ移るのはちと残念だが、どうせ移る者なら、早く引き越こして落ち

付く方が便利だから、そのところはよろしく山嵐に頼む事にした。たのすると山嵐はともかくもいっしょに来てみると云うから、行つた。町はずれの岡の中腹にある家で至極閑静だ。かんせい主人は骨董を売買するいか銀と云う男で、女房は亭主よりも四つばかり年嵩の女だ。としかさ中学校に居た時ウィッチと云う言葉を習つた事があるがこの女房はまさにウィッチに似ている。ウィッチだつて人の女房だから構わない。とうとう明日から引き移る事にした。帰りに山嵐は通町で氷水を一杯奢つた。とおりちよう ばいおご学校で逢つた時はやに横風な失敬な奴だと思つたが、

こんなにいるろ世話をしてくれるところを見ると、
わるい男でもなさそうだ。ただおれと同じようにせつ
かちで肝癪持らしい。かんしやくもちあとで聞いたらこの男が一番生
徒に人望があるのだそうだ。

三

いよいよ学校へ出た。初めて教場へはいって高い所
へ乗った時は、何だか変だった。講釈をしながら、お
れでも先生が勤まるのかと思った。生徒はやかましい。

時々図^ず抜^ぬけた大きな声で先生と云う。先生には応^{こた}えた。今まで物理学校で毎日先生先生と呼びつけていたが、先生と呼ぶのと、呼ばれるのは雲泥^{うんでい}の差だ。何だか足の裏がむずむずする。おれは卑怯^{ひきよう}な人間ではない。臆病^{おくびよう}な男でもないが、惜^おしい事に胆力^{たんりよく}が欠けている。先生と大きな声をされると、腹の減った時に丸の内で午砲^{どん}を聞いたような気がする。最初の一時間は何だかいい加減にやってしまった。しかし別段困った質問も掛けられずに済んだ。控所^{ひかえじよ}へ帰って来たら、山嵐がどうだいと聞いた。うんと単簡に返事したら山嵐は安

心したらしかつた。

二時間目に白墨はくぼくを持つて控所を出た時には何だか敵地へ乗り込むこような気がした。教場へ出ると今度の組は前より大きな奴やつばかりである。おれは江戸えどつ子で華奢きやしやに小作りに出来ているから、どうも高い所へ上がつても押しおしが利かない。喧嘩けんかなら相撲取すもうとりとでもやつてみせるが、こんな大僧おおぞうを四十人も前へ並ならべて、ただ一枚まいの舌をたたいて恐縮きようしゆくさせる手際はない。しかしこんな田舎者いなかものに弱身を見せると癖くせになると思ったから、なるべく大きな声をして、少々巻き舌で講釈してやつ

た。最初のうちは、生徒も烟けむに捲まかれてぼんやりして
いたから、それ見るとますます得意になつて、べらん
めい調を用いてたら、一番前の列の真中まんなかに居た、一番
強そうな奴が、いきなり起立して先生と云う。そら来
たと思ひながら、何だと聞いたら、「あまり早くて分
からんけれ、もちつと、ゆるゆる遣やつて、おくれんか
な、もし」と云つた。おくれんかな、もしは生温なまぬるい
言葉だ。早過ぎるなら、ゆつくり云つてやるが、おれ
は江戸っ子だから君等きみらの言葉は使えない、分わからなけれ
ば、分るまで待つてゐるがよいと答えてやつた。この調

子で二時間目は思ったより、うまく行つた。ただ帰りがけに生徒の一人がちよつとこの問題を解釈をしておくれんかな、もし、と出来そうもない幾何きかの問題を持つて逼せまつたには冷汗ひやあせを流した。仕方がないから何だか分らない、この次教えてやると急いで引き揚げたら、生徒がわあと囁はやした。その中に出来ん出来んと云う声が聞きこえる。箠棒べらぼうめ、先生だつて、出来ないのは当り前だ。出来ないのを出来ないと言ふのに不思議があるもんか。そんなものが出来るくらいなら四十円でこんな田舎へくるもんかと控所へ歸つて来た。今度はどうだと

また山嵐が聞いた。うんと云ったが、うんだけでは気が済まなかったから、この学校の生徒は分らずやだなと云つてやった。山嵐は妙な顔みようをしていた。

三時間目も、四時間目も昼過ぎの一時間も大同小異であつた。最初の日に出た級は、いずれも少々ずつ失敗した。教師ははたで見ると楽しやないと思つた。授業はひと通り済んだが、まだ帰れない、三時までぽつ然ねんとして待つてなくてはならん。三時になると、受持級の生徒が自分の教室を掃除そうじして報知しらせにくるから検分をするんだそうだ。それから、出席簿しゅつせきぼを一応調べて

ようやくお暇ひまが出る。いくら月給で買われた身体からだだつて、あいた時間まで学校へ縛しばりつけて机と睨にらめつくらをさせるなんて法があるものか。しかしほかの連中はみんな大人おとなしくご規則通りやつてるから新参のおればかり、だだを捏こねるのもよろしくないと思つて我慢がまんしていた。帰りがけに、君何でもかんでも三時過すぎまで学校にいさせるのは愚おろかだぜと山嵐に訴えたら、山嵐はそうさアハハハと笑つたが、あとから真面目まじめになつて、君あまり学校の不平を云うと、いかんぜ。云うなら僕ぼくだけに話せ、随分ずいぶん妙な人も居るからなと忠告がましい

事を云った。四つ角で分れたから詳しい事は聞くひまがなかった。

それからうちへ帰つてくると、宿の亭主^{ていしゅ}がお茶を入れましたと云つてやつて来る。お茶を入れると云うからご馳走^{ちそう}をするのかと思うと、おれの茶を遠慮^{えんりよ}なく入れて自分が飲むのだ。この様子では留守中も勝手に^{るすちゆう}お茶を入れましょうを一人^{ひとり}で履行^{りこう}しているかも知れない。亭主が云うには手前は書画骨董^{しやがこつとう}がすきで、とうとうこんな商買を内々で始めるようになりました。あなたもお見受け申すところ大分ご風流でいらつしやるら

しい。ちと道楽にお始めなすつてはいかがですと、飛
んでもない勧誘かんゆうをやる。二年前ある人の使つかいに帝国ホテルへ行つた時は錠前じようまえ直しと間違えられた事がある。ケツトを被かぶつて、鎌倉の大仏を見物した時は車屋から親方と云われた。その外今日まで見損みそくなわれた事は随分あるが、まだおれをつらまえて大分ご風流でいらつしやると云つたものはない。大抵たいていはなりや様子でも分る。風流人なんていうものは、画えを見ても、頭巾ずきんを被かぶるか短冊たんざくを持つてゐるものだ。このおれを風流人などと真面目に云うのはただの曲者くせものじゃない。おれはそんな

呑気のんきな隠居いんきよのやるような事は嫌きらいだと云つたら、亭主はへへへと笑いながら、いえ始めから好きなものは、どなたもございせんが、いったんこの道にはいるとなかなか出られませんかと一人で茶を注いで妙な手付てつきをして飲んでゐる。実はゆうべ茶を買つてくれと頼たのんでおいたのだが、こんな苦い濃こい茶はいやだ。一杯ばい飲むと胃に答えるような気がする。今度からもつと苦くないのを買つてくれと云つたら、かしこまりましたとまた一杯しばって飲んだ。人の茶だと思つて無暗むやみに飲む奴やつだ。主人が引き下がってから、明日の下読したよみをしてす

ぐ寝^ねてしまった。

それから毎日毎日学校へ出ては規則通り働く、毎日毎日帰つて来ると主人がお茶を入れましようとして出てくる。一週間ばかりしたら学校の様子もひと通りは飲み込めたし、宿の夫婦の人物も大概^{たいがい}は分つた。ほかの教師に聞いてみると辞令を受けて一週間から一ヶ月ぐらいの間は自分の評判がいいだろうか、悪^{わる}いだろうか非常に気に掛^かかるそうであるが、おれは一向そんな感じはなかった。教場で折々しくじるとその時だけはやな心持ちだが三十分ばかり立つと奇麗^{きれい}に消えてしま

う。おれは何事によらず長く心配しようと思つても心配が出来ない男だ。教場のしくじりが生徒にどんな影響えいきようを与えて、その影響が校長や教頭にどんな反応を呈ていするかまるで無頓着むとんじやくであつた。おれは前に云う通りあまり度胸すわの据つた男ではないのだが、思い切りはすこぶるいい人間である。この学校がいけなければすぐどつかへ行く覚悟かくごでいたから、狸たぬきも赤シャツも、ちつとも恐おそろしくはなかった。まして教場の小僧こぞう共なんかに愛嬌あいきようもお世辞も使う氣になれなかった。学校はそれでいいのだが下宿の方はそうはいかなかった。亭主が

茶を飲みに来るだけなら我慢もするが、いろいろな者を持つてくる。始めに持つて来たのは何でも印材で、十ばかり並べておいて、みんなで三円なら安い物だおとお買いなさいと云う。田舎巡りのへボ絵師じゃあるまいし、そんなものは入らないと云つたら、今度は華山かざんとか何とか云う男の花鳥の掛物かけものをもつて来た。自分で床とこの間まへかけて、いい出来じゃありませんかと云うから、そうかなと好加減いかげんに挨拶あいさつをすると、華山には二人ふたりある、一人は何とか華山で、一人は何とか華山ですが、この幅ふくはその何とか華山の方だと、くだらない講釈をした

あとで、どうです、あなたなら十五円にしておきます。
お買いなさいと催促さいそくをする。金がないと断わると、金
なんか、いつでもようございますとなかなか頑固がんこだ。
金があつても買わないんだと、その時は追っ払ばらっち
まった。その次には鬼瓦おにがわらぐらいな大硯おおすずりを担ぎ込んだ。
これは端溪たんけいです、端溪ですと二遍へんも三遍も端溪がるか
ら、面白半分に端溪た何だいと聞いたら、すぐ講釈を
始め出した。端溪には上層中層下層とあつて、今時の
ものはみんな上層ですが、これはたしかに中層です、
この眼がんをご覧なさい。眼が三つあるのは珍めずらしい。

澆墨^{はつぼく}の具合も至極よろしい、試してご覧なさいと、おれの前へ大きな硯^{すずり}を突きつける。いくらだと聞くと、持主が支那^{しな}から持って帰つて来て是非売りたいと云いますから、お安くして三十円にしておきましょうと云う。この男は馬鹿^{ばか}に相違^{そうい}ない。学校の方はどうかこうか無事に勤まりそうだが、こう骨董^{こつとう}責^{ぜめ}に逢^あつてはとても長く続きそうにない。

そのうち学校もいやになつた。ある日の晩大町^{おおまち}

と云う所を散歩していたら郵便局の隣^{とな}りに蕎麦^{そば}とかいて、下に東京と注を加えた看板があつた。おれは蕎麦

が大好きである。東京に居おつた時でも蕎麦屋の前を通つて薬味の香においをかぐと、どうしても暖簾のれんがくぐりたくなつた。今日までは数学と骨董で蕎麦を忘れていたが、こうして看板を見ると素通りが出来なくなる。ついでだから一杯食つて行こうと思つて上がり込んだ。見ると看板ほどでもない。東京と断ことわる以上はもう少し奇麗にしそうなものだが、東京を知らないのか、金がないのか、滅法めつぼうきたない。昼たみは色が変わつてお負かけに砂でざらざらしている。壁かべは煤すすで真黒だ。天井てんじようはランプの油烟ゆえんで燻くすぼつてるのみか、低くつて、思わず首

を縮めるくらいだ。ただ麗々と蕎麦の名前をかいて張り付けたねだん付けだけは全く新しい。何でも古いうちを買って二三日前にさんちから開業したに違ちがいなكارう。ねだん付の第一号に天麩羅てんぶらとある。おい天麩羅を持すつてこいと大きな声を出した。するとこの時まで隅すみの方に三人かたまれんじゆうつて、何かつるつる、ちゅうちゅう食くつた連中が、ひとしくおれの方を見た。部屋へやが暗いので、ちよつと気がつかあなかつたが顔を合あせると、みんな学校の生徒である。先方ひさで挨拶あいさつをしたから、おれも挨拶をした。その晩は久ひさし振ぶりに蕎麦を食くつたので、旨うまかつ

たから天麩羅を四杯平たいらげた。

翌日何の気もなく教場へはいると、黒板一杯ぐらいな大きな字で、天麩羅先生とかいてある。おれの顔を見てみんなわあと笑った。おれは馬鹿馬鹿しいから、天麩羅を食おつちや可笑おかしいかと聞いた。すると生徒の一人ひとりが、しかし四杯は過ぎるぞな、もし、と云った。四杯食おうが五杯食おうがおれの錢でおれが食うのに文句があるもんかと、さつさと講義を済まして控所へ歸つて来た。十分立って次の教場へ出ると一つ天麩羅四杯なり。但ただし笑うべからず。と黒板にかいてある。

さつきは別に腹も立たなかつたが今度は癪しやくに障さわつた。
冗談じようだんも度を過だごせばいたずらだ。焼餅やきもちの黒焦くろこげのような
もので誰だれも賞ほめ手はない。田舎者はこの呼吸が分から
ないからどこまで押おして行つても構かまわないと云りう了ようけん
だろう。一時間あるくと見物する町もないような狭せまい
都にに住んで、外に何にも芸がないから、天麩羅事件を
日露戦争にちろのように触ふれちらかすんだろう。憐あわれな奴等やつら
だ。小供の時から、こんなに教育されるから、いやに
ひねっこびた、植木鉢うえきばちの楓かえでみたような小人しょうじんが出来るん
だ。無邪氣むじやきならいっしょに笑つてもいいが、こりやな

んだ。小供の癖くせに乙おつに毒氣を持つてゐる。おれはだまつて、天麩羅を消して、こんないたずらが面白いのか、卑怯ひきような冗談だ。君等は卑怯と云う意味を知つてゐるか、と云つたら、自分がした事を笑われて怒おこるのが卑怯じやろうがな、もしと答えた奴がある。やな奴だ。わざわざ東京から、こんな奴を教えに来たのかと思つたら情なくなつた。余計な減らず口を利かないで勉強しろと云つて、授業を始めてしまつた。それから次の教場へ出たら天麩羅を食うと減らず口が利きたくなるものなりと書いてある。どうも始末に終えない。あんま

り腹が立ったから、そんな生意気な奴は教えないと云つてすたすた歸つて来てやつた。生徒は休みになつて喜んだそうだ。こうなると学校より骨董の方がまだましだ。

天麩羅蕎麦もうちへ歸つて、一晚寝たらそんなに肝癪かんしゃくに障らなくなつた。学校へ出てみると、生徒も出ている。何だか訳が分らない。それから三日ばかりは無事であつたが、四日目の晩に住田すみたと云う所へ行つて団子だんごを食つた。この住田と云う所は温泉のある町で城下から汽車だと十分ばかり、歩いて三十分で行かれる、

料理屋も温泉宿も、公園もある上に遊廊ゆうかくがある。おれのはいった団子屋は遊廊の入口にあつて、大変うまいという評判だから、温泉に行つた歸りがけにちよつと食つてみた。今度は生徒にも逢わなかつたから、誰も知るまいと思つて、翌日学校へ行つて、一時間目の教場へはいると団子二皿さら七銭と書いてある。實際おれは二皿食つて七銭はら払つた。どうも厄介やっかいな奴等だ。二時間目にもきつと何かあると思うと遊廊の団子旨い旨いと書いてある。あきれ返つた奴等だ。団子がそれで済んだと思つたら今度は赤手拭あかてぬぐいと云うのが評判になつた。

何の事だと思つたら、つまらない来歴だ。おれはここへ来てから、毎日住田の温泉へ行く事に極^きめている。ほかの所は何を見ても東京の足元にも及^{およ}ばないが温泉だけは立派なものだ。せつかく来た者だから毎日はいってやろうという気で、晩飯前に運動かたがた出掛^{でかけ}る。ところが行くときは必ず西洋手拭の大きな奴をぶら下げて行く。この手拭が湯に染^{そま}つた上へ、赤い縞^{しま}が流れ出したのでちよつと見ると紅色^{べにいろ}に見える。おれはこの手拭を行きも帰りも、汽車に乗つてもあるいても、常にぶら下げている。それで生徒がおれの事を赤手拭

赤手拭と云うんだそうだ。どうも狭い土地に住んでるとうるさいものだ。まだある。温泉は三階の新築で上等は浴衣ゆかたをかして、流しをつけて八銭で済む。その上に女が天目てんもくへ茶を載のせて出す。おれはいつでも上等へはいった。すると四十円の月給で毎日上等へはいるのは贅沢ぜいたくだと云い出した。余計なお世話だ。まだある。湯壺ゆづぼは花崗石みかげいしを畳たたみ上げて、十五畳敷じゅうじきぐらいの広さに仕切つてある。大抵たいていは十三四人漬つかつてゐるがたまには誰も居ない事がある。深さは立って乳の辺まであるから、運動のために、湯の中を泳ぐのはなかなか愉快ゆかいだ。お

れは人の居ないのを見済みすましては十五疊の湯壺を泳ぎ巡まわつて喜んでいた。ところがある日三階から威勢いせいよく下りて今日も泳げるかなとざくろ口を覗のぞいてみると、大きな札へ黒々と湯の中で泳ぐべからずとかいて貼はりつけてある。湯の中で泳ぐものは、あまりあるまいから、この貼札はりふだはおれのために特別に新調したのかも知れない。おれはそれから泳ぐのは断念した。泳ぐのは断念したが、学校へ出てみると、例の通り黒板に湯の中で泳ぐべからずと書いてあるには驚おどろいた。何だか生徒全体がおれ一人を探偵たんでいしているように思われた。

くさくさした。生徒が何を云ったって、やろうと思つた事をやめるようなおれではないが、何でこんな狭苦しい鼻の先がつかえるような所へ来たのかと思うと情なくなつた。それでうちへ帰ると相変らず骨董責である。

四

学校には宿直があつて、職員が代る代るこれをつとめる。但し^{ただ}狸^{たぬき}と赤シャツは例外である。何でこの兩人

が当然の義務を免まぬかれるのかと聞いてみたら、
奏任待遇そうにんたいぐうだからと云う。面白くもない。月給はたくさ
んとる、時間は少ない、それで宿直を逃のがれるなんて
不公平があるものか。勝手な規則をこしらえて、それ
が当り前あたまえだというような顔をしている。よくまああんなに
ずうずうしく出来るものだ。これについては大分
不平であるが、山嵐やまあらしの説によると、いくら一人ひとりで不平
を並べたならって通るものじゃないそうだ。一人だつて
二人ふたりだつて正しい事なら通りそうなものだ。山嵐は
might is right という英語を引いて説論せつろんを加えたが、

何だか要領を得ないから、聞き返してみたら強者の権利と云う意味だそうだ。強者の権利ぐらいなら昔からわか知っている。今さら山嵐から講釈をきかなくつてもいい。強者の権利と宿直とは別問題だ。狸や赤シャツが強者だなんて、誰がだれ承知するものか。議論は議論としてこの宿直がいよいよおれの番に廻まわつて来た。一体かんしょう疝性だから夜具蒲団などは自分のものへ楽に寝ないと寝たような心持がしない。小供の時から、友達のうちでちへ泊とまつた事はほとんどないくらいだ。友達のうちでさえ厭いやなら学校の宿直はなおさら厭だ。厭だけでも、

これが四十円のうちへ籠こもっているなら仕方がない。
我慢がまんして勤めてやろう。

教師も生徒も帰ってしまったあとで、一人ぽかんと
しているのは随ずいぶん分間ぶんかんが抜ぬけたものだ。宿直部屋は教場
の裏手にある寄宿舎の西はずれの一室だ。ちよつとは
いつてみたが、西日をまともに受けて、苦しくって居
たたまれない。田舎いなかだけあつて秋がきても、気長に暑
いもんだ。生徒の賄まかを取りよせて晩飯を済ましたが、
まずいには恐れ入おそった。よくあんなものを食って、あ
れだけに暴れられたもんだ。それで晩飯を急いで四時

半に片付けてしまふんだから豪傑ごうけつに違ちがいない。飯は食ったが、まだ日が暮くれないから寝ねる訳に行かない。ちよつと温泉に行きたくなつた。宿直をして、外へ出るのはいい事だか、悪わるい事だかしらないが、こうつくねんとして重禁錮じゅうきんこ同様な憂目うきめに逢あうのは我慢の出来るもんじやない。始めて学校へ来た時当直の人とは聞いたら、ちよつと用達ようたしに出たと小使こつかいが答えたのを妙みょうだと思つたが、自分に番が廻まわつてみると思い当る。出る方が正しいのだ。おれは小使にちよつと出てくると云つたら、何かご用ですかと聞くから、用じやない、

温泉へはいるんだと答えて、さつさと出掛けた。
あかてぬぐい
赤手拭は宿へ忘れて来たのが残念だが今日は先方で借りましょう。

それからかなりゆると、出たりはいつたりして、
ひぐれがた
ようやく日暮方になったから、汽車へ乗って古町の
ていしやば
停車場まで来て下りた。学校まではこれから四丁だ。
訳はないとあるき出すと、向うから狸が来た。狸はこれからこの汽車で温泉へ行こうと云う計画なんだろう。すたすた急ぎ足にやってきたが、擦れ違すちがった時おれあいさつの顔を見たから、ちよつと挨拶をした。すると狸は

あなたは今日は宿直ではなかつたですかねえと真面目くさつて聞いた。なかつたですかねえもないもんだ。二時間前おれに向つて今夜は始めての宿直ですね。ご苦労さま。と礼を云つたじゃないか。校長なんかになるといやに曲りくねつた言葉を使うもんだ。おれは腹が立つたから、ええ宿直です。宿直ですから、これから歸つて泊る事はたしかに泊りますと云い捨てて済ましてあるき出した。豎町たてまちの四つ角までくると今度は山嵐やまあらしに出つ喰くわした。どうも狭せまい所だ。出であるきさえすれば必ず誰かに逢う。「おい君は宿直じゃないか」

と聞くから「うん、宿直だ」と答えたら、「宿直が
無暗むやみに出てあるくなんて、不都合ふつごうじゃないか」と云つ
た。「ちつとも不都合なもんか、出てあるかない方が
不都合だ」と威張いばつてみせた。「君のずばらにも困るな、
校長か教頭に出逢うと面倒めんどうだぜ」と山嵐に似合わない
事を云うから「校長にはたった今逢つた。暑い時には
散歩でもしないと宿直も骨でしょうと校長が、おれの
散歩をほめたよ」と云つて、面倒臭くさいから、さつさと
学校へ歸つて来た。

それから日はすぐくれる。くれてから二時間ばかり

は小使を宿直部屋へ呼んで話をしたが、それも飽きたから、寝られないまでも床へはいろいろと思つて、寝巻に着換えて、蚊帳を捲くつて、赤い毛布を跳ねのけて、とんと尻持を突いて、仰向けになつた。おれが寝るときにとんと尻持をつくのは小供の時から癖だ。わるい癖だと云つて小川町おがわまちの下宿に居た時分、二階下に居た法律学校の書生が苦情を持ち込んだ事がある。法律の書生なんてものは弱い癖に、やに口が達者なもので、愚な事を長たらしく述べ立てるから、寝る時にどんどん音がするのはおれの尻がわるいのじゃない。下宿の

建築が粗末そまつなんだ。掛かケ合うなら下宿へ掛かケ合えと凹へこましてやった。この宿直部屋は二階じゃないから、いくら、どしんと倒たおれても構たがわない。なるべく勢いきおいよく倒れないと寝たような心持ちがしない。ああ愉快だと足をうんと延ばすと、何だか両足へ飛び付いた。さらさらして蚤のみのようでもないからこいつあと驚おどろいて、足を二三度毛布けつとの中で振ふつてみた。するとさらさらと当あったものが、急に殖ふえ出して脛すねが五六カ所、股ももが二三カ所、尻の下でぐちゃりと踏ふみ潰つぶしたのが一つ、臍へその所まで飛び上がったのが一つ——いいいよ驚おどろい

た。早速^{さつそく}起き上^{あが}つて、毛布^{けつと}をぱつと後ろへ抛^{ほう}ると、蒲団の中から、バツタが五六十飛び出した。正体の知れない時は多少気味が悪^{わる}るかつたが、バツタと相場が極まってみたら急に腹が立つた。バツタの癖に人を驚ろかしやがつて、どうするか見ると、いきなり括^{くく}り枕^{まくら}を取つて、二三度擲^たきつけたが、相手が小さ過ぎるから勢よく抛^なげつける割に利目^{ききめ}がない。仕方がないから、また布団の上へ坐^{すわ}つて、煤掃^{すすはき}の時に塵^{ごじ}を丸めて畳^{たたみ}を叩^{たた}くように、そこら近辺を無暗にたたいた。バツタが驚ろいた上に、枕の勢で飛び上がるものだから、おれの

肩^{かた}だの、頭だの鼻の先だのへくっ付いたり、ぶつかつたりする。顔へ付いた奴^{やつ}は枕で叩く訳に行かないから、手で攫^{つか}んで、一生懸命に擲きつける。忌々しい事に、いくら力を出しても、ぶつかる先が蚊帳だから、ふわりと動くだけで少しも手答がない。バツタは擲きつけられたまま蚊帳へつらまっている。死にもどうもしない。ようやくの事に三十分ばかりでバツタは退治^{たいじ}た。箒^{ほうき}を持って来てバツタの死骸^{しがい}を掃き出した。小使が来て何ですかと云うから、何ですかもあるもんか、バツタを床の中に飼^かつとく奴がどこの国にある。間拔^{まぬけ}め。

と叱^{しか}つたら、私は存じませんと弁解をした。存じませんで済むかと箒^{えんがわ}を椽側^{ほう}へ抛り出したら、小使は恐る恐る箒を担いで帰って行つた。

おれは早速寄宿生を三人ばかり総代に呼び出した。すると六人出て来た。六人だろうが十人だろうが構うものか。寝巻のまま腕^{うで}まくりをして談判を始めた。

「なんでバツタなんか、おれの床の中へ入れた」

「バツタた何ぞな」と真先^{まつさき}の一人がいった。やに落ち付いていやがる。この学校じゃ校長ばかりじゃない、生徒まで曲りくねつた言葉を使うんだろう。

「バツタを知らないのか、知らなけりや見せてやろう」と云ったが、生憎掃あいにくき出してしまつて一匹びきも居ない。また小使を呼んで、「さつきのバツタを持つてこい」と云つたら、「もう掃溜はきだめへ棄すててしまいましたが、拾つて参りましょうか」と聞いた。「うんすぐ拾つて来い」と云うと小使は急いで馳かけ出したが、やがて半紙の上へ十匹ばかり載のせて来て「どうもお気の毒ですが、生憎夜でこれだけしか見当りません。あしたになりました。たらもつと拾つて参ります」と云う。小使まで馬鹿ばかだ。おれはバツタの一つを生徒に見せて「バツタたこれだ、

大きなずう体をして、バツタを知らないた、何の事だ」と云うと、一番左の方に居た顔の丸い奴が「そりや、イナゴぞな、もし」と生意気におれを遣り込めた。『篋棒め、イナゴもバツタも同じもんだ。第一先生を捕まえてなもした何だ。菜飯は田楽の時より外に食うもんじやない」とあべこべに遣り込めてやったら「なもしと菜飯とは違うぞな、もし」と云った。いつまで行ってもなもしを使う奴だ。

「イナゴでもバツタでも、何でおれの床の中へ入れたんだ。おれがいつ、バツタを入れてくれと頼んだ」

「誰も入れやせんがな」

「入れないものが、どうして床の中に居るんだ」

「イナゴは温ぬくい所が好きじゃけれ、大方一人でおはいりたのじゃある」

「馬鹿あ云え。バツタが一人でおはいりになるなんて——バツタにおはいりになられてたまるもんか。——

さあなぜこんないたずらをしたか、云え」

「云えてて、入れんものを説明しようがないがな」

けちな奴等やつらだ。自分で自分のした事が云えないくらいなら、てんでしないがいい。証しょうこ拠こさえ挙がらなければ

ば、しらを切るつもりで図太く構えていやがる。おれだつて中学に居た時分は少しはいたずらもしたもんだ。しかしだれがしたと聞かれた時に、尻込みをするような卑怯な事はただの一度もなかった。したものはひきようしたので、しないものはしないに極きまつてる。おれなんぞは、いくら、いたずらをしたつて潔白なものだ。嘘を吐ついて罰ばつを逃にげるくらいなら、始めからいたずらなんかやるものか。いたずらと罰はつきもんだ。罰があるからいたずらも心持ちよく出来る。いたずらだけで罰はご免蒙めんこうむるなんて下劣げれつな根性がどこの国に流行はやると

思ってるんだ。金は借りるが、返す事はご免だと云う連中はみんな、こんな奴等が卒業してやる仕事に相違そういない。全体中学校へ何しにはいってるんだ。学校へはいつて、嘘を吐いて、胡魔化ごまかして、陰でこせこせ生意気な悪いたずらをして、そうして大きな面で卒業すれば教育を受けたもんだと癩違かんちがいをしていやがる。話せない雑兵だ。ぞうひよう

おれはこんな腐くさった了見りようけんの奴等と談判するのは胸糞むなくそが悪わるいから、「そんなに云われなきや、聞かなくつていい。中学校へはいつて、上品も下品も区別が出来

ないのは気の毒なものだ」と云つて六人を逐つ放して
やつた。おれは言葉や様子こそあまり上品じゃないが、
心はこいつらよりも遥かに上品なつもりだ。六人は
悠々と引き揚げた。上部だけは教師のおれよりよっぽ
どえらく見える。実は落ち付いているだけなお悪るい。
おれには到底これほどの度胸はない。

それからまた床へはいつて横になつたら、さっきの
騒動で蚊帳の中はぶんぶん唸っている。手燭をつけて
一匹ずつ焼くなんて面倒な事は出来ないから、釣手を
はずして、長く畳んでおいて部屋の中で横堅十文字に

振ふるつたら、環かんが飛んで手の甲こうをいやというほど撲ぶつた。三度目に床へはいった時は少々落ち付いたがなかなか寝られない。時計を見ると十時半だ。考えてみると厄介な所へ来たもんだ。一体中学の先生なんて、どこへ行っても、こんなものを相手にするなら気の毒なものだ。よく先生が品切れにならない。よつぽど辛防しんぼう強い朴ぼく念仁ねんじんがなるんだろう。おれには到底やり切れない。それを思うと清きよなんてのは見上げたものだ。教育もない身分もない婆ばあさんだが、人間としてはすこぶる尊たつとしい。今まではあんなに世話になって別段難有ありがたいとも思

わなかつたが、こうして、一人で遠国へ来てみると、始めてあの親切がわかる。越後えちごの笹飴ささあめが食いたければ、わざわざ越後まで買いに行つて食わしてやつても、食わせるだけの価値は充分ある。清はおれの事を欲がなまっすぐくつて、真直な気性だと云つて、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ。何だか清に逢いたくなつた。

清の事を考えながら、のつそつしていると、突然おれとつぜんの頭の上で、数で云つたら三四十人もあるうか、二階が落つこちるほどどん、どん、どんと拍子ひょうしを取つて

床板を踏みならす音がした。すると足音に比例した大きなとき関おこの声が上がった。おれは何事が持ち上がったのかと驚ろいて飛び起きた。飛び起きる途端とたんに、ははあさつきの意趣返いしゆがえしに生徒があばれるのだなと気がついた。手前のわるい事は悪るかつたと言つてしまわないうちは罪は消えないもんだ。わるい事は、手前達おぼえに覚があるだろう。本来なら寝てから後悔こうかいしてあしたの朝でもあやまりに来るのが本筋だ。たとい、あやまらないまでも恐れ入つて、静肅せいしゆくに寝ているべきだ。それを何だこの騒さわぎは。寄宿舎を建てて豚ぶたでも飼つておきあしま

いし。きちが気狂いじみた真似まねも大抵たいていにするがいい。どうするか見ると、寝巻のまま宿直部屋を飛び出して、はしごだん楷子段を三股半に二階まで躍り上おどがった。すると不思議な事に、今まで頭の上で、たしかにどたばた暴れていたのが、急に静まり返って、人声どころか足音もしなくなった。これは妙だ。ランプはすでに消してあるから、暗くてどこに何が居るか判然と分わからないが、ひとけ人気のあるとはいとは様子でも知れる。長く東から西へ貫つらぬいた廊下ろうかには鼠ねずみ一匹びきも隠かくれていない。廊下のはずれから月がさして、遙か向うが際どく明るい。どうも

変だ、おれは小供の時から、よく夢を見る癖があつて、
夢中^{むちゆう}に跳ね起きて、わからぬ寢言を云つて、人に笑わ
れた事がよくある。十六七の時ダイヤモンドを拾つた
夢を見た晩なぞは、むくりと立ち上がつて、そばに居
た兄に、今のダイヤモンドはどうしたと、非常な勢^{いきおい}で
尋ね^{たず}たくらいだ。その時は三日ばかりうち中の笑^{じゆう}い草
になつて大いに弱つた。ことによると今のも夢かも知
れない。しかしたしかにあばれたに違いないがと、廊
下の真中^{まんなか}で考え込んでいると、月のさしている向うの
はずれで、一二三わあと、三四十人の声がかたまつて

響^{ひび}いたかと思う間もなく、前のように拍子を取って、一同が床板^{ゆかいた}を踏み鳴らした。それ見る夢じゃないやっぱり事実だ。静かにしろ、夜なかだぞ、とこつちも負けんくらいな声を出して、廊下を向うへ馳^かけだした。おれの通る路^{みち}は暗い、ただはずれに見える月あかりが目標^{めじるし}だ。おれが馳^かけ出して二間も来たかと思うと、廊下の真中で、堅^{かた}い大きなものに向脛^{むこうずね}をぶつけて、あ痛^{いた}いが頭へひびく間に、身体はすんと前へ抛^{ほう}り出された。こん畜生^{ちきしょう}と起き上がって見たが、馳^かけられない。気はせくが、足だけは云う事を利かない。じれったい

から、一本足で飛んで来たら、もう足音も人声も静まり返って、森しんとしている。いくら人間が卑怯だつて、こんなに卑怯に出来るものじゃない。まるで豚だ。こ
うなれば隠れている奴を引きずり出して、あやまらせ
てやるまではひかないぞと、心を極めて寢室しんしつの一つを
開けて中を検査しようと思つたが開かない。錠じょうをかけ
てあるのか、机か何か積んで立て懸かけてあるのか、押
しても、押しても決して開かない。今度は向う合せの
北側の室へやを試みた。開かない事はやつぱり同然である。
おれが戸を開けて中に居る奴を引つ捕つからまえてやろう

と、焦慮いらつてると、また東のはずれで関の声と足拍子が始まった。この野郎やろう申し合せて、東西相応じておれを馬鹿にする気だな、とは思ったがさてどうしていいか分らない。正直に白状してしまうが、おれは勇氣のある割合に智慧ちえが足りない。こんな時にはどうしていいかさっぱりわからない。わからないけれども、決して負けるつもりはない。このままに済ましてはおれの顔にかかわる。江戸えどっ子は意気地いくじがないと云われるのは残念だ。宿直をして鼻垂れはなつた小僧こぞうにからかわれて、手のつけようがなくって、仕方がないから泣き寝入りにし

たと思われちゃ一生の名折れだ。これでも元は旗本だ。はたもと
旗本の元は清和源氏せいわけんじで、多田ただの満仲まんじゆうの後裔こうえいだ。こんな
土百姓どひやくしやうとは生まれからして違うんだ。ただ智慧のない
ところが惜しいだけだ。どうしてもいいか分らないのが
困るだけだ。困ったって負けるものか。正直だから、
どうしてもいいか分らないんだ。世の中に正直が勝たな
いで、外に勝つものがあるか、考えてみる。今夜中に
勝てなければ、あした勝つ。あした勝てなければ、あ
さって勝つ。あさって勝てなければ、下宿から弁当を
取り寄せて勝つまでここに居る。おれはこう決心をし

たから、廊下の真中へあぐらをかいて夜のあけるのを待っていた。蚊がぶんぶん来たけれども何ともなかった。さつき、ぶつけた向脛を撫なでてみると、何だかぬらぬらする。血が出るんだろう。血なんか出たければ勝手に出るがいい。そのうち最前からの疲れつかが出て、ついうとうと寝てしまった。何だか騒がしいので、眼めが覚めた時はえっ糞くそしまったと飛び上がった。おれの坐すわつてた右側にある戸が半分あいて、生徒が二人、おれの前に立っている。おれは正気に返って、はっと思ふ途端に、おれの鼻の先にある生徒の足を引ひつ攫つかんで、

力任せにぐいと引いたら、そいつは、どたりと仰向あおむけに倒れた。ざまを見る。残る一人がちよつと狼狽ろうばいしたところを、飛びかかつて、肩を抑おさえて二三度こづき廻したら、あつけに取られて、眼をぱちぱちさせた。さあおれの部屋まで来いと引つ立てると、弱虫だと見えて、一も二もなく尾ついて来た。夜よはどうにあけている。

おれが宿直部屋へ連れてきた奴を詰問きつもんし始めると、豚は、打ぶつても擲ないても豚だから、ただ知らんがなで、どこまでも通す了見と見えて、けっして白状しない。そのうち一人来る、二人来る、だんだん二階から宿直

部屋へ集まつてくる。見るとみんな眠ねむそうに瞼まぶたをはらしている。けちな奴等だ。一晩ぐらい寝ないで、そんな面をして男と云われるか。面でも洗つて議論に來いと云つてやったが、誰も面を洗いに行かない。

おれは五十人あまりを相手に約一時間ばかり押問答おしもんどうをしていると、ひょつくり狸がやつて來た。あとから聞いたら、小使が学校に騒動がありますって、わざわざ知らせに行つたのだそうだ。これしきの事に、校長を呼ぶなんて意気地がなさ過ぎる。それだから中学校の小使なんぞをしてるんだ。

校長はひと通りおれの説明を聞いた。生徒の言草も
ちよつと聞いた。追つて処分するまでは、今まで通り
学校へ出る。早く顔を洗つて、朝飯を食わないと時間
に間に合わないから、早くしろと云つて寄宿生をみんな
放免ほうめんした。手温てぬるい事だ。おれなら即席そくせきに寄宿生を
ことごとく退校してしまふ。こんな悠長ゆうちやうな事をするか
ら生徒が宿直員を馬鹿にするんだ。その上おれに向つ
て、あなたもさぞご心配でお疲れでしょう、今日はご
授業に及およばんと云うから、おれはこう答えた。「いえ、
ちつとも心配じゃありません。こんな事が毎晩あつて

も、命のある間は心配にやなりません。授業はやりま
す、一晩ぐらい寝なくって、授業が出来ないくらいな
ら、頂戴ちやうだいした月給を学校の方へ割戻わりもとします」校長は何
と思つたものか、しばらくおれの顔を見つめていたが、
しかし顔が大分はれていますよと注意した。なるほど
何だか少々重たい気がする。その上べた一面痒かゆい。蚊
がよつぽと刺さしたに相違ない。おれは顔中ぼりぼり搔か
きながら、顔はいくら膨はれたつて、口はたしかにきけ
ますから、授業には差し支つかえませんと答えた。校長は
笑いながら、大分元気ですなと賞ほめた。実を云うと賞

めたんじやあるまい、ひやかしたんだろう。

五

君釣りに行きませんかと赤シャツがおれに聞いた。赤シャツは気味の悪^わるいように優しい声を出す男である。まるで男だか女だか分^{わか}りやしない。男なら男らしい声を出すもんだ。ことに大学卒業生じゃないか。物理学校でさえおれくらいな声が出るのに、文学士がこれじゃ見つともない。

おれはそうですねあと少し進まない返事をしたら、君釣をした事がありますかと失敬な事を聞く。あんまりないが、子供の時、小梅こうめの釣堀つりぼりで鮒ふなを三匹びき釣った事がある。それから神楽坂かぐらざかの毘沙門びしゃもんの縁日えんいちで八寸ばかりの鯉こいを針で引っかけて、しめたと思ったら、ぽちやりと落としてしまったがこれは今考えても惜おしいと云いつたら、赤シャツは顎あごを前の方へ突つき出してホホホホと笑った。何もそう気取って笑わなくつても、よさそうな者だ。「それじゃ、まだ釣りの味は分らんですな。お望みならちと伝授しましょう」とすこぶる得意であ

る。だれがご伝授をうけるものか。一体釣や猟りようをする連中はみんな不人情な人間ばかりだ。不人情でなくつて、殺生せつしようをして喜ぶ訳がない。魚だつて、鳥だつて殺されるより生きてる方が楽に極きまつてる。釣や猟をしなくつちや活計かつけいがたたないなら格別だが、何不足なく暮くらしている上に、生き物を殺さなくつちや寝られないなんて贅沢ぜいたくな話だ。こう思ったが向うは文学士むこだけに口が達者だから、議論じゃ叶かなわないと思つて、だまつた。すると先生このおれを降参させたと疇違かんちがいして、早速伝授しましょう。おひまなら、今日どうです、いつ

しよに行つちや。吉川君よしかわと二人ふたりぎりじや、淋さむしいから、
来たまえとしきりに勧める。吉川君というのは画学の
教師で例の野だいこの事だ。この野だは、どうい
う見りようけんだか、赤シャツのうちへ朝夕出入でいりして、どこへで
も随ずい行こうして行く。まるで同輩どうはいじゃない。主従しゆうじゆうみたよう
だ。赤シャツの行く所なら、野だは必ず行くに極きまつて
いるんだから、今さら驚おどろきもしないが、二人で行け
ば済むところを、なんで無愛想ぶあいそのおれへ口を掛かけたん
だろう。大方高慢こうまんちきな釣道楽で、自分の釣るところ
をおれに見せびらかすつもりかなんかで誘さそつたに違い

ない。そんな事で見せびらかされるおれじゃない。鮪まぐろの二匹や三匹釣ったって、びくともするもんか。おれだつて人間だ、いくら下手へただつて糸さえ卸おろしや、何かかかるだろう、ここでおれが行かないと、赤シャツの事だから、下手だから行かないんだ、嫌きらいだから行かないんじゃないと邪推じゃすいするに相違そういない。おれはこう考えたから、行きましたと答えた。それから、学校をしまつて、一応うちへ歸つて、支度したくを整えて、停車場で赤シャツと野だを待ち合せて浜はまへ行つた。船頭は一人ひとりで、船ふねは細長い東京辺では見た事もない恰好かつこうであ

る。さつきから船中見渡すが釣竿が一本も見えない。釣竿なしで釣が出来るものか、どうする了見だろうと、野だに聞くと、沖釣には竿は用いませぬ、糸だけでぐすと鰓を撫でて黒人じみた事を云った。こう遣り込められるくらいならだまっていればよかった。

船頭はゆつくりゆつくり漕いでいるが熟練は恐いもので、見返えると、浜が小さく見えるくらいもう出ている。高柏寺の五重の塔が森の上へ抜け出して針のように尖がってる。向側を見ると青嶋が浮いている。これは人の住まない島だそうだ。よく見ると石と松ば

かりだ。なるほど石と松ばかりじゃ住めっこない。赤シャツは、しきりに眺望ちやうぼうしていい景色だと云ってる。野だは絶景でげすと云ってる。絶景だか何だか知らないが、いい心持ちには相違ない。ひろびろとした海の上で、潮風に吹ふかれるのは葉だと思った。いやに腹が減る。「あの松を見たまえ、幹が真直まっすぐで、上が傘かさのよう

うに開いてターナーの画にありそうだね」と赤シャツが野だに云うと、野だは「全くターナーですね。どうもあの曲り具合ったらありませんね。ターナーそっくりですよ」と心得顔である。ターナーとは何の事だか

知らないが、聞かないでも困らない事だから黙だまつていた。舟は島を右に見てぐるりと廻まわった。波は全くない。これで海だとは受け取りにくいほど平たいらだ。赤シャツのお陰かげではなはだ愉快ゆかいだ。出来る事なら、あの島の上へ上がってみたいと思つたから、あの岩のある所へは舟はつけられないんですかと聞いてみた。つけられん事もないですが、釣をするには、あまり岸じゃいけないですと赤シャツが異議を申し立てた。おれは黙つてた。すると野だがどうです教頭、これからあの島をターナー島と名づけようじゃありませんかと余計な発議ほつぎを

した。赤シャツはそいつは面白い、吾々はこれからそう云おうと賛成した。この吾々のうちにおれもはいつてるなら迷惑だ。めいわく おれには青嶋でたくさんだ。あの岩の上に、どうです、ラフハエルのマドンナを置いて。いい画が出来ますぜと野だが云うと、マドンナの話はよそうじゃないかホホホと赤シャツが気味の悪い笑い方をした。なに誰も居ないから大丈夫ですと、だいじょうぶ ちよつとおれの方を見たが、わざと顔をそむけてにやにやと笑った。おれは何だかやな心持ちがした。マドンナだろうが、こだんな 小旦那だろうが、おれの関係した事で

ないから、勝手に立たせるがよからうが、人に分らない事を言つて分らないから聞いたつて構やしません。えような風をする。下品な仕草だ。これで当人は私も江戸っ子でげすなどと云つてゐる。マドンナと云うのは何でも赤シャツの馴染なじみの芸者の渾名あだなか何かに違ひないと思つた。なじみの芸者を無人島の松の木の下に立たして眺めていれば世話はない。それを野だが油絵にでもかいて展覧会へ出したらよからう。

ここいらがいいだろうと船頭は船をとめて、錨いかりを卸した。幾尋いくひろあるかねと赤シャツが聞くと、六尋むひろぐらい

だと云う。六尋ぐらいじゃ鯛たいはむずかしいなと、赤シャツは糸を海へなげ込んだ。大將鯛を釣る氣と見える、豪胆ごうたんなものだ。野だは、なに教頭のお手際じゃかかりますよ。それになぎですからとお世辞を云いながら、これも糸を繰くり出して投げ入れる。何だか先に錘おもりのよな鉛なまりがぶら下がってただけだ。浮うきがない。浮がなくつて釣をするのは寒暖計なしで熱度をはかるようなものだ。おれには到底とうてい出来ないと見ていると、さあ君もやりたまえ糸はありますかと聞く。糸はあまるほどあるが、浮がありませんと云ったら、浮がなくつちや釣が

出来ないのは素人しろうとですよ。こうしてね、糸が水底みずそこへついた時分に、船縁ふなべりの所で人指しゆびで呼吸をはかるんです、食うとすぐ手に答える。——そらきた、と先生急に糸をたぐり始めるから、何かかかったと思ったら何にもかからない、餌えがなくなつてたばかりだ。いい気味きびだ。教頭、残念な事をしましたね、今のはたしかに大ものに違いなかつたんですが、どうも教頭のお手際でさえ逃にげられちゃ、今日は油断ができませんよ。しかし逃げられても何ですね。浮と睨にらめくらをしていゝる連中よりはましですね。ちようど歯どめがなくつ

ちや自転車へ乗れないのと同程度ですからねと野だは妙みょうな事ばかり喋しゃべ舌る。よつぽど撲なぐりつけてやろうかと思つた。おれだつて人間だ、教頭ひとりで借り切つた海じやあるまいし。広い所だ。鰹かつおの一匹ぐらい義理にだつて、かかつてくれるだろうと、どぼんと錘と糸を抛ほうり込んでいい加減に指の先であやつつていた。

しばらくすると、何だかぴくぴくと糸にあたるものがある。おれは考えた。こいつは魚に相違ない。生きてるものでなくつちや、こうぴくつく訳がない。しめた、釣れたとぐいぐい手繰たぐり寄せた。おや釣れました

かね、後世おそ恐るべしだと野だがひやかすうち、糸はもう大概手繰り込んでただ五尺ばかりほどしか、水に浸ひいておらん。船縁から覗のぞいてみたら、金魚のような縞しまのある魚が糸にくつついて、右左へ漾ただよいながら、手に応じて浮き上がってくる。面白い。水際から上げるとき、ぽちやりと跳はねたから、おれの顔は潮水だらけになった。ようやくつらまえて、針をとろうとするがなかなか取れない。捕つかまえた手はぬるぬるする。大いに気味がわるい。面倒だから糸を振ふって胴どうの間まへ擲たきつけたら、すぐ死んでしまった。赤シャツと野だは驚ろ

いて見ている。おれは海の中で手をぎゅぎゅと洗つて、鼻の先へあてがつてみた。まだ腥臭い。もう懲り懲りだ。何が釣れたつて魚は握りたくない。魚も握られなくなろう。そうそう糸を捲いてしまった。

一番槍は手柄だがゴルキじや、と野だがまた生意氣を云うと、ゴルキと云うと露西亞の文学者みたような名だねと赤シャツが洒落た。そうですね、まるで露西亞の文学者ですねと野だはすぐ賛成しやがる。ゴルキが露西亞の文学者で、丸木が芝の写真師で、米のなる木が命の親だろう。一体この赤シャツはわるい癖だ。

誰だれを捕つらまえても片仮名の唐人とうじんの名を並べたがる。人にはそれぞれ専門があつたものだ。おれのような数学の教師にゴルキだか車力しやりきだか見当がつくものか、少しは遠慮えんりよするがいい。云いうならフランクリンの自伝だとかプッシング、ツー、ゼ、フロントだとか、おれでも知つてる名を使うがいい。赤シャツは時々帝国文学とかいう真ま赤っかな雑誌を学校へ持つて来て難有ありがたそうに読んでいやまあらしる。山嵐に聞いてみたら、赤シャツの片仮名はみんなあの雑誌から出るんだそうだ。帝国文学も罪な雑誌だ。それから赤シャツと野いっしょうけんめいだは一生懸命に釣つっていた

が、約一時間ばかりのうちに二人で十五六上げた。
可笑^{おか}しい事に釣れるのも、釣れるのも、みんなゴルキ
ばかりだ。鯛なんて薬にしたくつてもありやしない。
今日は露西亞文学の大当りだと赤シャツが野だに話し
ている。あなたの手腕^{しゅわん}でゴルキなんですから、私^{わたし}なん
ぞがゴルキなのは仕方ありません。当り前ですなど
野だが答えている。船頭に聞くとこの小魚は骨が多
くつて、まずくつて、とても食えないんだそうだ。た
だ肥料^{こやし}には出来るそうだ。赤シャツと野だは一生懸命
に肥料を釣っているんだ。気の毒の至りだ。おれは一

匹で懲りたから、胴の間へ仰向けになつて、さつきから大空を眺めていた。釣をするよりこの方がよっぽど洒落ている。

すると二人は小声で何か話し始めた。おれにはよく聞えない、また聞きたくもない。おれは空を見ながら清の事を考えている。金があつて、清をつれて、こんな奇麗な所へ遊びに来たらさぞ愉快だろう。いくら景色がよくつても野だなどといつしよじゃつまらない。清は皺苦茶だらけの婆さんだが、どんな所へ連れて出たつて恥ずかしい心持ちはしない。野だのようなのは、

馬車に乗ろうが、船に乗ろうが、りよううんかく凌雲閣へのろうが、到底寄り付けたものじゃない。おれが教頭で、赤シャツがおれだったら、やっぱりおれにへけつけお世辞を使つて赤シャツを冷かすに違いない。ひや江戸っ子は軽薄だけいはくと云うがなるほどこんなものが田舎巡りをして、私わたしは江戸っ子でげすと繰り返していたら、軽薄は江戸っ子で、江戸っ子は軽薄の事だと田舎者が思うに極まつてる。こんな事を考えていると、何だか二人がくすくす笑い出した。笑い声の間に何か云うが途切れ途切れとぎでとんと要領を得ない。

「え？　どうだか……」「……全くです……知らないんですから……罪ですね」「まさか……」「バツタを……本当ですよ」

おれは外の言葉には耳を傾け^{かたむ}なかつたが、バツタと云う野だの語^{ことば}を聴^きいた時は、思わずきつとなつた。野だは何のためかバツタと云う言葉だけことさら力を入れて、明瞭^{めいりょう}におれの耳にはいるようにして、そのあとをわざとぼかしてしまった。おれは動かないでやはり聞^きいていた。

「また例の堀^ほ田^{った}が……」「そうかも知れない……」

「天麩羅……ハハハハハ」……煽動して……」「団子
も？」

言葉はかように途切れ途切れであるけれども、バツ
ただの天麩羅だの、団子だのというところをもつて推
し測ってみると、何でもおれのことについて内所話し
をしているに相違ない。話すならもつと大きな声で話
すがいい、また内所話をするくらいなら、おれなんか
誘わなければいい。いけ好かない連中だ。バツタだろ
うが雪踏せっただろうが、非はおれにある事じゃない。校長
がひとまずあずけろと云ったから、狸たぬきの顔にめんじて

ただ今のところは控^{ひか}えているんだ。野だの癖に入らぬ批評をしやがる。毛筆^{けふで}でもしやぶつて引つ込んでるがいい。おれの事は、遅^{おそ}かれ早かれ、おれ一人で片付けてみせるから、差支^{さしつか}えはないが、また例の堀田がとか煽^{せん}動^{どう}してとか云う文句が気にかかる。堀田がおれを煽^{せん}動^{どう}して騒動^{そうどう}を大きくしたと云う意味なのか、あるいは堀田が生徒を煽動しておれをいじめたと云うのか方角がわからない。青空を見ていると、日の光がだんだん弱^{よわ}つて来て、少しはひやりとする風が吹き出した。線香^{せんこう}の烟^{けむり}のような雲が、透^すき徹^{とと}る底の上を静かに伸^のし

て行つたと思つたら、いつしか底の奥おくに流れ込んで、うすくもやを掛かけたようになつた。

もう帰ろうかと赤シャツが思い出したように云うと、ええちようど時分ですね。今夜はマドンナの君にお逢あいですかと野だが云う。赤シャツは馬鹿ばかあ云つちやいけない、間違まちがいになると、船縁ふねのへりに身を倚もたした奴やつを、少し起き直る。エへへへ大丈夫ですよ。聞いたつて……と野だが振り返つた時、おれは皿さらのような眼めを野だの頭の上へまともに浴びせ掛けてやった。野だはまぼしそうに引つ繰り返つて、や、こいつは降参

だと首を縮めて、頭を搔かいた。何という猪口才ちよこざいだろう。船は静かな海を岸へ漕こぎ戻もどる。君釣つりはあまり好きでないと見えますねと赤シャツが聞くから、ええ寝ねて空を見る方がいいですと答えて、吸いかけた巻烟草まきたばこを海の中へたたき込んだら、ジュと音がして艀ろの足で掻き分けられた浪なみの上を揺ゆられながら漾ただよっていった。「君が来たんで生徒も大いに喜んでゐるから、奮発ふんぱつしてやつてくれたまえ」と今度は釣にはまるで縁故えんこもない事を云い出した。「あんまり喜んでもないでしょう」「いえ、お世辞せじじゃない。全く喜んでゐるんです、ね、

吉川君「喜んでるところじゃない。大騒ぎおおさわです」と
野だはにやにやと笑った。こいつの云う事は一々癪しゃくに
障さわるから妙だ。「しかし君注意しないと、けんのん 険呑ですよ」
と赤シャツが云うから「どうせ険呑です。こうなりや
険呑は覚悟かくごです」と云ってやった。実際おれは免職めんしよくに
なるか、寄宿生をことごとくあやまらせるか、どっち
か一つにする了見でいた。「そう云っちゃ、取りつき
どころもないが——実は僕も教頭として君のためを思
うから云うんだが、わるく取っちゃ困る」およ「教頭は全
く君に好意を持ってるんですよ。僕も及およばずながら、

同じ江戸っ子だから、なるべく長くご在校を願つて、
お互^{たがい}に力になろうと思つて、これでも蔭ながら^{じんりよく}尽力し
ているんですよ」と野だが人間並^{なみ}の事を云つた。野だ
のお世話になるくらいなら首を縊^{くく}つて死んじまわあ。
「それでね、生徒は君の来たのを大變歡迎^{かんげい}しているん
だが、そこにはいろいろな事情があつてね。君も腹の
立つ事もあるだろうが、ここが我慢^{がまん}だと思つて、辛防^{しんぼう}
してくれたまえ。決して君のためにならないような事
はしないから」

「いろいろの事情だ、どんな事情です」

「それが少し込み入ってるんだが、まあだんだん分りますよ。僕がほく話さないでも自然と分って来るです、ね
吉川君」

「ええなかなか込み入ってますからね。一朝一夕にや到底分りません。しかしだんだん分ります、僕が話さないでも自然と分って来るです」と野達は赤シャツと同じような事を云う。

「そんな面倒な事情なら聞かなくてもいいんですが、あなたの方から話し出したから伺うかがうんです」

「そりゃごもつともだ。こっちで口を切って、あとを

つけないのは無責任ですね。それじゃこれだけの事を云っておきましょう。あなたは失礼ながら、まだ学校を卒業したてで、教師は始めての、経験である。ところが学校というものはなかなか情実のあるもので、そう書生流に淡泊たんぱくには行かないゆですからね」

「淡泊に行かなければ、どんな風に行くんです」

「さあ君はそう率直だから、まだ経験に乏とほしいと云うんですがね……」

「どうせ経験には乏しいはずです。履歴書りれきしよにもかいきましたが二十三年四ヶ月ですから」

「さ、そこで思わぬ辺から乗ぜられる事があるんです」
「正直にしていれば誰だれが乗じたつて怖こわくはないです」
「無論怖くはない、怖くはないが、乗ぜられる。現に君の前任者がやられたんだから、気を付けないといけないと云うんです」

野だが大人おとなしくなつたなと気が付いて、ふり向いて見ると、いつしか艫ともの方で船頭と釣の話をしている。野だが居ないんでよつぽど話しよくなつた。

「僕の前任者が、誰だれに乗ぜられたんです」

「だれと指すと、その人の名誉に関係するから云えな

い。また判然と証拠しやうこのない事だから云うとこつちの落度になる。とにかく、せつかく君が来たもんだから、ここで失敗しちや僕等ぼくらも君を呼んだ甲斐かがない。どうか気を付けてくれたまえ」

「気を付けろつたつて、これより気の付けようはありません。わるい事をしなけりや好いいんでしょう」

赤シャツはホホホと笑った。別段おれは笑われるような事を云った覚えはない。今日こんにちただ今に至るまでこれでいいと堅かたく信じている。考えてみると世間の大部分の人はわるくなる事を奨励しょうれいしているように思う。

わるくならなければ社会に成功はしないものと信じて
いるらしい。たまに正直な純粋な人を見ると、坊っちゃん
だの小僧だのと難癖をつけて軽蔑する。それじゃ小
学校や中学校で嘘をつくな、正直にしろと倫理の先生
が教えない方がいい。いつそ思い切って学校で嘘をつ
く法とか、人を信じない術とか、人を乗せる策を教授
する方が、世のためにも当人のためにもなるだろう。
赤シャツがホホホと笑ったのは、おれの単純なのを
笑ったのだ。単純や真率が笑われる世の中じゃ仕様が
ない。清はこんな時に決して笑った事はない。大いに

感心して聞いたもんだ。清の方が赤シャツよりよっぽど上等だ。

「無論悪^わるい事をしなければ好いんですが、自分だけ悪^わるい事をしなくつても、人の悪^わるいのが分らなくつちや、やっぱりひどい目に逢うでしょう。世の中には磊^{らい}落^{らく}なように見えても、淡泊なように見えても、親切に下宿の世話なんかしてくれても、めったに油断の出来ないのがありますから……。大分寒くなった。もう秋ですね、浜の方は靄^{もや}でセピヤ色になった。いい景色だ。おい、吉川君どうだい、あの浜の景色は……。」と

大きな声を出して野だを呼んだ。なあるほどこりや奇絶きぜつですね。時間があると写生するんだが、惜おしいです。ね、このままにしておくのはと野だは大いにたたく。

港屋の二階に灯が一つついて、汽車の笛ふえがヒューと鳴るとき、おれの乗っていた舟は磯いその砂へざぐりと、舳へさきをつき込んで動かなくなった。お早うお帰りと、かみさんが、浜に立って赤シャツに挨拶あいさつする。おれは船端ふなばたから、やつと掛声かけこえをして磯へ飛び下りた。

六

野だは大嫌いだ。こんな奴は沢庵石をつけて海の底へ沈め^{しず}ちまう方が日本のためだ。赤シャツは声が気に食わない。あれは持前の声をわざと気取つてあんな優しいように見せてるんだろう。いくら気取つたつて、あの面じゃ駄目だ。惚^ほれるものがあつたつてマドンナぐらいなものだ。しかし教頭だけに野だよりむずかしい事を云^いう。うちへ歸つて、あいつの申し条を考えて

みると一応もつとものようなでもある。はつきりとした事は云わないから、見当がつきかねるが、何でも山嵐やまあらしがよくない奴だから用心しろと云うのらしい。それならそうとはつきり断言するがいい、男らしくもない。そうして、そんな悪わるい教師なら、早く免職めんしよくさしたらよかろう。教頭なんて文学士の癖くせに意気地いくじのないもんだ。蔭口かげぐちをきくのでさえ、公然と名前が云えないくらいな男だから、弱虫に極きまつてる。弱虫は親切なものだから、あの赤シャツも女のような親切ものなんだろう。親切は親切、声は声だから、声が気に入らないつ

て、親切を無にしちや筋が違ちがう。それにしても世の中は不思議なものだ、虫の好かない奴が親切で、気のあつた友達が悪漢わるものだなんて、人を馬鹿ばかにしている。大方田舎いなかだから万事東京のさかに行くんだらう。物騒ぶつそうな所だ。今に火事が氷つて、石が豆腐とうふになるかも知れない。しかし、あの山嵐が生徒を煽動するなんて、いたずらをしそうもないがな。一番人望のある教師だと云うから、やろうと思つたら大抵たいていの事は出来るかも知れないが、——第一そんな廻まわりくどい事をしないでも、じかにおれを捕つかまえて喧嘩けんかを吹き懸かけりや手数が省ける訳

だ。おれが邪魔^{じやま}になるなら、実はこれこれだ、邪魔だから辞職してくれと云や、よさそうなもんだ。物は相談ずくでどうでもなる。向う^{むこ}の云い条がもつともなら、明日にでも辞職してやる。ここばかり米が出来る訳でもあるまい。どこの果^{はて}へ行つたつて、のたれ死^{じに}はしないつもりだ。山嵐もよつぽど話せない奴だな。

ここへ来た時第一番に氷水を奢^{おご}つたのは山嵐だ。そんな裏表のある奴から、氷水でも奢^{おご}つてもらつちや、おれの顔に関わる。おれはたった一杯^{ぱい}しか飲まなかつたから一銭五厘^{りん}しか払^{はら}わしちやない。しかし一銭だろ

うが五厘だろうが、詐欺師さぎしの恩になつては、死ぬまで心持ちがよくない。あした学校へ行ったら、一錢五厘返しておこう。おれは清きよから三円借りている。その三円は五年経たつた今日までまだ返さない。返せないんじゃない。返さないんだ。清は今に返すだろうなどと、かりそめにもおれの懷中かいちゆうをあてにしてはいない。おれも今に返そうなどと他人がましい義理立てはしないつもりだ。こつちがこんな心配をすればするほど清の心を疑ぐるようなもので、清の美しい心にけちを付けると同じ事になる。返さないのは清を踏ふみつけるのじゃ

ない、清をおれの片破れかたわと思うからだ。清と山嵐とはもとより比べ物にならないが、たとい氷水あまぢやだろうが、甘茶めぐみだろうが、他人から恵を受けて、だまつているのは向うをひとかどの人間と見立てて、その人間に対する厚意の所作だ。割前を出せばそれだけの事で済むところを、心のうちで難有ありがたいと恩に着るのは銭金で買える返礼じゃない。無位無冠でも一人前の独立した人間だ。独立した人間が頭を下げるのは百万両より尊たうとお礼と思わなければならない。

おれはこれでも山嵐に一銭五厘奮発ふんぱつさせて、百万両

より尊とい返礼をした氣でいる。山嵐は難有ありがたいと思つてしかるべきだ。それに裏へ廻ひれつつて卑劣ふるまいな振舞をするとは怪けしからん野郎やろうだ。あした行つて一錢五厘返してしまえば借りも貸しもない。そうしておいて喧嘩をしてやろう。

おれはここまで考えたら、眠ねむくなつたからぐうぐう寝ねてしまった。あくる日は思う仔細しさいがあるから、例刻より早や目に出校して山嵐を待ち受けた。ところがなかなか出て来ない。うらなりが出て来る。漢学の先生が出て来る。野だが出て来る。しまいには赤シャツま

で出て来たが山嵐の机の上は白墨はくぼくが一本たて竪に寝ているだけで閑静かんせいなものだ。おれは、控所ひかえじよへはいるや否や返そうと思つて、うちを出る時から、湯銭のように手の平へ入れて一錢五厘、学校まで握にぎつて来た。おれは膏あぶらっ手だから、開けてみると一錢五厘が汗あせをかいている。汗をかいてる錢を返しちや、山嵐が何とか云うだろうと思つたから、机の上へ置いてふうふう吹いてまた握つた。ところへ赤シャツが来て昨日は失敬、迷惑めいわくでしたらうと云つたから、迷惑じゃありません、お蔭で腹が減りましたと答えた。すると赤シャツは山

嵐の机の上へ肱ひじを突いて、あの盤ばん台面だいづらをおれの鼻の側面へ持つて来たから、何をするかと思つたら、君昨日返りがけに船の中で話した事は、秘密にしてくれたまえ。まだ誰だれにも話しやしますまいねと云つた。女のような声を出すだけに心配性な男と見える。話さない事はたしかである。しかしこれから話そうと云う心持ちで、すでに一銭五厘手の平に用意しているくらいだから、ここで赤シャツから口留めをされちゃ、ちと困る。赤シャツも赤シャツだ。山嵐と名を指さないにしろ、あれほど推察の出来る謎なぞをかけておきながら、今さら

その謎を解いちゃ迷惑だとは教頭とも思えぬ無責任だ。元来ならおれが山嵐と戦争をはじめて鎬しのぎを削けずつて真中へ出て堂々とおれの肩かたを持つべきだ。それでこそ一校の教頭で、赤シャツを着ている主意も立つといふもんだ。

おれは教頭に向むかつて、まだ誰にも話さないが、これから山嵐と談判するつもりだと云つたら、赤シャツは大いに狼狽ろうばいして、君そんな無法な事をしちゃ困る。僕は堀田君の事について、別段君に何も明言した覚えはないんだから——君がもしここで乱暴を働いてくれる

と、僕は非常に迷惑する。君は学校に騒動そうどうを起すつもりで来たんじゃないやなろうと妙みょうに常識をはずれた質問をするから、当りあた前まえです、月給をもらったり、騒動を起したりしちゃ、学校の方でも困るでしようと言った。すると赤シャツはそれじゃ昨日の事は君の参考さんこうだけにとめて、口外してくれるなと汗をかいて依頼いらいに及ぶおよから、よろしい、僕も困るんだが、そんなにあなただいたいようぶが迷惑ならよしでしょうと受け合った。君大丈夫かいと赤シャツは念を押おした。どこまで女らしいんだか奥行おくゆきがわからない。文学士なんて、みんなあんな連中ならつ

まらんものだ。辻褄つじつまの合わない、論理に欠けた注文をして恬然てんぜんとしている。しかもこのおれを疑ぐつてる。はばか憚りながら男だ。受け合つた事を裏へ廻つて反古ほごにするようなさもしい了見りようけんはもつてるもんか。

ところへ両隣りようどなりの机の所有主も出校したんで、赤シャツは早々自分の席へ歸つて行つた。赤シャツは歩あるき方から氣取つてゐる。部屋の中を往来するのでも、音を立てないように靴くつの底をそつと落すおと。音を立てないであるくのが自慢じまんになるもんだとは、この時から始めて知つた。泥棒どろぼうの稽古けいこじゃあるまいし、当り前にす

るがいい。やがて始業の喇叭らっばがなつた。山嵐はとうとう出て来ない。仕方がないから、一錢五厘を机の上へ置いて教場へ出掛でかけた。

授業の都合つごうで一時間目は少し後おくれて、控所へ歸つたら、ほかの教師はみんな机を控えて話をしている。山嵐もいつの間にか来ている。欠勤だと思つたら遅刻ちこくしたんだ。おれの顔を見るや否や今日は君のお蔭で遅刻したんだ。罰金ばっきんを出したまえと云つた。おれは机の上にあつた一錢五厘を出して、これをやるから取っておけ。先達せんだつとおりちようで通町で飲んだ氷水の代だと山嵐の前へ置く

と、何を云つてゐるんだと笑いかけたが、おれが存外真面目まじめでいるので、つまらない冗談じょうだんをするなと錢をおれの机の上に掃はき返した。おや山嵐の癖くせにどこまでも奢る気だな。

「冗談じゃない本当だ。おれは君に氷水を奢られる因縁いんえんがないから、出すんだ。取らない法があるか」

「そんなに一錢五厘が気になるなら取つてもいいが、なぜ思い出したように、今時分返すんだ」

「今時分でも、いつ時分でも、返すんだ。奢られるのが、いやだから返すんだ」

山嵐は冷然とおれの顔を見てふんと云った。赤シャツの依頼がなければ、ここで山嵐の卑劣ひれつをあばいて大喧嘩をしてやるんだが、口外しないと受け合つたんだから動きがとれない。人がこんなに真赤まっかになつてるのにふんという理窟りくつがあるものか。

「氷水の代は受け取るから、下宿は出てくれ」

「二銭五厘受け取ればそれでいい。下宿を出ようが出まいがおれの勝手だ」

「ところが勝手でない、昨日、あすこの亭主ていしゅが来て君に出てもらいたいと云うから、その訳を聞いたら亭主

の云うのはもつともだ。それでももう一応たしかめるつもりで今朝あすこへ寄つて詳しい話を聞いてきたんだ」

おれには山嵐の云う事が何の意味だか分らない。

「亭主が君に何を話したんだか、おれが知ってるもんか。そう自分だけで極めたって仕様があるか。訳があるなら、訳を話すが順だ。てんから亭主の云う方がもつともだなんて失敬千万な事を云うな」

「うん、そんなら云つてやろう。君は乱暴であの下宿で持て余まあされているんだ。いくら下宿の女房だつて、

下女たあ違うぜ。足を出して拭ふかせるなんて、威張いばり過ぎるさ」

「おれが、いつ下宿の女房に足を拭かせた」

「拭かせたかどうか知らないが、とにかく向うじゃ、君に困こってるんだ。下宿料の十円や十五円は懸物かけものを一幅ぶく売りや、すぐ浮ういてくるって云ってたぜ」

「利いた風な事をぬかす野郎やろうだ。そんなら、なぜ置いた」「なぜ置いたか、僕は知らん、置くことは置いたんだが、いやになったんだから、出ろと云うんだろう。君出てやれ」

「当り前だ。居てくれと手を合せたって、居るものか。一体そんな云い懸りがを云うような所へ周旋しゅうせんする君からしてが不埒ふらちだ」

「おれが不埒か、君が大人おとなしくないんだか、どつちかだろう」

山嵐もおれに劣おとらぬ肝癪かんしゃく持ちだから、負け嫌きらいな大きな声を出す。控所に居た連中は何事が始まつたかと思つて、みんな、おれと山嵐の方を見て、顎あごを長くしてぼんやりしている。おれは、別に恥はずかしい事をした覚えはないんだから、立ち上がりながら、部屋中一

通り見巡みまわしてやった。みんなが驚おどろいてるなかに野だだけは面白そうに笑っていた。おれの大きな眼めが、貴様も喧嘩をするつもりかと云う権幕で、野だの干瓢かんぴょうづらを射貫いぬいた時に、野だは突然真面目な顔をして、大いにつつしんだ。少し怖こわかったと見える。そのうち喇叭が鳴る。山嵐もおれも喧嘩を中止して教場へ出た。

午後は、先夜おれに対して無礼を働いた寄宿生の処分法についての会議だ。会議というものは生れて始め

てだからとんと容子ようすが分らないが、職員が寄つて、たかつて自分勝手な説をたてて、それを校長が好い加減に纏まとめるのだらう。纏まとめるというのは黒白こくびやくの決しかねる事柄ことがらについて云うべき言葉だ。この場合のような、誰が見たつて、不都合としか思われない事件に會議をするのは暇潰ひまつぶしだ。誰が何と解釈したつて異説の出ようはずがない。こんな明白なのは即座そくざに校長が処分してしまえばいいに。随分決断ずいぶんのない事だ。校長つてものが、これならば、何の事はない、煮え切きにらない愚図ぐずの異名だ。

会議室は校長室の隣となりにある細長い部屋で、平常は食堂の代理を勤める。黒い皮で張った椅子いすが二十脚きやくばかり、長いテーブルの周囲に並ならんでちよつと神田の西洋料理屋ぐらいな格だ。そのテーブルの端はじに校長が坐すわつて、校長の隣りに赤シャツが構える。あとは勝手次第に席に着くんたそうだが、体操たいそうの教師だけはいつも席末に謙遜けんそんするという話だ。おれは様子が分らないから、博物の教師と漢学の教師の間へはいり込こんだ。向うを見ると山嵐と野だが並んでる。野だの顔はどう考えても劣等だ。喧嘩はしても山嵐の方が遙はるかに趣おもむきが

ある。おやじの葬式そうしきの時に小日向こびなたの養源寺ようげんじの座敷ざしきにかかつてた懸物はこの顔によく似ている。坊主ぼうずに聞いてみたら韋駄天いだてんと云う怪物だそうだ。今日は怒おこってるから、眼をぐるぐる廻しちや、時々おれの方を見る。そんな事で威嚇おどかされてたまるもんかと、おれも負けない気で、やっぱり眼をぐりつかせて、山嵐をにらめてやった。おれの眼は恰好かっこうはよくないが、大きい事においては大抵な人には負けない。あなたは眼が大きいから役者になるときつと似合いますと清がよく云ったくらいだ。

もう大抵お揃いそろいでしょうかと校長が云うと、書記の川村と云うのが一つ二つと頭数を勘定かんじようしてみる。一人足りない。一人不足ですがと考えていたが、これは足りないはずだ。唐茄子とうなすのうらなり君が来ていない。おれとうらなり君とはどう云う宿世すくせの因縁かしらないが、この人の顔を見て以来どうしても忘れられない。控所へくれば、すぐ、うらなり君が眼に付く、途中とちゆうにあるいていても、うらなり先生の様子ようしが心に浮うかぶ。温泉へ行くと、うらなり君が時々蒼い顔あおをして湯壺ゆづばのなかに膨ふくれている。挨拶あいさつをするとへえと恐縮きようしゆくして頭を下

げるから気の毒になる。学校へ出てうらなり君ほど大人しい人は居ない。めったに笑った事もないが、余計な口をきいた事もない。おれは君子という言葉を書物の上で知ってるが、これは字引にあるばかりで、生きているものではないと思つてたが、うらなり君に逢^あつてから始めて、やつぱり正体のある文字だと感心したくらいだ。

このくらい関係の深い人の事だから、会議室へはいらるや否や、うらなり君の居ないのは、すぐ気がついた。実を云うと、この男の次へでも坐^すわろうかと、ひそか

に目標^{めじるし}にして来たくらいだ。校長はもうやがて見えるでしよう、自分の前^{むらさき}にある紫の袱紗包^{ふくさづつみ}をほどこいて、蒟蒻版^{こんにやくばん}のような者を読んでゐる。赤シャツは琥珀^{こはく}のパイプを絹ハンケチで磨^{みが}き始めた。この男はこれが道楽である。赤シャツ相当のところだろう。ほかの連中は隣り同志で何だか私語^{ささや}き合っている。手持無沙汰^{てもちぶさた}なのは鉛筆^{えんぴつ}の尻^{しり}に着いている、護謨^{ゴム}の頭でテーブルの上へしきりに何か書いている。野だは時々山嵐に話しかけるが、山嵐は一向応じない。ただうんとかああと云うばかりで、時々怖^{こわ}い眼をして、おれの方を見る。おれ

も負けずに睨め返す。

ところへ待ちかねた、うらなり君が気の毒そうには
いつて来て少々用事がありました、遅刻致しましたと
いんぎん たぬき あいさつ
慇懃に狸に挨拶をした。では会議を開きますと狸はま
ず書記の川村君に蒔蒔版を配布させる。見ると最初が
処分の件、次が生徒取締とりしまりの件、その他二三ヶ条である。
狸は例の通りもつたいぶって、教育の生霊いきりようという見え
でこんな意味の事を述べた。「学校の職員や生徒に過
失のあるのは、みんな自分の寡徳かとくの致すところで、何
か事件がある度に、自分はよくこれで校長が勤まると

ひそかに慚愧ざんきの念に堪たえんが、不幸にして今回もまたかかる騒動を引き起したのは、深く諸君に向つて謝罪しなければならん。しかしひとたび起つた以上は仕方がない、どうにか処分をせんければならん、事實はすでに諸君のご承知の通りであるからして、善後策について腹藏のない事を参考のためにお述べ下さい」

おれは校長の言葉を聞いて、なるほど校長だの狸だのと云うものは、えらい事を云うもんだと感心した。こう校長が何もかも責任を受けて、自分の咎とがだとか、不徳だとか云うくらいなら、生徒を処分するのは、や

めにして、自分から先へ免職めんしよくになつたら、よさそんなもんだ。そうすればこんな面倒めんどうな会議なんぞを開く必要もなくなる訳だ。第一常識から云いつても分つてゐる。おれが大人しく宿直をする。生徒が乱暴をする。わるいのは校長でもなけりや、おれでもない、生徒だけに極きまつてゐる。もし山嵐せんどうが煽動せんどうしたとすれば、生徒と山嵐を退治たいじればそれでたくさんだ。人の尻しりを自分で背負しよい込んで、おれの尻しりだ、おれの尻しりだと吹き散らかす奴が、どこの国にあるもんか、狸じようりでなくつつちや出来る芸当げんたうじゃない。彼はかれこんな条理じようりに適かなわらない議論を吐はいて、

得意氣に一同を見廻した。ところが誰も口を開くものがない。博物の教師は第一教場の屋根に鳥がとまつてゐるのを眺めてゐる。漢学の先生は蒟蒻版を畳んだり、延ばしたりしてゐる。山嵐はまだおれの顔をにらめてゐる。會議と云うものが、こんな馬鹿氣なものなら、欠席して昼寝でもしている方がましだ。

おれは、じれったくなつたから、一番大いに弁じてやろうと思つて、半分尻をあげかけたら、赤シャツが何か云い出したから、やめにした。見るとパイプをしまつて、縞のある絹ハンケチで顔をふきながら、何か

云つてゐる。あの手巾はんけちはきつとマドンナから巻き上げたに相違そういない。男は白い麻あさを使うもんだ。「私も寄宿生の乱暴を聞いてはなはだ教頭として不行届ふゆきとどきであり、かつ平常の徳化が少年に及ばなかつたのを深く慚はずるのであります。でこう云う事は、何か陷欠かんけつがあると起るもので、事件その物を見ると何だか生徒だけがわるいようであるが、その真相を極めると責任はかえつて学校にあるかも知れない。だから表面上にあらわれたところだけで嚴重な制裁を加えるのは、かえつて未来のためによくないかとも思われます。かつ少年血氣の

ものであるから活気があふれて、善悪の考えはなく、半ば無意識にこんな悪戯いたづらをやる事はないとも限らん。でもとより処分法は校長のお考えにある事だから、私の容喙ようかいする限りではないが、どうかその辺を斟酌しんしやくになつて、なるべく寛大なお取計とりはからいを願いたいと思います」

なるほど狸が狸なら、赤シャツも赤シャツだ。生徒があばれるのは、生徒がわるいんじゃない教師が悪るいんだと公言している。氣狂きちがいが人の頭を撲なぐり付けるのは、なぐられた人がわるいから、氣狂がなぐるんだそ
うだ。難有ありがたい仕合せだ。活気にみちて困るなら運動場

へ出て相撲すもうでも取るがいい、半ば無意識に床の中へ
バツタを入れられてたまるものか。この様子じゃ寝頸ねくび
をかかれても、半ば無意識だつて放免するつもりだろ
う。

おれはこう考えて何か云おうかなと考えてみたが、
云うなら人を驚ろすかように滔々と述べたてなくつ
ちやつまらない、おれの癖として、腹が立ったときに
口をきくと、二言か三言で必ず行き塞つまつてしまう。狸
でも赤シャツでも人物から云うと、おれよりも下等だ
が、弁舌はなかなか達者だから、まずい事を喋しゃべ舌つて

揚げあし
揚足を取られちゃ面白くない。ちよつと腹案を作つて
みようと、胸のなかで文章を作つてゐる。すると前に居
た野だが突然起立したには驚ろいた。野だの癖に意見を
を述べるなんて生意氣だ。野だは例のへらへら調で「実
に今回のバツタ事件及び咄喊事件は吾々心ある職員を
して、ひそかに吾校将来の前途に危惧の念を抱かしむ
るに足る珍事でありまして、吾々職員たるものはこの
際奮つて自ら省りみて、全校の風紀を振肅しなければ
なりません。それでただ今校長及び教頭のお述べに
なつたお説は、実に肯綮に中つた剴切なお考えで私は

徹頭徹尾賛成致します。どうかなるべく寛大かんだいのご処分てつとうてつびを仰あおぎたいと思います」と云った。野だの云う事は言語はあるが意味がない、漢語をのべつに陳列ちんれつするぎりで訳が分らない。分つたのは徹頭徹尾賛成致しますと云う言葉だけだ。

おれは野だの云う意味は分らないけれども、何だか非常に腹が立ったから、腹案も出来ないうちに起たち上がってしまった。「私は徹頭徹尾反対です……」と云ったがあとが急に出て来ない。「……そんな頓珍漢とんちんかんな、処分は大嫌いだいきらです」とつけたら、職員が一同笑い出し

た。「一体生徒が全然悪^{わる}いんです。どうしても詫^{あや}まらせなくっちゃ、癖になります。退校さしても構いません。……何だ失敬な、新しく来た教師だと思つて……」と云つて着席した。すると右隣りに居る博物が「生徒がわるい事も、わるいが、あまり嚴重な罰などをするとかえつて反動を起していけないでしょう。やっぱり教頭のおっしゃる通り、寛^{おん}な方に賛成します」と弱い事を云つた。左隣の漢学は穩便^{おんびん}説に賛成と云つた。歴史も教頭と同説だと云つた。忌々しい、大抵のものは赤シャツ党だ。こんな連中が寄り合つて学校を

立てていりや世話はない。おれは生徒をあやまらせるか、辞職するか二つのうち一つに極めてるんだから、もし赤シャツが勝ちを制したら、早速うちへ帰って荷作りをする覚悟かくごでいた。どうせ、こんな手合てあいを弁口べんこうで屈伏くつぷくさせる手際はなし、させたところでいつまでご交際を願うのは、こつちでご免だ。学校に居ないとすればどうなったって構うもんか。また何か云うと笑うに違いない。だれが云うもんかと澄すましていた。

すると今までだまって聞いていた山嵐が奮然として、起ち上がった。野郎また赤シャツ賛成の意を表す

るな、どうせ、貴様とは喧嘩だ、勝手にしろと見てい
ると山嵐は硝子窓ガラスを振ふるわせるような声で「私は教頭及
びその他諸君のお説には全然不同意であります。とい
うものはこの事件はどの点から見ても、五十名の寄宿
生が新来の教師某氏ほうしを軽侮けいぶしてこれを翻弄ほんろうしようとし
た所しよ為いとより外ほかには認められんのであります。教頭は
その原因を教師の人物いかにお求めになるようであ
ります。が失礼ながらそれは失言かと思ひます。某氏が
宿直にあたられたのは着後早々の事で、まだ生徒に接
せられてから二十日に満こたぬ頃ころであります。この短か

い二十日間において生徒は君の学問人物を評価し得る
余地がないのであります。軽侮されべき至当な理由が
あつて、軽侮を受けたのなら生徒の行為に斟酌しんしゃくを加え
る理由もありましょうが、何らの原因もないのに新来
の先生を愚弄ぐろうするような軽薄な生徒を寛假かんかしては学校
の威信いしんに関わる事と思います。教育の精神は単に学問
を授けるばかりではない、高尚こうしような、正直な、武士的な
元気を鼓吹こすいすると同時に、野卑やひな、軽躁けいそうな、暴慢ぼうまんな悪風
を掃蕩そうとうするにあると思います。もし反動が恐おそしいの、
騒動が大きくなるのと姑息こそくな事を云つた日にはこの

弊風へいふうはいつ矯正きようせい出来るか知れません。かかる弊風を杜絶とぜつするためにこそ吾々はこの学校に職を奉じているので、これを見逃みがすくらいなら始めから教師にならん方がいと思います。私は以上の理由で寄宿生一同を厳罰げんばつに処する上に、当該教師とうがいの面前において公けに謝罪の意を表せしむるのを至当の所置と心得ます」と云いながら、どんと腰こしを卸おろした。一同はだまって何にも言わない。赤シャツはまたパイプを拭ふき始めた。おれは何だか非常に嬉うれしかった。おれの云おうと思うところをおれの代りに山嵐がすっかり言ってくれたよう

なものだ。おれはこう云う単純な人間だから、今まで
の喧嘩はまるで忘れて、大いに難有ありがたいと云う顔をもつ
て、腰を卸した山嵐の方を見たら、山嵐は一向知らん
面かおをしている。

しばらくして山嵐はまた起立した。「ただ今ちよつ
と失念して言い落おとしましたから、申します。当夜の宿
直員は宿直中外出して温泉に行かれたようであるが、
あれはもつての外の事と考えます。いやしくも自分が
一校の留守番を引き受けながら、咎とがめる者のないのを
幸さいわいに、場所もあるうに温泉などへ入湯にいくなどと

云うのは大きな失体である。生徒は生徒として、この点については校長からとくに責任者にご注意あらん事を希望します」

妙な奴だ、ほめたと思つたら、あとからすぐ人の失策をあばいている。おれは何の気もなく、前の宿直が出あるいた事を知つて、そんな習慣だと思つて、つい温泉まで行つてしまつたんだが、なるほどそう云われてみると、これはおれが悪るかつた。攻撃こうげきされても仕方がない。そこでおれはまた起つて「私は正に宿直中に温泉に行きました。これは全くわるい。あやまりま

す」と云つて着席したら、一同がまた笑い出した。おれが何か云いさえすれば笑う。つまらん奴等だ。やつら貴様等これほど自分のわるい事を公けにわるかつたと断言出来るか、出来ないから笑うんだろう。

それから校長は、もう大抵ご意見もないようでありますから、よく考えた上で処分しましょうと云つた。ついでだからその結果を云うと、寄宿生は一週間の禁足になった上に、おれの前へ出て謝罪をした。謝罪をしなければその時辞職して帰るところだったがなまじい、おれのいう通りになったのでとうとう大變な事に

なつてしまった。それはあとから話すが、校長はこの
時会議の引き続きだと号してこんな事を云った。生徒
の風儀ふうぎは、教師の感化で正していかなくてはならん、
その一着手として、教師はなるべく飲食店などに
出入しゆつにゆうしない事にしたい。もつとも送別会などの節は
特別であるが、単独にあまり上等でない場所へ行くの
はよしたい——たとえば蕎麦屋そばやだの、団子屋だんごやだの——
と云いかけたらまた一同が笑った。野だが山嵐を見て
天麩羅てんぷらと云つて目くばせをしたが山嵐は取り合わな
かった。いい気味きびだ。

おれは脳がわるいから、狸の云うことなんか、よく分らないが、蕎麦屋や団子屋へ行つて、中学の教師が勤まらなくつちや、おれみたような食い心棒しんぼうにや到底出来つ子ないと思つた。それなら、それでいいから、初手から蕎麦と団子の嫌いなものと注文して雇やとうがいい。だんまりで辞令を下げておいて、蕎麦を食うな、団子を食うなと罪なお布令ふれを出すのは、おれのような外に道楽のないものにとつては大変な打撃だ。すると赤シャツがまた口を出した。「元来中学の教師なぞは社会の上流にくらいするものだからして、単に物質的

の快樂ばかり求めるべきものでない。その方に耽ふけると
つい品性にわるい影響えいきょうを及ぼすようになる。しかし人
間だから、何か娛樂ごらくがないと、田舎いなかへ来て狭い土地で
は到底暮くらせるものではない。それで釣つりに行くとか、文
学書を読むとか、または新体詩や俳句を作るとか、何
でも高尚こうしょうな精神的娛樂を求めなくってはいけない
……」

だまって聞いてると勝手な熱を吹く。沖おきへ行つて
肥料こやしを釣ったり、ゴルキが露西亞ロシアの文学者だったり、
馴染なじみの芸者が松まつの木の下に立ったり、古池かわずへ蛙が飛び

込んだりするるのが精神的娯楽なら、天麩羅を食って団子を呑み込むのも精神的娯楽だ。そんな下さらない娯楽を授けるより赤シャツの洗濯せんたくでもするがいい。あんまり腹が立ったから「マドンナに逢あうのも精神的娯楽ですか」と聞いてやった。すると今度は誰も笑わない。妙な顔をして互たがいに眼と眼を見合せている。赤シャツ自身は苦しそうに下を向いた。それ見ろ。利いたろう。ただ気の毒だったのはうらなり君で、おれが、こう云つたら蒼い顔をますます蒼くした。

七

おれは即夜^{そくや}下宿を引き払^{はら}った。宿へ歸つて荷物をまとめていると、女房^{にようぼう}が何か不都合^{ふつごう}でもございましたか、お腹の立つ事があるなら、云^いつておくれたら改めますと云う。どうも驚^{おど}ろく。世の中にはどうして、こんな要領を得ない者ばかり揃^{そろ}つてるんだろう。出てもらいたいんだか、居てもらいたいんだか分^{わか}りやしない。まるで氣^き狂^{きちがい}だ。こんな者を相手に喧嘩^{けんか}をしたって江戸^{えど}っ

子の名折れだから、車屋をつれて来てさつさと出てきた。

出た事は出たが、どこへ行くというあてもない。車屋が、どちらへ参りますと云うから、だまって尾^ついて来い、今にわかる、と云って、すたすたやって来た。面倒^{めんどう}だから山城屋へ行こうかとも考えたが、また出なければならぬから、つまり手数だ。こうして歩いてるうちには下宿とか、何とか看板のあるうちを目付け出すだろう。そうしたら、そこが天意^{かな}に叶^{かな}ったわが宿と云う事にしよう。とぐるぐる、閑静^{かんせい}で住みよさそう

な所をあるいているうち、とうとう鍛冶屋町へ出てしまつた。ここは士族屋敷やしきで下宿屋などのある町ではないから、もつと賑にぎやかな方へ引き返そうかとも思ったが、ふといい事を考え付いた。おれが敬愛するうらなり君はこの町内に住んでいる。うらなり君は土地の人で先祖代々の屋敷を控ひかえているくらいだから、この辺の事情には通じているに相違そういない。あの人を尋ねて聞いたら、よさそうな下宿を教えてくださいませんか。知れない。幸さいわい 一度挨拶あいさつに来て勝手は知ってるから、捜さがしてあるく面倒はない。ここだろうと、いい加減に見当をつけ

て、ご免めんご免と二返ばかり云うと、奥おくから五十ぐらいな年寄としよりが古風な紙燭しそくをつけて、出て来た。おれは若い女きらも嫌いではないが、年寄を見ると何だかなつかしい心持こもちがする。大方きよ清がすきだから、その魂たましいが方々のお婆ばあさんかに乗り移るんだろう。これは大方うらなり君のおつ母かさんだろ。切り下げの品格のある婦人だが、よくうらなり君に似ている。まあお上がりげんかんと云うところを、ちよつとお目にかかりたいからと、主人を玄関げんかんまで呼び出して実はこれだが君どこか心当りはありませんかと尋ねてみた。うらなり先生それはさぞお

困りでございましょう、としばらく考えていたが、この裏町に萩野はぎのと云つて老人夫婦ふごぎりで暮くらしているものがある、いつぞや座敷ざしきを明けておいても無駄むだだから、たしかな人があるなら貸してもいいから周旋しゅうせんしてくれと頼たのんだ事がある。今でも貸すかどうか分らんが、まあいっしょに行つて聞いてみましょうと、親切に連れて行つてくれた。

その夜から萩野の家の下宿人となつた。驚おどろいたのは、おれがいか銀の座敷を引き払うと、翌日あくるひから入れ違ちがいに野だが平気な顔をして、おれの居た部屋を占領せんりょうした

事だ。さすがのおれもこれにはあきれた。世の中はいかさま師ばかりで、お互^{たがい}に乗せつこをしているのかも知れない。いやになつた。

世間がこんなものなら、おれも負けない気で、世間並^{せけんなみ}にしなくちや、遣^やりきれない訳になる。巾着切^{きんちやくきり}の上前をはねなければ三度のご膳^{ぜん}が戴^{いた}けないと、事が極^きまればこうして、生きてるのも考え物だ。と云つてぴんぴんした達者なからだで、首を縊^くつちや先祖へ濟まない上に、外聞が悪い。考えると物理学校などへはいつて、数学なんて役にも立たない芸を覚えるよりも、

六百円を資本に^{もとで}して牛乳屋でも始めればよかった。そうすれば清もおれの傍^{そば}を離れ^{はな}ずに済むし、おれも遠くから婆さんの事を心配しずに暮^{くら}される。いつしよに居るうちは、そうでもなかったが、こうして田舎^{いなか}へ来てみると清はやっぱり善人だ。あんな氣立^{きだて}のいい女は日本中さがして歩いたつてめったにはない。婆さん、おれの立つときに、少々風邪^{かぜ}を引いていたが今頃^{いまごろ}はどうしてるか知らん。先だつての手紙を見たらさぞ喜んだろう。それにしても、もう返事がきそうなものだが――

おれはこんな事ばかり考えて二三日暮^くしていた。

気になるから、宿のお婆さんに、東京から手紙は来
ませんかと時々尋ねてみるが、聞きたんびに何にも参
りませんと気の毒そうな顔をする。ここの夫婦はいか
銀とは違つて、もとが士族だけに双方共上品だ。爺さ
んが夜よになると、変な声を出して謡うたいをうたうには閉
口するが、いか銀のようにお茶を入れましようと思おもひ
に出て来ないから大きに樂だ。お婆さんは時々部屋へ
来ていろいろな話をする。どうして奥さんをお連れな
さつて、いっしょにお出いでなんだのぞなもしなどと質
問をする。奥さんがあるように見えますかね。可哀想かわいそう

にこれでもまだ二十四ですぜと云つたらそれでも、あ
なた二十四で奥さんがありなさるのは当り前ぞなも
しと冒頭ぼうとうを置いて、どこの誰だれさんは二十でお嫁よめをお貰もら
いたの、どこの何とかさんは二十二で子供を二人ふたりお持
ちたのと、何でも例を半ダースばかり挙げて反駁はんぱくを試
みたには恐れ入った。それじゃ僕ぼくも二十四でお嫁をお
貰もらいるけれ、世話をしておくれんかなと田舎言葉を
真似まねて頼んでみたら、お婆さん正直に本当かなもしと
聞いた。

「本当の本当ほんまのつて僕あ、嫁が貰もらいたくつて仕方がな

いんだ」

「そうじゃろうがな、もし。若いうちは誰もそんなものじゃけれ」この挨拶あいさつには痛み入って返事が出来なかった。

「しかし先生はもう、お嫁がおありなさるに極きまつとらい。私はちゃんと、もう、睨ねらんどるぞなもし」

「へえ、活眼かつがんだね。どうして、睨ねらんどるんですか」

「どうしてて。東京から便りはないか、便りはないかて、毎日便りを待ち焦こがれておいでるじゃないかなもし」

「こいつあ驚いた。おどろ大変な活眼だ」

「中あたりましたろうがな、もし」

「そうですね。中つたかも知れませんか」

「しかし今時の女子は、おなご昔と違むかしうて油断が出来んけれ、
お氣をお付けたがええぞなもし」

「何ですかい、僕の奥さんが東京で間男でもこしらえていますかい」

「いいえ、あなたの奥さんはたしかじゃけれど……」

「それで、やっと安心した。それじゃ何を氣を付けるんですい」

「あなたのはたしか——あなたのはたしかじゃが——」

「どこに不たしかなのが居ますかね」

「ここ等にも大分居ります。先生、あの遠山のお嬢さんをご存知かなもし」

「いいえ、知りませんね」

「まだご存知ないかなもし。ここらであなた一番の別嬪さんじゃがなもし。あまり別嬪さんじゃけれ、学校の先生方はみんなマドンナマドンナと言うといでるぞなもし。まだお聞きんのかなもし」

「うん、マドンナですか。僕あ芸者の名かと思った」

「いいえ、あなた。マドンナと云うと唐人とうじんの言葉で、別嬪さんの事じゃろうがなもし」

「そうかも知れないね。驚いた」

「大方画学の先生がお付けた名ぞなもし」

「野だがつけたんですかい」

「いいえ、あの吉川先生よしかわがお付けたのじゃがなもし」

「そのマドンナが不たしかなんですかい」

「そのマドンナさんが不たしかなマドンナさんでな、もし」

「厄介やっかいだね。渾名あだなの付いてる女にや昔から碌ろくなもの

居ませんからね。そうかも知れませんよ」

「ほん当にそうじゃなもし。鬼神きじんのお松まつじゃの、姉妃だつきのお百じゃのてて怖こわい女が居おりましたなもし」

「マドンナもその同類なんですかね」

「そのマドンナさんがなもし、あなた。そらあの、あなたをここへ世話よめをしておくれた古賀先生やくそくなもし——
あの方の所へお嫁よめに行く約束が出来ていたのじゃがな
もし——」

「へえ、不思議なもんですね。あのうらなり君が、そんな艶福えんぷくのある男とは思わなかった。人は見懸みかけによ

らない者だな。ちつと気を付けよう」

「ところが、去年あすこのお父さんが、お亡くなりて、

——それまではお金もあるし、銀行の株も持ってお出いでるし、万事都合がよかったのじゃが——それからとい

うものは、どういうものか急に暮し向きが思わしくな
くなつて——つまり古賀さんがあまりお人が好過よすぎる

けれ、お欺だまされたんぞなもし。それや、これやでお

興入こしいれも延びているところへ、あの教頭さんがお出いでて、

是非お嫁にほしいとお云いるのじゃがなもし」

「あの赤シャツがですか。ひどい奴やつだ。どうもあのシャ

ツはただのシャツじゃないと思つてた。それから？」

「人を頼んで懸合かけあうておみると、遠山さんでも古賀さんに義理があるから、すぐには返事は出来かねて――

まあよう考えてみようぐらいの挨拶をおしたのじゃがなもし。すると赤シャツさんが、手蔓てづるを求めて遠山さ

んの方へ出入でいりをおしるようになった、とうとうあなた、

お嬢さんを手馴てなづ付けておしまいたのじゃがなもし。赤

シャツさんも赤シャツさんじゃが、お嬢さんもお嬢さんじゃてて、みんなが悪わるるく云いますのよ。いったん

古賀さんへ嫁に行くてて承知をしときながら、今さら

学士さんがお出いでたけれ、その方に替かえよてて、それじゃ今日様へ済こんにちさまむまいがなもし、あなた」

「全く済まないね。今日様どころか明日様にも明後日様にも、いつまで行つたつて済みつこありませんね」
「それで古賀さんにお気の毒じゃてて、お友達の堀田ほったさんが教頭の所へ意見をしにお行きたら、赤シャツさんが、あしは約束のあるものを横取りするつもりはない。破約になれば貰うかも知れんが、今のところは遠山家とただ交際をしているばかりじゃ、遠山家と交際をするには別段古賀さんに済まん事もなからうとお云

いるけれ、堀田さんも仕方がなしにお戻りもとどたそうな。赤シャツさんと堀田さんは、それ以来おりあい折合がわるいという評判ぞなもし」

「よくいろいろな事を知ってますね。どうして、そんなくわ詳しい事が分るんですか。感心しちまった」

「狭せまいけれ何でも分りますぞなもし」

分り過ぎて困るくらいだ。この容子ようすじやおれの天麩羅てんぷらや団子だんごの事も知ってるかも知れない。厄介やっかいな所だ。しかしお蔭かげ様でマドンナの意味もわかるし、山嵐と赤シャツの関係もわかるし大いに後学になった。た

だ困るのはどっちが悪る者だか判然しない。おれのよ
うな単純なものには白とか黒とか片づけてもらわな
い、どっちへ味方をしていいか分らない。

「赤シャツと山嵐たあ、どっちがいい人ですかね」

「山嵐て何ぞなもし」

「山嵐というのは堀田の事ですよ」

「そりや強い事は堀田さんの方が強そうじゃけれど、
しかし赤シャツさんは学士さんじゃけれ、働きはある
方かたぞな、もし。それから優しい事も赤シャツさんの方
が優しいが、生徒の評判は堀田さんの方がええという

ぞなもし」

「つまりどつちがいいんですかね」

「つまり月給の多い方が豪いえらのじやろうがなもし」

これじゃ聞いたって仕方がないから、やめにした。それから二三日して学校から帰るとお婆さんがにこにこして、へえお待遠さま。やつと参りました。と一本の手紙を持って来てゆっくりご覧と云つて出て行つた。取り上げてみると清からの便りだ。符箋ふせんが二三枚まいついてるから、よく調べると、山城屋から、いか銀の方へ廻まわして、いか銀から、萩野はぎのへ廻つて来たのである。

その上山城屋では一週間ばかり逗留とうりゆうしている。宿屋だけに手紙まで泊とめるつもりなんだろう。開いてみると、非常に長いもんだ。坊ぼっちゃんの手紙を頂いてから、すぐ返事かこうと思つたが、あいにく風邪を引いて一週間ばかり寝ねていたものだから、つい遅おそくなつて済まない。その上今時のお嬢さんのように読み書きが達者でないものだから、こんなまずい字でも、かくのによつぽど骨が折れる。甥おいに代筆を頼もうと思つたが、せつかくあげるのに自分でかかなくっちゃ、坊っちゃんに済まないと思つて、わざわざ下したがきを一返して、

それから清書をした。清書をするには二日で済んだが、下た書きをするには四日かかった。読みにくいかも知れないが、これでも一生懸命にかいたのだから、どうぞしまいまで読んでくれ。という冒頭ぼうとうで四尺ばかり何やらかやら認したためてある。なるほど読みにくい。字がまずいばかりではない、大抵たいてい平仮名だから、どこで切れて、どこで始まるのだから句読くとうをつけるのによつぽど骨が折れる。おれは焦せつ勝かちな性分だから、こんな長くて、分りにくい手紙は、五円やるから読んでくれと頼まれても断わるのだが、この時ばかりは真面目まじめになつ

て、始はじめから終しまいまで読み通した。読み通した事は事実だが、読む方に骨が折れて、意味がつかないから、また頭から読み直してみた。部屋のなかは少し暗くなつて、前の時より見にくく、なつたから、とうとう椽鼻えんばなへ出て腰こしをかけながら鄭寧ていねいに拝見した。すると初秋はつあきの風が芭蕉ばしやうの葉を動かして、素肌すはだに吹ふきつけた歸りに、読みかけた手紙を庭の方へなびかしたから、しまいぎわには四尺あまりの半切れがさりさらりと鳴つて、手を放すと、向うむこの生垣まで飛んで行きそつだ。おれはそんな事には構つていられない。坊っちゃん

んは竹を割ったような気性だが、ただ肝癪かんしゃくが強過ぎてそれが心配になる。——ほかの人に無暗むやみに渾名あだななんか、つけるのは人に恨うらまれるものになるから、やたらに使っちゃんいけない、もしつけたら、清だけに手紙で知らせろ。——田舎者は人がわるいそうだから、気をつけてひどい目に遭あわないようにしろ。——氣候だつて東京より不順に極つてるから、寝冷ねひえをして風邪を引いてはいけない。坊っちゃんの手紙はあまり短過ぎて、容子がよくわからないから、この次にはせめてこの手紙の半分ぐらいの長さのを書いてくれ。——宿屋へ茶

代を五円やるのはいいが、あとで困りやしないか、田舎へ行つて頼りになるはお金ばかりだから、なるべく^{けんやく}儉約して、万一の時に差支えないようにしなくっちゃいけない。——お小遣^{こづかい}がなくて困るかも知れないから、^{かわせ}為替で十円あげる。——先^{せん}だつて坊っちゃんからもらつた五十円を、坊っちゃんが、東京へ歸つて、うちを持つ時の足しにと思つて、郵便局へ預けておいたが、この十円を引いてもまだ四十円あるから大丈夫だ。——なるほど女と云うものは細かいものだ。

おれが椽鼻で清の手紙をひらつかせながら、考え込^こ

んでいると、しきりの襖ふすまをあけて、萩野のお婆さんが
晩めしを持ってきた。まだ見てお出いでるのかなもし。
えっぽど長いお手紙じやなもし、と云ったから、ええ
大事な手紙だから風に吹かしては見、吹かしては見る
んだと、自分でも要領を得ない返事をして膳ぜんについた。
見ると今夜も薩摩芋さつまいもの煮つけだ。ここのうちは、いか
銀よりも鄭寧ていねいで、親切で、しかも上品だが、惜おしい事
に食い物がまずい。昨日も芋、一昨日おとといも芋で今夜も芋
だ。おれは芋は好きだと明言したには相違ないが、
こう立てつづけに芋を食わされては命がつづかない。

うらなり君を笑うどころか、おれ自身が遠からぬうちに、芋のうらなり先生になっちまう。清ならこんな時に、おれの好きな鮪まぐろのさし身か、蒲鉾かまぼこのつけ焼を食わせるんだが、貧乏びんぼう士族のけちん坊ぼうと来ちゃ仕方がない。どう考えても清といっしよでなくっちあ駄目だめだ。もしあの学校に長くても居る模様なら、東京から召よび寄よせてやろう。天麩羅蕎麦そばを食くっちゃならない、団子を食くっちゃならない、それで下宿に居て芋ばかり食くつて黄色くなっているなんて、教育者はつらいものだ。禅宗坊ぜんしゅう主だつて、これよりは口くちに栄耀えいようをさせているだろう。

——おれは一皿の芋を平げて、机の抽斗ひきだしから生卵を二つ出して、茶碗ちやわんの縁ふちでたたき割つて、ようやくしの凌いだ。生卵でも營養をとらなくつちあ一週二十時間の授業が出来るものか。

今日は清の手紙で湯に行く時間が遅くなった。しかし毎日行きつけたのを一日でも欠かすのは心持ちがわるい。汽車にでも乗つて出懸でかけようと、例の赤手拭あかてぬぐいをぶら下げて停車場まで来ると二三分前に発車したばかりで、少々待たなければならぬ。ベンチへ腰を懸けて、敷島しきしまを吹かしていると、偶然ぐうぜんにもうらなり君がやつて

来た。おれはさっきの話を聞いてから、うらなり君が
なおさら気の毒になった。平常ふだんから天地の間に居候いそうろうを
しているように、小さく構えているのがいかにも憐れあわ
に見えたが、今夜は憐れどころの騒さわぎではない。出来
るならば月給を倍にして、遠山のお嬢さんと明日あしたから
結婚けっこんさして、一ヶ月ばかり東京へでも遊びにやってや
りたい気がした矢先だから、やお湯ですか、さあ、こつ
ちへお懸おそけなさいと威勢いせいよく席ゆずを譲ると、うらなり君
は恐れ入った体裁で、いえ構かもうておくれなさるな、と
遠慮えんりよだか何だかやっぱり立ってる。少し待たなくつ

ちや出ません、草臥くたびれますからお懸けなさいとまた勧めてみた。実はどうかして、そばへ懸けてもらいたかつたくらいに気の毒でたまらない。それではお邪魔じやまを致いたしましようにとようやくおれの云う事を聞いてくれた。世の中には野だみたように生意気な、出ないで済む所へ必ず顔を出す奴もいる。山嵐のようにおれが居なくつちや日本にっぽんが困るだろうと云うような面を肩かたの上へ載のせてる奴もいる。そうかと思うと、赤シャツのようにコスメチックと色男の間屋をもつて自ら任じているのもある。教育が生きてフロックコートを着ればおれ

になるんだと云わぬばかりの狸たぬきもいる。皆々それ相応に威張ってるんだが、このうらなり先生のように在れどもなきがごとく、人質に取られた人形のように大人おとなしくしているのは見た事がない。顔はふくれているが、こんな結構な男を捨てて赤シャツに靡なびくなんて、マドンナもよつぽど気の知れないおきやんだ。赤シャツが何ダース寄ったって、これほど立派な旦那様だんなさまが出来るもんか。

「あなたはどつか悪いんじゃないやありませんか。大分たいぎそうに見えますが……」「いえ、別段これという持

病もないですが……」

「そりや結構です。からだが悪いと人間も駄目ですね」
「あなたは太分じょうぶご丈夫じょうぶのようすな」

「ええ瘠やせても病氣はしません。病氣なんてものあ大嫌いですから」

うらなり君は、おれの言葉を聞いてにやにやと笑った。

ところへ入口で若々しい女の笑声きこが聞えたから、何心なく振り返ふつてみるとえらい奴が来た。色の白い、ハイカラ頭の、背の高い美人と、四十五六の奥さんと

が並ならんで切符きっぷを売る窓の前に立っている。おれは美人の形容などが出来る男でないから何にも云えないが全く美人に相違ない。何だか水晶すいしやうの珠たまを香水かうすいで暖あつためて、掌てのひらへ握にぎつてみたような心持ちがした。年寄の方が背は低い。しかし顔はよく似ているから親子だろう。おれは、や、来たなと思う途端とたんに、うらなり君の事は全然すつかり忘れて、若い女の方ばかり見ていた。すると、うらなり君が突然とつぜんおれの隣となりから、立ち上がって、そろそろ女の方へ歩き出したんで、少し驚いた。マドンナじゃないかと思つた。三人は切符所の前で軽く挨拶している。

遠いから何を云つてゐるのか分らない。

停車場の時計を見るともう五分で発車だ。早く汽車がくればいいがなと、話し相手が居なくなつたので待ち遠しく思つてゐると、また一人あわてて場内へ馳^かけ込^こんで来たものがある。見れば赤シャツだ。何だかべらべら然たる着物へ縮緬^{ちりめん}の帯をだらしなく巻き付けて、例の通り金鎖^{きんぐさ}りをぶらつかしている。あの金鎖りは贗物^{にせもの}である。赤シャツは誰^{だれ}も知るまいと思つて、見せびらかしているが、おれはちゃんと知つてゐる。赤シャツは馳^かけ込んだなり、何かきよろきよろしていたが、

切符売下所うりさげじよの前に話している三人へ慇懃いんぎんにお辞儀じぎをして、何か二こと、三こと、云ったと思ったら、急にこつちへ向いて、例のごとく猫足ねこあしにあるいて来て、や君も湯ですか、僕は乗り後れやしないかと思つて心配して急いで来たら、まだ三四分ある。あの時計はたしかかしらんと、自分の金側きんがわを出して、二分ほどこちがつてると云いながら、おれの傍そばへ腰おろを卸した。女の方はちつとも見返らないで杖つえの上に顚あこをのせて、正面ばかり眺ながめている。年寄の婦人は時々赤シャツを見るが、若い方は横を向いたままである。いよいよマドンナに違ひ

ない。

やがて、ピューと汽笛きてきが鳴つて、車がつく。待ち合
せた連中はそろそろ吾れ勝わに乗り込む。赤シャツはい
の一号に上等へ飛び込んだ。上等へ乗ったつて威張れ
るところではない、住田すみたまで上等が五銭で下等が三銭
だから、わずか二銭違いで上下の区別がつく。こうい
うおれでさえ上等を奮発ふんぱつして白切符を握にぎつてるんでも
わかる。もつとも田舎者はけちだから、たった二銭の
出入でもすこぶる苦になると見えて、大抵たいていは下等へ乗
る。赤シャツのあとからマドンナとマドンナのお袋が

上等へはいり込んだ。うらなり君は活版で押したように下等ばかりへ乗る男だ。先生、下等の車室の入口へ立って、何だか躊躇ちゆうちよの体であつたが、おれの顔を見るや否や思いきつて、飛び込んでしまった。おれはこの時何となく気の毒でたまらなかつたから、うらなり君のあとから、すぐ同じ車室へ乗り込んだ。上等の切符で下等へ乗るに不都合はなからう。

温泉へ着いて、三階から、浴衣ゆかたのなりで湯壺ゆつぽへ下りてみたら、またうらなり君に逢つた。おれは会議や何かでいざと極まると、咽喉のどが塞ふさがつて饒舌しゃべれない男だ

が、平常は随分弁ずる方だから、いろいろ湯壺のなかでうらなり君に話しかけてみた。何だか憐れぽくつてたまらない。こんな時に一口でも先方の心を慰めてやるのは、江戸っ子の義務だと思ってる。ところがあいにくうらなり君の方では、うまい具合にこっちの調子に乗ってくれない。何を云つても、えとかい、えとかぎりで、しかもそのえといえが大分面倒らしいので、しまいにはとうとう切り上げて、こっちからご免蒙った。湯の中では赤シャツに逢わなかった。もつとも風呂の数にはたくさんあるのだから、同じ汽車で着いても、

同じ湯壺で逢うとは極まっていな。別段不思議にも思わなかつた。風呂を出てみるといい月だ。町内の両側に柳が植^{やなぎ}つて、柳の枝^{えだ}が丸^まるい影を往来の中へ落^{おと}している。少し散歩でもしよう。北へ登つて町のはずれへ出ると、左に大きな門があつて、門の突き当りがお寺で、左右が妓楼^{ぎろう}である。山門のなかに遊廓^{ゆうかく}があるなんて、前代未聞の現象だ。ちよつとはいつてみたいが、また狸から会議の時にやられるかも知れないから、やめて素通りにした。門の並びに黒い暖簾^{のれん}をかけた、小さな格子窓^{こうしまど}の平屋はおれが団子を食つて、しくじつた

所だ。まるぢようちん丸提灯に汁粉しるこ、お雑煮ぞうじとかいたのがぶらさがつて、提灯の火が、軒端のきばに近い一本の柳の幹を照らしている。食いたいなと思つたが我慢して通り過ぎた。

食いたい団子の食えないのは情ない。しかし自分の許嫁いいなずけが他人に心移したのは、なお情ないだろう。うらなり君の事を思うと、団子は愚かおろ、三日ぐらい断食だんじきしても不平はこぼせない訳だ。本当に人間ほどあてにならないものはない。あの顔を見ると、どうしたつて、そんな不人情な事をしそうには思えないんだが——うつくしい人が不人情で、冬瓜とうがんの水膨れみずぶくのような古賀さ

んが善良な君子なのだから、油断が出来ない。淡泊だ
と思つた山嵐は生徒を煽動せんどうしたと云うし。生徒を煽動
したのかと思うと、生徒の処分を校長に逼せまるし。厭味いやみ
で練りかためたような赤シャツが存外親切で、おれに
余所よそながら注意をしてくれるかと思うと、マドンナを
胡魔化ごまかしたり、胡魔化したのかと思うと、古賀の方が
破談にならなければ結婚は望まないんだと云うし。い
か銀が難癖なんくせをつけて、おれを追い出すかと思うと、す
ぐ野だ公が入れ替いかわつたり——どう考えてもあてになら
ない。こんな事を清にかいてやったら定めて驚く事だ

ろう。箱根はこねの向うだから化物ばけものが寄り合つてゐるんだと云うかも知れない。

おれは、性来しょうらい構わない性分だから、どんな事でも苦にしないで今日まで凌いで来たのだが、ここへ来てからまだ一ヶ月立つか、立たないうちに、急に世のなかを物騒ぶっそうに思い出した。別段際だった大事件にも出逢わないのに、もう五つ六つ年を取ったような気がする。早く切り上げて東京へ帰るのが一番よからう。などとそれからそれへ考えて、いつか石橋を渡わたつて野芹川のぜりがわの堤どてへ出た。川と云うとえらそうだが実は一間ぐらいな、

ちよろちよろした流れで、土手に沿うて十二丁ほど下ると相生村へ出る。村にはあいおいむら観音様がある。

温泉の町を振り返ると、赤い灯が、月の光の中にかがやいている。太鼓が鳴るのは遊廓に相違ない。川の流れは浅いけれども早いから、神経質の水のようにやたらに光る。ぶらぶら土手の上をあるきながら、約三丁も来たと思ったら、向うに人影が見え出した。月に透かしてみると影は二つある。温泉へ来て村へ帰る若い衆かも知れない。それにしても唄もうたわない。存外静かだ。

だんだん歩いて行くと、おれの方が早足だと見えて、二つの影法師が、次第に大きくなる。一人は女らしい。おれの足音を聞きつけて、十間ぐら^{きより}いの距離に逼った時、男がたちまち振り向いた。月は後からさ^{うしろ}している。その時おれは男の様子を見て、はてなと思った。男と女はまた元の通りにあるき出した。おれは考えがあるから、急に全速力で追っ懸^かけた。先方は何の気もつかずに最初の通り、ゆるゆる歩を移している。今は話し声も手に取るように聞える。土手の幅は六尺ぐらいだから、並んで行けば三人がようやくだ。おれは苦もな

く後ろから追いついて、男の袖を擦り抜けざま、一足前へ出した踵くびすをぐるりと返して男の顔を覗のぞき込んだ。月は正面からおれの五分刈がりの頭から顎あの辺りまで、会釈えしやくもなく照てらす。男はあつと小声に云ったが、急に横を向いて、もう帰ろうと女を促うながすが早いか、温泉ゆの町の方へ引き返した。

赤シャツは図太くて胡魔化すつもりか、気が弱くて名乗り損そくなつたのかしら。ところが狭くて困ってるのは、おればかりではなかった。

八

赤シャツに勧められて釣^{つり}に行つた帰りから、山嵐^{やまあらし}を疑ぐり出した。無い事を種に下宿を出ると云われた時は、いよいよ不埒^{ふらち}な奴^{やつ}だと思つた。ところが会議の席では案に相違^{そうい}して滔々と生徒嚴罰論^{げんばつろん}を述べたから、おや変だなと首を振^{ひね}つた。萩野^{はぎの}の婆^{ばあ}さんから、山嵐が、うらなり君のために赤シャツと談判をしたと聞いた時は、それは感心だと手を拍^うつた。この様子ではわる者

は山嵐じゃあるまい、赤シャツの方が曲つてゐるんで、
好加減いいかげんな邪推じやすいを突まことしやかに、しかも遠廻とおまわしに、おれの
頭の中へ浸しみ込こましたのではあるまいかと迷つてゐる矢
先へ、野芹川のぜりがわの土手で、マドンナを連れて散歩なんか
している姿を見たから、それ以来赤シャツは曲者くせものだと
極めてしまった。曲者だか何だかよくは分わからないが、
ともかくも善いいい男じゃない。表と裏とは違ちがつた男だ。
人間は竹のように真直まつすぐでなくつちや頼たのもしくない。真
直なものは喧嘩けんかをしても心持ちがいい。赤シャツのよ
うなやさしいのと、親切なのと、高尚こうしようなのと、琥珀こはくのパ

イブとを自慢じまんそうに見せびらかすのは油断が出来ない、めったに喧嘩えこういんも出来ないと思った。喧嘩すもうをしても、回向院の相撲すもうのような心持ちのいい喧嘩は出来ないと思つた。そうなると一錢五厘でいりの出入で控所全体ひかえじよを驚ろおどかした議論の相手の山嵐の方がはるかに人間らしい。会議かなつばまなこの時に金壺眼ねこなでごえをぐりつかせて、おれを睨にらめた時は憎にくい奴だと思つたが、あとで考えると、それも赤シャツのねちねちした猫撫声ねこなでごえよりはました。実はあの会議が済んだあとで、よつぽど仲直りをしようかと思つて、一こと二こと話しかけてみたが、野郎返事やろうもしないで、

まだ眼を剥むくつてみせたから、こつちも腹が立つてそのままにしておいた。

それ以来山嵐はおれと口を利かない。机の上へ返した一錢五厘はいまだに机の上に乗っている。ほこりだらけになって乗っている。おれは無論手が出せない、山嵐は決して持つて帰らない。この一錢五厘が二人の間の墻壁しょうへきになつて、おれは話そうと思つても話せない、山嵐は頑がんとして黙だまつてゐる。おれと山嵐には一錢五厘が崇たかつた。しまいには学校へ出て一錢五厘を見るのが苦になつた。

山嵐とおれが絶交の姿となつたに引き易^かえて、赤シャツとおれは依然^{いぜん}として在来^{ざいらい}の關係を保つて、交際をつづけている。野芹川で逢^あつた翌日などは、学校へ出ると第一番におれの傍^{そば}へ来て、君今度の下宿はいいですかのまたいつしよに露西亞^{ロシア}文学を釣^つりに行こうじゃないかのといろいろな事を話しかけた。おれは少々憎^{にく}らしかったから、昨夜^{ゆうべ}は二返逢^ふいましたねと云^いつたら、ええ停車場^{ていしやば}で——君はいつでもあの時分出^で掛^かけるのですか、遅いじゃないかと云う。野芹川の土手でもお目に懸^かりましたねと喰^くらわしてやったら、

いいえ僕はあっちへは行かない、湯にはいつて、すぐ
帰ったと答えた。何もそんなに隠さ^{かく}ないでもよからう、
現に逢つてゐるんだ。よく嘘^{うそ}をつく男だ。これで中学の
教頭が勤まるなら、おれなんか大学総長がつとまる。
おれはこの時からいよいよ赤シャツを信用しなくなつ
た。信用しない赤シャツとは口をきいて、感心してい
る山嵐とは話をしない。世の中は随分妙^{ずいぶん}なものだ。

ある日の事赤シャツがちよつと君に話があるから、
僕のうちまで来てくれと云うから、惜^おしいと思つたが
温泉行きを欠勤して四時頃^{ごろ}出掛けて行つた。赤シャツ

は一人ものだが、教頭だけに下宿はとくの昔むかしに引き
払はらつて立派げんかんな玄関を構えている。家賃は九円五拾錢じつせんだ
そうだ。田舎いなかへ来て九円五拾錢払えばこんな家へはい
れるなら、おれも一つ奮発ふんぱつして、東京から清を呼び寄
せて喜ばしてやろうと思つたくらいな玄関だ。頼むと
云つたら、赤シャツの弟が取次とりつぎに出て来た。この弟は
学校で、おれに代数と算術を教わる至つて出来のわる
い子だ。その癖くせ渡りわたりものだから、生れ付いての田舎者
よりも人が悪わるい。

赤シャツに逢つて用事を聞いてみると、大将例の琥

珀のパイプで、きな臭い烟草くさたばこをふかしながら、こんな事を云った。「君が来てくれてから、前任者の時代よりも成績せいせきがよくあがって、校長も大いにいい人を得たと喜んでいるので——どうか学校でも信頼しんらいしているのだから、そのつもりで勉強していただきたい」

「へえ、そうですか、勉強って今より勉強は出来ませんが——」

「今のくらいで充分じゅうぶんです。ただ先だってお話した事です、あれを忘れずにいて下さればいいのです」

「下宿の世話なんかするもの、あ剣呑けんおんだという事ですか」

「そう露骨に云うと、意味もない事になるが——まあ

善いさ——精神は君にもよく通じている事と思うか

ら。そこで君が今のように出精しゅっせいして下されば、学校の

方でも、ちゃんと見ているんだから、もう少しして

都合つごうさえつけば、待遇たいぐうの事も多少はどうかなるだろ

うと思うんですがね」

「へえ、俸給ほうきゅうですか。俸給なんかどうでもいいんですが、

上がれば上がった方がいいですね」

「それで幸い今度転任者が一人出来るから——もつとも校長に相談してみないと無論受け合えない事だが

——その俸給から少しは融通ゆうづうが出来るかも知れないから、それで都合をつけるように校長に話してみようと思っんですがね」

「どうも難有ありがとう。だれが転任するんですか」

「もう発表になるから話しても差し支つかえないでしょう。実は古賀君です」

「古賀さんは、だってこの人じゃありませんか」

「この地じの人ですが、少し都合があつて——半分は当人の希望です」

「どこへ行ゆくんです」

「日向の延岡で——土地が土地だから一級俸上あがつて行く事になりました」

「誰だれか代りが来るんですか」

「代りも大抵極たいていまつてるんです。その代りの具合で君の待遇上の都合もつくんです」

「はあ、結構です。しかし無理に上がらないでも構いません」

「とも角も僕は校長に話すつもりです。それで校長も同意見らしいが、追つては君にもっと働いて頂いただかなくつてはならんようになるかも知れないから、どうか

今からそのつもりで覚悟かくごをしてやってもらいたいですね」

「今より時間でも増すんですか」

「いいえ、時間は今より減るかも知れませんが——」

「時間が減って、もつと働くんですか、妙だな」

「ちよつと聞くと妙だが、——判然とは今言いにくい
が——まあつまり、君にもつと重大な責任を持っても
らうかも知れないという意味なんです」

おれには一向分らない。今より重大な責任と云えば、
数学の主任だろうが、主任は山嵐だから、やつこさん

なかなか辞職する氣遣きづかいはない。それに、生徒の人望があるから転任や免職めんしょくは学校の得策であるまい。赤シャツの談話はいつでも要領を得ない。要領を得なくつても用事はこれで済んだ。それから少し雑談をしているうちに、うらなり君の送別会をやる事や、ついてはおれが酒を飲むかと云う問や、うらなり先生は君子で愛すべき人だと云う事や——赤シャツはいろいろ弁じた。しまいに話をかえて君俳句をやりますかと来たから、こいつは大変だと思つて、俳句はやりません、さようならと、そこそこに歸つて来た。発句ほっくは芭蕉ばしやうか

髪結床かみいどこの親方のやるもんだ。数学の先生が朝顔やに釣瓶つるべをとられてたまるものか。

帰ってうんと考え込んだ。世間には随分気の知れない男が居る。家屋敷はもちろん、勤める学校に不足のない故郷がいやになったからと云つて、知らぬ他国へ苦勞を求めに出る。それも花の都の電車が通かよつてゐる所なら、まだしもだが、日向の延岡とは何の事だ。おれは船つきのいいここへ来てさえ、一ヶ月立たないうちにもう帰りたくなつた。延岡と云えば山の中も山の中も大變な山の中だ。赤シャツの云うところによると船

から上がって、一日馬車へ乗って、宮崎へ行つて、宮崎からまた一日車へ乗らなくつては着けないそうだと。いちんち名前を聞いてさえ、開けた所とは思えない。猿と人とざるが半々に住んでるような気がする。いかに聖人のうらなり君だつて、好んで猿の相手になりたくもないだろうに、何という物数奇だ。ものずき

ところへあいかわらず婆さんが夕食を運んで出る。ばあ今日もまた芋ですかいと聞いてみたら、いえ今日はお豆腐ぞなもと云つた。とうふどっちにしたつて似たものだ。「お婆さん古賀さんは日向へ行くそうですね」

「ほん当にお気の毒じゃな、もし」

「お気の毒だつて、好んで行くんなら仕方がないですね」

「好んで行くて、誰がぞなもし」

「誰がぞなもしつて、当人がさ。古賀先生が物数奇に行くんじゃありませんか」

「そりやあなた、大違いの勘五郎かんごろうぞなもし」

「勘五郎かね。だつて今赤シャツがそう云いましたぜ。」

それが勘五郎なら赤シャツは嘘つきの法螺ほらえもん右衛門だ」

「教頭さんが、そうお云いるのはもつともじやが、古

賀さんのお往いきともないのももつともぞなもし」

「そんなら両方もつともなんですね。お婆さんは公平でいい。一体どういう訳なんですすい」

「今朝古賀のお母さんが見えて、だんだん訳をお話したかなもし」

「どんな訳をお話したんです」

「あそこもお父さんがお亡くくなりてから、あたし達が思うほど暮くらし向むきが豊かになうてお困りじゃけれ、お母さんが校長さんにお頼みて、もう四年も勤めているものじゃけれ、どうぞ毎月頂くものを、今少しふやして

おくれんかてて、あなた」

「なるほど」

「校長さんが、ようまあ考えてみとうとお云いたげな。それでお母さんも安心して、今に増給のご沙汰さたがあるぞ、今月か来月かと首を長くして待つておいでたところへ、校長さんがちよつと来てくれと古賀さんにお云いるけれ、行つてみると、気の毒だが学校は金が足りんけれ、月給を上げる訳にゆかん。しかし延岡になら空いた口があつて、そつちなら毎月五円余分にとれるから、お望み通りでよかろうと思つて、その手続

きにしたから行くがええと云われたげな。――」

「じゃ相談じゃない、命令じゃありませんか」

「さよよ。古賀さんはよそへ行つて月給が増すより、元のままでもええから、ここに居おりたい。屋敷もあるし、母もあるからとお頼みたけれども、もうそう極めたあとで、古賀さんの代りは出来ているけれ仕方がないと校長がお云いたげな」

「へん人を馬鹿ばかにしてら、面白くもない。じゃ古賀さん

は行く気はないんですね。どうれで変だと思つた。五円ぐらい上がったって、あんな山の中へ猿のお相手を

しに行く唐変木はまずないからね」
とうへんぼく

「唐変木で、先生なんぞなもし」

「何でもいいでさあ、——全く赤シャツの作略だね。」
さりやく

よくない仕打だ。しうちまるで欺撃ですだましうちね。それでおれの月

給を上げるなんて、不都合な事があるものか。ふつごう上げて

やるったって、誰が上がってやるものか」

「先生は月給がお上りるのかなもし」

「上げてやるって云うから、断ことわろうと思うんです」

「何で、お断わりるのぞなもし」

「何でもお断わりだ。お婆さん、あの赤シャツは馬鹿

ですぜ。卑怯ひきようでさあ」

「卑怯でもあんた、月給を上げておくれたら、大人おとなしく
頂いておく方が得ぞなもし。若いうちはよく腹の立つ
ものじゃが、年をとってから考えると、も少しの我慢がまん
じゃあつたのに惜しい事をした。腹立てたためにこな
いな損をしたと悔くやむのが当り前じゃけれ、お婆の言う
事をきいて、赤シャツさんが月給をあげてやろとお言
いたら、難有ありがとうと受けておおきなさいや」
「年寄としよりの癖に余計な世話を焼かなくつてもいい。おれ
の月給は上がろうと下がろうとおれの月給だ」

婆さんはだまつて引き込んだ。爺さんじいは呑気のんきな声を出して謡うたいをうたつてゐる。謡というものは読んでわかる所を、やにむずかしい節をつけて、わざと分らなくする術だろう。あんな者を毎晩飽あきずに唸うなる爺さんの気が知れない。おれは謡どころの騒さわぎじゃない。月給を上げてやろうと云うから、別段欲しくもなかったが、入らない金を余しておくのももつたいたいと思つて、よろしいと承知したのだが、転任したくないものを無理に転任させてその男の月給の上前を跳はねるなんて不人情な事が出来るものか。当人がもとの通りでいいと

云うのに延岡下りまで落ちさせるとは一体どう云う
了見りようけんだろう。太宰権帥ださいごんのそつでさえ博多近辺はかたで落ちついたも
のだ。河合又五郎かあいまたごろうだつて相良さがらでとまってるじゃないか。
とにかく赤シャツの所へ行つて断わつて来なくつちあ
気が済まない。

小倉こくらの袴はかまをつけてまた出掛けた。大きな玄関へ突つ
立つて頼むと云うと、また例の弟が取次めつきに出て来た。
おれの顔を見てまた来たかという眼付めつきをした。用があ
れば二度だつて三度だつて来る。よる夜なかだつて叩たた
き起おこさないととは限らない。教頭の所へきげんうかがご機嫌伺きげんうかがいにく

るようなおれと見損みそくなつてゐるか。これでも月給が入らないから返しに來きたんだ。すると弟が今來客中だと云うから、玄関でいいからちよつとお目にかかりたいと云つたら奥おくへ引き込んだ。足元を見ると、畳たた付きの薄っぺらな、のめりの駒下駄こまげたがある。奥でもう万歳ばんざいですよと云う声が聞きこえる。お客とは野だだと気がついた。野だでなくては、あんな黄色い声を出して、こんな芸人じみた下駄はを穿くものはない。

しばらくすると、赤シャツがランプを持って玄関まで出て来て、まあ上がりたまえ、外の人じゃない吉川

君だ、と云うから、いえここでたくさんです。ちよつと話せばいいんです、と云つて、赤シャツの顔を見ると金時のようだ。野だ公と一杯飲いっぱいんでると見える。

「さつき僕の月給を上げてやるというお話でしたが、少し考えが變つたから断わりに來たんです」

赤シャツはランプを前へ出して、奥の方からおれの顔を眺ながめたが、とつさの場合返事をしかねて茫然ぼうぜんとしている。増給を断ふしんわる奴が世の中にたった一人飛び出して來たのを不審ふしんに思つたのか、断ふしんわるにしても、今歸つたばかりで、すぐ出直してこなくつてもよさそう

なものだど、呆れ返ったのか、または双方合併そうほうがつっぺいしたのか、妙な口をして突つ立つたままである。

「あの時承知したのは、古賀君が自分の希望で転任するという話でしたからで……」

「古賀君は全く自分の希望で半ば転任するんです」

「そうじゃないんです、ここに居たいんです。元の月給でもいいから、郷里に居たいのです」

「君は古賀君から、そう聞いたのですか」

「そりや当人から、聞いたんじゃないやありません」

「じゃ誰からお聞きです」

「僕の下宿の婆さんが、古賀さんのおつ母さんかから聞いたのを今日僕に話したのです」

「じゃ、下宿の婆さんがそう云ったのですね」

「まあそうです」

「それは失礼ながら少し違ふでしよう。あなたのおつしやる通りだと、下宿屋の婆さんの云う事は信ずるが、教頭の云う事は信じないと云うように聞えるが、そういう意味に解釈して差支さしかえないでしょうか」

おれはちよつと困った。文学士なんてものはやつぱりえらいものだ。妙な所へこだわつて、ねちねち押おし

寄せてくる。おれはよく親父おやじから貴様はそそっかしくて駄目だめだ駄目だと云われたが、なるほど少々そそっかしいようだ。婆さんの話を聞いてはっと思つて飛び出して来たが、実はうらなり君にもうらなりのおつ母さんにも逢つて詳しい事情は聞いてみなかつたのだ。だからこう文学士流に斬りき付けられると、ちよつと受け留めにくい。

正面からは受け留めにくいが、おれはもう赤シャツに對して不信任を心うちの中で申し渡してしまつた。下宿の婆さんもけちん坊ぼうの欲張り屋に相違ないが、嘘は吐つ

かない女だ、赤シャツのように裏表はない。おれは仕方がないから、こう答えた。

「あなたの云う事は本当かも知れないですが——とにかく増給はご免蒙りますめんこうむ」

「それはますます可笑おかしい。今君がわざわざお出いでになつたのは増俸を受けるには忍しのびない、理由を見出したからのように聞えたが、その理由が僕の説明で取り去られたにもかかわらず増俸を否まれるのは少し解しかねるようですね」

「解しかねるかも知れませんがね。とにかく断わりま

すよ」

「そんなに否いやなら強いてとまでは云いませんが、そう二三時間のうちに、特別の理由もないのに豹ひょう変ようしちや、将来君の信用にかかわる」

「かかわつても構わないです」

「そんな事はないはずです、人間に信用ほど大切なものはありませんよ。よしんば今一步譲ゆずつて、下宿の主人が……」

「主人じゃない、婆さんです」

「どちらでもよろしい。下宿の婆さんが君に話した事

を事実としたところで、君の増給は古賀君の所得を削^{けず}つて得たものではないでしょう。古賀君は延岡へ行かれる。その代りがくる。その代りが古賀君よりも多少低給で来てくれる。その剰余^{じょうよ}を君に廻^まわすと云うのだから、君は誰にも気の毒がる必要はないはずです。古賀君は延岡でただ今よりも栄進される。新任者は最初からの約束^{やくそく}で安くくる。それで君が上がりければ、これほど都合^{つごう}のいい事はないと思うですがね。いやなら否^{いや}でもいいが、もう一返うちでよく考えてみませんか」

おれの頭はあまりえらくないのだから、いつもなら、
相手がこういう巧妙な弁舌を揮えば、おやそうかな、
それじゃ、おれが間違つてたと恐れ入つて引きさがる
のだけれども、今夜はそうは行かない。ここへ来た最
初から赤シャツは何だか虫が好かなかつた。途中で親
切な女みたような男だと思い返した事はあるが、それ
が親切でも何でもなさそうなので、反動の結果今じゃ
よつぽど厭いやになつてゐる。だから先がどれほどうまく
論理的に弁論を逞たくましくしようとも、堂々たる教頭流にお
れを遣り込めようとも、そんな事は構わない。議論の

いい人が善人とはきまらない。遣り込められる方が悪人とは限らない。表向きは赤シャツの方が重々もつともだが、表向きがいくら立派だつて、腹の中まで惚れさせる訳には行かない。金や威力いりよくや理屈りくつで人間の心が買える者なら、高利貸でも巡査じゅんさでも大学教授でも一番人に好かれなくてはならない。中学の教頭ぐらいな論法でおれの心がどう動くものか。人間は好き嫌いで働くものだ。論法で働くものじゃない。

「あなたの云う事はもつともですが、僕は増給がいやになつたんですから、まあ断わります。考えたつて同

じ事です。さようなら」と云いすてて門を出た。頭の上には天の川が一筋かかっている。

九

うらなり君の送別会のあるという日の朝、学校へ出たら、山嵐やまあらしが突然とつぜん、君先だつてはいか銀が来て、君が乱暴して困るから、どうか出るように話してくれと頼んだから、真面目まじめに受けて、君に出てやれと話したのだが、あとから聞いてみると、あいつは悪わるい奴やつで、

よく偽筆ぎひつへ贋落款にせらつかんなどを押おして売りつけるそうだから、全く君の事も出鱈目でたらめに違ちがいない。君に懸物かけものや骨董こつどうを売りつけて、商売にしようと思つてたところが、君が取り合わないで儲けもうがないものだから、あんな作りごとをこしらえて胡魔化ごまかしたのだ。僕はあの人物を知らなかつたので君に大變失敬した勘弁かんべんしたまえと長々しい謝罪をした。

おれは何とも云わずに、山嵐りんの机の上にあつた、一錢五厘りんをとつて、おれの蝦蟇口がまぐちのなかへ入れた。山嵐は君それを引き込こめるのかと不審ふしんそうに聞くから、う

んおれは君に奢おごられるのが、いやだったから、是非返すつもりでいたが、その後だんだん考えてみると、やっぱり奢おごつてもらう方がいいようだから、引き込ますんだと説明した。山嵐は大きな声をしてアハハハと笑いながら、そんなら、なぜ早く取らなかつたのだと聞いた。実は取ろう取ろうと思つてたが、何だか妙みょうだからそのままにしておいた。近来は学校へ来て一錢五厘を見るのが苦になるくらいいやだったと云つたら、君はよつぽど負け惜おしみの強い男だと云うから、君はよつぽど剛情張こゝろじようつばりだと答えてやった。それから二人の間に

こんな問答が起おこった。

「君は一体どこの産だ」

「おれは江戸えどっ子だ」

「うん、江戸っ子か、道理で負け惜しみが強いと思つた」

「きみはどこだ」

「僕は会津あいづだ」

「会津っ婆か、強情な訳だ。今日の送別会へ行くのかい」
「行くとも、君は？」

「おれは無論行くんだ。古賀さんが立つ時は、浜はままで見
送りに行こうと思つてゐるくらいだ」

「送別会は面白いぜ、出て見たまえ。今日は大いに飲むつもりだ」

「勝手に飲むがいい。おれは肴さかなを食ったら、すぐ帰る。酒なんか飲む奴は馬鹿ばかだ」

「君はすぐ喧嘩けんかを吹き懸かける男だ。なるほど江戸っ子の軽跳けいちような風を、よく、あらわしてる」

「何でもいい、送別会へ行く前にちよつとおれのうちへお寄り、話はなしがあるから」

山嵐は約束やくそく通りおれの下宿へ寄った。おれはこの間

から、うらなり君の顔を見る度に氣の毒でたまらなかつたが、いよいよ送別の今日となったら、何だか憐れつぽくつて、出来る事なら、おれが代りに行つてやりたい様な氣がしだした。それで送別会の席上で、大いに演説でもしてその行を盛さかんにしてやりたいと思うのだが、おれのべらんめえ調子じゃ、到底物とうていにならないから、大きな声を出す山嵐やとを雇つて、一番赤シャツの荒肝あらぎもを挫ひしいでやろうと考え付いたから、わざわざ山嵐を呼んだのである。

おれはまず冒頭ぼうとうとしてマドンナ事件から説き出した

が、山嵐は無論マドンナ事件はおれより詳しく知^{くわ}っている。おれが野芹^{のぜりがわ}川の土手の話をして、あれは馬鹿^{ばかやろう}野郎だと云つたら、山嵐は君はだれを捕^{つら}まえても馬鹿呼^{よば}わりをする。今日学校で自分の事を馬鹿と云つたじゃないか。自分が馬鹿なら、赤シャツは馬鹿じゃない。自分は赤シャツの同類じゃないと主張した。それじゃ赤シャツは腑^ふ抜^ぬけの呆^{ほう}助^{すけ}だと云つたら、そうかもしれないと山嵐は大いに賛成した。山嵐は強い事は強いが、こんな言葉になると、おれより遙^{はる}かに字を知っていない。会津っ婆なんてものはみんな、こんな、も

のなんだろう。

それから増給事件と将来重く登用すると赤シャツが云った話をしたら山嵐はふふんと鼻から声を出して、それじゃ僕を免職する考えだなと云った。免職するつもりだって、君は免職になる気かと聞いたら、誰がなめるものか、自分が免職になるなら、赤シャツもいっしょに免職させてやると大いに威張った。どうしていっしょに免職させる気かと押し返して尋ねたら、そこはまだ考えていないと答えた。山嵐は強そうだが、智慧はあまりなさそうだ。おれが増給を断わったと話した

ら、大将大きに喜んでさすが江戸っ子だ、えらいと賞^ほめてくれた。

うらなりが、そんなに厭^{いや}がつているなら、なぜ留任の運動をしてやらなかったと聞いてみたら、うらなりから話を聞いた時は、既^{すで}にきまつてしまつて、校長へ二度、赤シャツへ一度行つて談判してみたが、どうする事も出来なかつたと話した。それについても古賀があまり好人物過ぎるから困る。赤シャツから話があつた時、断然断わるか、一応考えてみますと逃^にげればよいのに、あの弁舌に胡魔化されて、即席^{そくせき}に許諾^{きょだく}したも

のだから、あとからお母^{つか}さんが泣きついてても、自分が談判に行つても役に立たなかつたと非常に残念がつた。

今度の事件は全く赤シャツが、うらなりを遠ざけて、マドンナを手に入れる策略なんだろうとおれが云つたら、無論そうに違いない。あいつは大人^{おとな}しい顔をして、悪事を働いて、人が何か云うと、ちゃんと逃道^{にげみち}を拵^{こしら}えて待つてゐるんだから、よつぽど奸物^{かんぶつ}だ。あんな奴にかかつては鉄拳制裁^{てつけんせいさい}でなくつちや利かないと、瘤^{こぶ}だらけの腕^{うで}をまくつてみせた。おれはついでだから、君の腕

は強そうだな柔術じゆうじゆつでもやるかと聞いてみた。すると大將二の腕へ力瘤を入れて、ちよつと攫つかんでみると云うから、指の先で揉もんでみたら、何の事はない湯屋にある軽石の様なものだ。

おれはあまり感心したから、君そのくらいの腕なら、赤シャツの五人や六人は一度に張り飛ばされるだろうと聞いたら、無論さと云いながら、曲げた腕を伸のばしたり、縮ましたりすると、力瘤がぐるりぐると皮のなかで廻かいてん転する。すこぶる愉快ゆかいだ。山嵐の証明する所によると、かんじん綱よりを二本より合せて、この力瘤

の出る所へ巻きつけて、うんと腕を曲げると、ぷつりと切れるそうだ。かんじんよりなら、おれにも出来そうだと云ったら、出来るものか、出来るならやってみろと来た。切れないと外聞がわるいから、おれは見合せた。

君どうだ、今夜の送別会に大いに飲んだあと、赤シャツと野だを撲なぐつてやらないかと面白半分に勧めてみた。山嵐はそうだなと考えていたが、今夜はまあよそうと云った。なぜと聞くと、今夜は古賀に気の毒だから——それにどうせ撲るくらいなら、あいつらの悪る

い所を見届けて現場で撲らなくっちゃ、こっちの落度になるからと、分別のありそうな事を附加つけたした。山嵐でもおれよりは考えがあると見える。

じゃ演説をして古賀君を大いにほめてやれ、おれがすると江戸っ子のぺらぺらになつて重みがなくていけない。そうして、きまつた所へ出ると、急に溜飲りゅういんが起つて咽喉のどの所へ、大きな丸たまが上がつて来て言葉が出ないから、君に譲ゆずるからと云つたら、妙な病気だな、じゃ君は人中じゃ口は利けないんだね、困るだろう、と聞くから、何そんなに困りやしないと答えておいた。

そうこうするうち時間が来たから、山嵐と一所に会場へ行く。会場は花晨亭かしんていといつて、当地ここで第一等の料理屋だそうだが、おれは一度も足を入れた事がない。もとの家老とかの屋敷やしきを買い入れて、そのまま開業したという話だが、なるほど見懸みかけからして厳めしい構えだ。家老の屋敷が料理屋になるのは、陣羽織じんぼおりを縫ぬい直して、胴着どうぎにする様なものだ。

二人が着いた頃ころには、人数にんずももう大概揃たいがいそろつて、五十畳じゅうじょうの広間ひろまに二つ三つ人間の塊かたまりが出来ている。五十畳じゅうじょうだけに床とこは素敵に大きい。おれが山城屋で占領せんりょうした十五

畳敷の床とは比較にならない。尺を取つてみたら二間あつた。右の方に、赤い模様のある瀬戸物の瓶かめを据すえて、その中に松まつの大きな枝えだが挿さしてある。松の枝を挿して何にする気か知らないが、何ヶ月立つても散る気遣いがないから、銭が懸らなくつて、よかろう。あの瀬戸物はどこで出来るんだと博物の教師に聞いたら、あれは瀬戸物じゃありません、伊万里いまりですと云つた。伊万里だつて瀬戸物じゃないかと、云つたら、博物はえへへへと笑つていた。あとで聞いてみたら、瀬戸で出来る焼物だから、瀬戸と云うのだそうだ。おれは

江戸っ子だから、陶器とうきの事を瀬戸物というのかと思つていた。床の真中に大きな懸物があつて、おれの顔くらいな大きな字が二十八字かいてある。どうも下手なものだ。あんまり不味まずいから、漢学の先生に、なぜあんなまずいものを麗々と懸けておくんですと尋ねたところ、先生はあれは海屋かいおくといつて有名な書家のかいた者だと教えてくれた。海屋だか何だか、おれは今だに下手だと思つている。

やがて書記の川村がどうかお着席をと云うから、柱があつて靠よりかかるのに都合のいい所へ坐すわつた。海屋

の懸物の前に狸たぬきが羽織はおり、袴はかまで着席すると、左に赤シャツが同じく羽織袴で陣取じんどった。右の方は主人公だというのでうらなり先生、これも日本服で控ひかえている。おれは洋服だから、かしこまるのが窮屈きゆうくつだったから、すぐ胡坐あぐらをかいた。隣となりの体操教師たいそうは黒ずぼんで、ちやんとかしこまっている。体操の教師だけにいやに修行が積たんでいる。やがてお膳ぜんが出る。徳利とくりが並ならぶ。幹事が立って、一言開会いちごんかいの辞を述べる。それから狸が立つ。赤シャツが起たつ。ことごとく送別の辞を述べたが、三人共申し合せたようにうらなり君の、良教師で好人物

な事を吹聴^{ふいちよう}して、今回去られるのはまことに残念である、学校としてのみならず、個人として大いに惜しむところであるが、ご一身上のご都合で、切に転任をご希望になったのだから致^{いた}し方^{かた}がないという意味を述べた。こんな嘘^{うそ}をついて送別会を開いて、それでちつとも恥^{はず}かしいとも思っていない。ことに赤シャツに至つて三人のうちで一番うらなり君をほめた。この良友を失うのは実に自分にとって大なる不幸であるとまで云った。しかもそのいい方がいかにも、もつともらしくつて、例のやさしい声を一層やさしくして、述べ立

てるのだから、始めて聞いたものは、誰でもきつとだ
まされるに極きまつてゐる。マドンナも大方この手で引掛ひっかけ
たんだらう。赤シャツが送別の辞を述べ立てている最
中、向側むかいがわに坐つていた山嵐がおれの顔を見てちよつと
稲光いなびかりをさした。おれは返電として、人指し指でべっか
んこうをして見せた。

赤シャツが座に復するのを待ちかねて、山嵐がぬつ
と立ち上がったから、おれは嬉うれしかったので、思わず
手をぱちぱちと拍うつた。すると狸を始め一同がことごとく
おれの方を見たには少々困つた。山嵐は何を云う

かと思うとただ今校長始めことに教頭は古賀君の転任を非常に残念がられたが、私は少々反対で古賀君が

いちじつ

一日も早く当地を去られるのを希望しております。延

へきえん

岡は僻遠の地で、当地に比べたら物質上の不便はある

だろう。が、聞くところによれば風俗のすこぶる淳朴

じようだいほくちよく

な所で、職員生徒ことごとく上代樸直の気風を帯びて

いるそうである。心にもないお世辞を振り蒔いたり、

おとしい

美しい顔をして君子を陥れたりするハイカラ野郎は一

人もないと信ずるからして、君のごとき温良篤厚の士

とつこう

は必ずその地方一般の歓迎を受けられるに相違ない。

かんげい

そうい

吾輩わがはいは大いに古賀君のためにこの転任を祝するのである。終りに臨んで君が延岡ふにんに赴任しゆくじよされたら、その地の淑女しゆくじよにして、君子こうきゆうの好逑いちじつとなるべき資格あるものを択えらんで一日も早く円満なる家庭をかたち作つて、かの不貞無節なるお転婆てんばを事実の上において慚死ざんしせしめん事を希望します。えへんえへんと二つばかり大きな咳せきばら払いをして席に着いた。おれは今度も手を叩たたこうと思つたが、またみんながおれの面かおを見るといやだから、やめにしておいた。山嵐が坐ると今度はうらなり先生が起つた。先生は鄭寧ていねいに、自席から、座敷の端はしの末座

まで行つて、いんぎん慇懃に一同に挨拶あいさつをした上、今般は一身
上の都合で九州へ参る事になりましたについて、諸先
生方が小生のためにこの盛大せいだいなる送別会をお開き下
さつたのは、まことに感銘かんめいの至りに堪たえぬ次第で――
ことにただ今は校長、教頭その他諸君の送別の辞を
ちようだい頂戴して、大いに難有ありがたく服膺ふくようする訳であります。私は
これから遠方へ参りますが、なにとぞ従前の通りお見
捨てなくご愛顧あいこのほどを願います。とへえつく張つて
席もどに戻つた。うらなり君はどこまで人が好いんだか、
ほとんど底が知れない。自分がこんなに馬鹿にされて

いる校長や、教頭にうやうや恭しくお礼を云っている。それも義理一遍いっぺんの挨拶ならだが、あの様子や、あの言葉つきや、あの顔つきから云うと、心しんから感謝しているらしい。こんな聖人に真面目にお礼を云われたら、気の毒になつて、赤面しそうなものだが狸も赤シャツも真面目にきんちよう謹聴しているばかりだ。

挨拶が済んだら、あちらでもチュー、こちらでもチュー、という音がする。おれも真似をして汁しるを飲んでみたがまずいもんだ。口取くちとりに蒲鉾かまぼこはついてるが、どす黒くて竹輪の出来損ないである。刺身さしみも並んでるが、

厚くつて鮪まぐろの切り身を生で食うと同じ事だ。それでも隣となり近所の連中はむしゃむしゃうま旨そうに食っている。大方江戸前の料理を食った事がないんだろう。

そのうち爛徳利かんどくりが頻繁ひんぱんに往来し始めたら、四方が急に賑にぎやかになった。野だ公は恭しく校長の前へ出て盃さかずきを頂いてる。いやな奴だ。うらなり君は順々に献酬けんしゅうをして、一巡周いちじゆんめぐるつもりとみえる。はなはだご苦労である。うらなり君がおれの前へ来て、一つ頂戴致しましようにと袴のひだを正して申し込まれたから、おれも窮屈にズボンのままかしこまって、一盃ばい差し上げ

た。せつかく参つて、すぐお別れになるのは残念ですね。ご出立しゅつたつはいつです、是非浜までお見送りをしましよ
うと云つたら、うらなり君はいえご用多おほのところ決してそれには及びおよませんと答えた。うらなり君が何と云つたつて、おれは学校を休んで送る氣でいる。

それから一時間ほどするうちに席上は大分乱れて来る。まあ一杯ぱい、おや僕が飲めと云うのに……などと呂律ろれつの巡りまわかねるのも一人二人出来て来た。少々退屈たいくつしたから便所へ行つて、昔風な庭を星明りにすかして眺ながめていると山嵐が来た。どうださっきの演説はうま

かつたろう。と大分得意である。大賛成だが一ヶ所気に入らないと抗議こうぎを申し込んだら、どこが不賛成だと聞いた。

「美しい顔をして人を陥おれるようなハイカラ野郎は延岡に居おらないから……と君は云つたろう」

「うん」

「ハイカラ野郎だけでは不足だよ」

「じゃ何と云うんだ」

「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫被ねこつかぶりの、香具や師しの、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん

鳴けば犬も同然な奴とでも云うがいい」

「おれには、そう舌は廻らない。君は能弁だ。第一単語を大變たくさん知ってる。それで演舌えんぜつが出来ないのは不思議だ」

「なにこれは喧嘩けんかのときに使おうと思つて、用心のためを取つておく言葉さ。演舌となつちや、こうは出ない」

「そうかな、しかしぺらぺら出るぜ。もう一遍やつて見たまえ」

「何遍でもやるさいいか。——ハイカラ野郎のペテン

師の、イカサマ師の……」と云いかけていると、椽側えんがわをどたばた云わして、二人ばかり、よろよろしながら馳かけ出して来た。

「両君そりゃひどい、——逃げるなんて、——僕が居るうちは決して逃にがさない、さあのみたまえ。——いかさま師？——面白い、いかさま面白い。——さあ飲みたまえ」

とおれと山嵐をぐいぐい引つ張つて行く。実はこの兩人共便所に来たのだが、酔よってるもんだから、便所へはいるのを忘れて、おれ等を引つ張るのだらう。酔つ

払いは目の中あたる所へ用事を拵えて、前の事はすぐ忘れてしまふんだろう。

「さあ、諸君、いかさま師を引つ張つて来た。さあ飲ましてくれたまえ。いかさま師をうんと云うほど、酔わしてくれたまえ。君逃げちやいかん」

と逃げもせぬ、おれを壁際かべぎわへ押し付けた。諸方を見廻してみると、膳の上に満足な肴の乗っているのは一つもない。自分の分を奇麗きれいに食い尽つくして、五六間先へ遠征えんせいに出た奴もいる。校長はいつ帰ったか姿が見えない。

ところへお座敷はこちら？　と芸者が三四人はいつて来た。おれも少し驚ろいたが、壁際へ押し付けられているんだから、じつとしてただ見ていた。すると今まで床柱へもたれて例の琥珀のパイプを自慢そうに啣くわえていた、赤シャツが急に起つて、座敷を出にかかった。向うからはいつて来た芸者の一人が、行き違いなむこがら、笑つて挨拶をした。その一人は一番若くて一番奇麗な奴だ。遠くで聞えなかつたが、おや今晚はぐらい云つたらしい。赤シャツは知らん顔をして出て行つたぎり、顔を出さなかつた。大方校長のあとを追懸けおい

て帰ったんだろう。

芸者が来たら座敷中急に陽気になって、一同が関ときの声を揚あげて歓迎かんげいしたのかと思うくらい、騒々しい。そうしてある奴はなんことを攫つかむ。その声の大きな事、まるで居合抜いあいぬきの稽古けいこのようだ。こつちでは拳けんを打ってる。よつ、はつ、と夢中むちゆうで両手を振るところは、ダーク一座あやつりにんぎようの操人形しやくよりよつぽど上手じようずだ。向うの隅すみではおいお酌しやくだ、と徳利を振ってみて、酒だ酒だと言ひ直してゐる。どうもやかましくて騒々しくつてたまらない。そのうちで手持無沙汰てもちぶさたに下を向いて考え込んでるのは

うらなり君ばかりである。自分のために送別会を開いてくれたのは、自分の転任を惜おしんでくれるんじゃない。みんなが酒を呑のんで遊ぶためだ。自分独りが手持無沙汰で苦しむためだ。こんな送別会なら、開いてもらわない方がよっぽどましだ。

しばらくしたら、めいめいどうまごえ胴間声を出して何か唄うたい始めた。おれの前へ来た一人の芸者が、あんた、なんぞ、唄いなはれ、と三味線を抱かえたから、おれは唄わない、貴様唄ってみろと云ったら、金かねや太鼓たいこでねえ、迷子の迷子の三太郎と、どんどこ、どんのちゃんちき

りん。叩いて廻つて逢あわれるものならば、わたしなんぞも、金や太鼓でどんどこ、どんのちゃんちきりんと叩いて廻つて逢いたい人がある、と一息にうたつて、おおしんど云つた。おおしんどなら、もつと楽なものをやればいいのに。

すると、いつの間にか傍そばへ来て坐つた、野だが、鈴ちゃん逢いたい人に逢つたと思つたら、すぐお歸りで、お気の毒さまみたようでげすと相変らず嘸はなし家みたような言葉使いをする。知りまへんと芸者はつんと済ました。野とんじやくだは頓着なく、たまたま逢いは逢いながら

……と、いやな声を出して義太夫ぎだゆうの真似まねをやる。おきなはれやと芸者は平手で野だの膝ひざを叩いたら野だはきようえつ恐悦して笑つてゐる。この芸者は赤シャツに挨拶をした奴だ。芸者に叩かれて笑うなんて、野だもおめでたい者だ。鈴ちゃん僕が紀伊きいの国を踊おどるから、一つ弾ひいて頂戴と云い出した。野だはこの上まだ踊る氣でいる。向うの方で漢学のお爺じいさんが齒のない口を歪ゆがめて、そりや聞えませんか伝兵衛でんべいさん、お前とわたしのその中は……とまでは無事に済すましたが、それから？　と芸者に聞いている。爺さんなんて物覚えのわるいものだ。

一人が博物を捕まえて近頃ちかごろこないなのが、でけましたぜ、弾いてみまほうか。よう聞いて、いなはれや——
花月巻、白いリボンのハイカラ頭、乗るは自転車、弾くはヴァイオリン、半可はんかの英語でぺらぺらと、I am glad to see you と唄うと、博物はなるほど面白い、英語入りだねと感心している。

山嵐は馬鹿に大きな声を出して、芸者、芸者と呼んで、おれが剣舞けんぶをやるから、三味線を弾けと号令を下した。芸者はあまり乱暴な声なので、あつけに取られて返事もしない。山嵐は委細構わず、ステッキを持つ

て来て、踏破^{ふみやぶる}千山万岳^{せんざんばんがく}烟と真中へ出て独りで隠^{かく}し芸を演じている。ところへ野だがすでに紀伊^{きい}の国を済まして、かつぽれを済まして、棚^{たな}の達磨^{だるま}さんを済まして丸裸^{まるはだか}の越中^{えっちゅう}禪^{ふん}一つになつて、棕櫚^{しゆろ}箒^{ぼう}を小脇^{せうわき}に抱^かい込んで、日清談判破裂^{はれつ}して……と座敷中練りあるき出した。まるで氣違^{きちが}いだ。

おれはさつきから苦しそうに袴も脱^ぬがず控えているうらなり君が気の毒でたまらなかつたが、なんぼ自分の送別会だつて、越中禪^{はだかおどり}の裸踊^{はだかおどり}まで羽織袴で我慢^{がまん}してみている必要はあるまいと思つたから、そばへ行つて、

古賀さんもう帰りましょうと退去を勧めてみた。するとうらなり君は今日は私の送別会だから、私が先へ帰っては失礼です、どうぞご遠慮えんりよなくと動く景色もない。なに構うもんですか、送別会なら、送別会らしくするがいいです、あの様をご覧なさい。気狂きちがいかい会です。さあ行きましよう、進まないのを無理に勧めて、座敷を出かかるところへ、野だが箒を振り振り進行して来て、やご主人が先へ帰るとはひどい。日清談判だ。帰せないと箒を横にして行く手を塞ふさいだ。おれはさつきから肝癪かんしゃくが起っているとところだから、日清談判なら

貴様はちゃんちゃんだらうと、いきなり拳骨げんこつで、野だの頭をぽかりと喰くわしてやった。野だは二三秒の間毒気を抜かれた体ていで、ぼんやりしていたが、おやこれはひどい。お撲ぶちになったのは情ない。この吉川をちようちやく打擲うちやくとは恐れ入った。いよいよもって日清談判だ。とわからぬ事をならべているところへ、うしろから山嵐そうどうが何か騒動が始まったと見てとって、剣舞をやめて、飛んできたが、このていたらくを見て、いきなり頸筋くびすじをうんと攫つかんで引き戻もどした。日清……いたい。いたい。どうもこれは乱暴だと振りもがくところを横ねじに振ねじった。

ら、すたとんと倒れた。たおあとはどうなったか知らない。
途中とちゆうでうらなり君に別れて、うちへ帰ったら十一時過
ぎだった。

十

祝勝会で学校はお休みだ。たぬき練兵場れんべいばで式があるという
ので、狸たぬきは生徒を引率して参列しなくてはならない。
おれも職員ひとりの一人としていっしょにくつついて行くん
だ。町へ出ると日の丸だらけで、まぼしいくらいであ

る。学校の生徒は八百人もあるのだから、体操の教師が隊伍たいごを整えて、一組一組の間を少しずつ明けて、それへ職員が一人か二人ふたりずつ監督かんとくとして割り込む仕掛けである。仕掛けしかけだけはすこぶる巧妙こうみょうなものだが、実際はすこぶる不手際である。生徒は小供こどもの上に、生意気で、規律を破らなくっては生徒の体面にかかわると思つてる奴等やつらだから、職員が幾人いくたりついて行つたつて何の役に立つもんか。命令も下さないのに勝手な軍歌をうたつたり、軍歌をやめるとワーと訳もないのに関ときの声を揚あげたり、まるで浪人ろうにんが町内をねりあるいてるようなも

のだ。軍歌も関の声も揚げない時はがやがや何か喋舌しゃべつてる。喋舌しゃべらないでも歩けそうなもんだが、日本人はみな口から先へ生れるのだから、いくら小言を云いつたつて聞きつこない。喋舌しゃべるのもただ喋舌しゃべるのではない、教師のわる口を喋舌しゃべるんだから、下等だ。おれは宿直事件で生徒を謝罪おおちがさして、まあこれならよろうと思つていた。ところが実際は大違おおちがいである。下宿ばあの婆さんの言葉を借りて云えば、正に大違おおちがいの勘五郎かんごろうである。生徒があやまつたのは心しんから後悔こうかいしてあやまつたのではない。ただ校長から、命令されて、

形式的に頭を下げたのである。商人が頭ばかり下げて、
狡^{ずる}い事をやめないのと一般で生徒も謝罪だけはする
が、いたずらは決してやめるものでない。よく考えて
みると世の中はみんなこの生徒のようなものから成立
しているかも知れない。人があやまつたり詫^わびたりす
るのを、真面目^{まじめ}に受けて勘弁するのは正直過ぎる馬鹿^{ばか}
と云うんだらう。あやまるのも仮りにあやまるので、
勘弁するのも仮りに勘弁するのだと思つてれば差^さし支^{つか}
えない。もし本当にあやまらせる気なら、本当に後悔
するまで叩^{たた}きつけなくてはいけない。

おれが組と組の間にはいつて行くと、天麩羅だの、
団子だの、と云う声が絶えずする。しかも大勢だから、
誰^{だれ}が云うのだから分らない。よし分つてもおれの事を天
麩羅と云つたんじゃないやありません、団子と申したのじゃ
ありません、それは先生が神経衰弱^{しんけいすいじやく}だから、ひがんで、
そう聞くんだらう云うに極^きまつてる。こんな卑劣^{ひれつ}な
根性は封建時代から、養成したこの土地の習慣なんだ
から、いくら云つて聞かしたつて、教えてやつたつて、
到底^{とうてい}直りつこない。こんな土地に一年も居ると、潔白
なおれも、この真似^{まね}をしなければならなく、なるかも

知れない。向うでうまく言い抜けられるような手段で、おれの顔を汚すのを抛っておく、樗蒲一はない。向うが人ならおれも人だ。生徒だって、子供だって、ずう体はおれより大きいや。だから刑罰として何か返報をしてやらなくっては義理がわるい。ところがこつちから返報をする時分に尋常の手段で行くと、向うから逆振を食わして来る。貴様がわるいからだと言つと、初手から逃げ路が作つてある事だから滔々と弁じ立てる。弁じ立てておいて、自分の方を表向きだけ立派にしてそれからこつちの非を攻撃する。もともと返報に

した事だから、こちらの弁護は向うの非が挙がらない
上は弁護にならない。つまりは向うから手を出してお
いて、世間体はこっちが仕掛けた喧嘩けんかのように、見倣みな
されてしまう。大変な不利益だ。それなら向うのやる
なり、愚迂多良童子ぐうたらどうじを極め込んでいれば、向うはま
ます増長するばかり、大きく云えば世の中のためにな
らない。そこで仕方がないから、こっちも向うの筆法
を用いて捕まつかえられないで、手の付けようのない返報
をしなくてはなくなる。そうなつては江戸えどっ子も
駄目だめだ。駄目だが一年もこうやられる以上は、おれも

人間だから駄目でも何でもそうならなくっちゃ始末がつかない。どうしても早く東京へ帰って清きよといっしょになるに限る。こんな田舎いなかに居るのは墮落だらくしに来ているようなものだ。新聞配達をしたって、ここまで墮落するよりはましだ。

こう考えて、いやいや、附ついてくると、何だか先鋒せんぽうが急にがやがや騒さわぎ出した。同時に列はぴたりと留まる。変だから、列を右へはずして、向うを見ると、おおもてまち大手町を突き当つって薬師町やくしまちへ曲がる角の所で、行き詰づまったぎり、押おし返したり、押し返されたりして揉もみ

合っている。前方から静かに静かにと声を涸らして来た体操教師に何ですと聞くと、曲り角で中学校と師範しはん学校が衝突しょうとつしたんだと云う。

中学と師範とはどこの県下でも犬と猿さるのように仲がわるいそうだ。なぜだかわからないが、まるで気風が合わない。何かあると喧嘩をする。大方狭い田舎で退屈たいくつだから、暇潰ひまつぶしにやる仕事なんだろう。おれは喧嘩は好きな方だから、衝突と聞いて、面白半分に馳かけ出して行つた。すると前の方にいる連中は、しきりに何だ地方税の癖くせに、引き込めと、怒鳴どなつてる。後ろか

らは押せ押せと大きな声を出す。おれは邪魔になる生徒の間をくぐり抜けて、曲がり角へもう少しで出ようとした時に、前へ！ と云う高く鋭い号令が聞えたと思つたら師範学校の方は肅肅として行進を始めた。先を争つた衝突は、折合がついたには相違ないが、つまり中学校が一步を譲つたのである。資格から云うと師範学校の方が上だそうだ。

祝勝の式はすこぶる簡単なものであつた。旅団長が祝詞を読む、知事が祝詞を読む、参列者が万歳を唱える。それでおしまいだ。余興は午後にあると云う話だ

から、ひとまず下宿へ歸つて、こないだじゅうから、
氣に掛かつていた、清への返事をかきかけた。今度はもつ
と詳くわしく書いてくれとの注文だから、なるべく念入ねんいりに
認しためなくつちやならない。しかしいざとなつて、半切はんきり
を取り上げると、書く事はたくさんあるが、何から書
き出めしていいか、わからない。あれにしようか、あれ
は面倒臭めんどうくさい。これにしようか、これはつまらない。何
か、すらすらと出て、骨が折れなくつて、そうして清
が面白いようなものはないかしらん、と考かんえてみる
と、そんな注文通りの事件は一つもなさそうだ。おれ

は墨^{すみ}を磨^すつて、筆をしめして、巻紙を睨^{にら}めて、——巻紙を睨^{にら}めて、筆をしめして、墨を磨^すつて——同じ所作を同じように何返も繰^くり返したあと、おれには、とても手紙は書けるものではないと、諦^{あきら}めて硯^{すずり}の蓋^{ふた}をしてしまった。手紙なんぞをかくのは面倒臭い。やっぱり東京まで出掛けて行つて、逢^あつて話をするのが簡便だ。清の心配は察しないでもないが、清の注文通りの手紙を書くのは三七日の断食^{だんじき}よりも苦しい。

おれは筆と巻紙を抛^{ほう}り出して、ごろりと転がつて肱枕^{ひじまくら}をして庭^{にわ}の方を眺^{なが}めてみたが、やっぱり清の事が

気にかかる。その時おれはこう思った。こうして遠くへ来てまで、清の身の上を案じていてやりさえすれば、おれの真心まことは清に通じるに違いない。通じさえすれば手紙なんぞやる必要はない。やらなければ無事で暮くらしてると思ってるだろう。たよりは死んだ時か病気の時か、何か事の起った時にやりさえすればいい訳だ。

庭は十坪とつぽほどの平庭で、これという植木めじるしもない。ただ一本の蜜柑みかんがあつて、塀へいのそこから、目標めじるしになるほど高い。おれはうちへ帰ると、いつでもこの蜜柑を眺める。東京を出た事のないものには蜜柑の生なっている

ころはすこぶる珍めづしいものだ。あの青い実がだんだん熟してきて、黄色になるんだろうが、定めて奇麗きれいだろ
う。今でももう半分色の変ったのがある。婆ばあさんに聞
いてみると、すこぶる水気の多い、旨うまい蜜柑だそうだ。
今に熟うれたら、たんと召めし上がれと云ったから、毎日少
しずつ食ってやろう。もう三週間もしたら、充分食じゅうぶんえ
るだろう。まさか三週間以内にここを去る事もなかる
う。

おれが蜜柑の事を考えているところへ、偶然ぐうぜん山嵐やまあらしが
話しにやって来た。今日は祝勝会だから、君といっしょ

にご馳走ちそうを食おうと思つて牛肉を買つて来たと、竹の皮つつみの包たもとを袂から引きずり出して、座敷ざしきの真中まんなかへ抛り出した。おれは下宿で芋責いもぜめ豆腐責になつてる上、蕎麦屋そば行き、団子屋だんご行きを禁じられてる際だから、そいつは結構だと、すぐ婆さんから鍋なべと砂糖をかり込んで、煮方にがたに取りかかった。

山嵐むやみは無暗なじめに牛肉を頬張ほおほりながら、君あの赤シャツが芸者なじめに馴染なじめのある事を知つてるかと聞くから、知つてるとも、この間うらなりの送別会の時に来た一人がそうだろうと云つたら、そうだ僕ぼくはこの頃ごろようやく勘

づいたのに、君はなかなか敏捷びんしょうだと大いにほめた。

「あいつは、ふた言目には品性しんせいだの、精神的娛樂ごんらくだのと云う癖くせに、裏へ廻まわつて、芸者と關係なんかつけとる、怪けしからん奴やつだ。それもほかの人が遊ぶのを寛容かんようするならいいが、君が蕎麦屋へ行ったり、団子屋へはいるのさえ取締とりしまり上害になると云つて、校長の口を通して注意を加えたじゃないか」

「うん、あの野郎の考えじゃ芸者買は精神的娛樂で、天麩羅や、団子は物理的娛樂なんだろう。精神的娛樂なら、もっと大べらにやるがいい。何だあの様さまは。馴

染の芸者がはいつてくると、入れ代りに席をはずして、逃げるなんて、どこまでも人を胡魔化ごまかす気だから気に食わない。そうして人が攻撃こうげきすると、僕は知らないとか、露西亞ロシア文学だとか、俳句が新体詩の兄弟分だとか云って、人を烟けむに捲まくつもりなんだ。あんな弱虫は男じゃないよ。全く御殿女中の生れ変りか何かだぜ。これによると、あいつのおやじは湯島のかげまかもしれない」

「湯島のかげ、また何だ」

「何でも男らしくないもんだらう。——君そこのとこ

ろはまだ煮えていないぜ。そんなのを食うと條虫さなだむしが湧わくぜ」

「そうか、大抵大丈夫たいていだいじょうぶだろう。それで赤シャツは人に隠かくれて、温泉ゆの町の角屋かどやへ行つて、芸者と会見するそうだ」

「角屋つて、あの宿屋か」

「宿屋兼料理屋さ。だからあいつを一番へこますためには、あいつが芸者をつれて、あすこへはいり込むところを見届けておいて面詰めんきつするんだね」

「見届けるつて、夜番よばんでもするのかい」

「うん、角屋の前に柵屋ますやという宿屋があるだろう。あの表二階をかりて、障子しょうじへ穴をあけて、見ているのさ」
「見ているときに来るかい」

「来るだろう。どうせひと晩じゃいけない。二週間ばかりやるつもりでなくっちゃ」

「随分ずいぶん疲れるぜ。僕あ、おやじの死ぬとき一週間ばかり徹夜てつやして看病した事があるが、あとでぼんやりして、大いに弱った事がある」

「少しぐらい身体が疲れたって構わんさ。あんな奸物かんぶつをあのままにしておく、日本のためにならないから、

僕が天に代って誅戮ちゆうりくを加えるんだ」

愉快ゆかいだ。そう事が極まれば、おれも加勢してやる。

それで今夜から夜番をやるのかい」

「まだ枡屋に懸合かけあつてないから、今夜は駄目だ」

「それじゃ、いつから始めるつもりだい」

「近々のうちやるさ。いずれ君に報知をするから、そうしたら、加勢してくれたまえ」

「よろしい、いつでも加勢する。僕は計略ぼく はかりごとは下手へただが、

喧嘩とくるとこれでなかなかすばしこいぜ」

おれと山嵐がしきりに赤シャツ退治の計略はかりごとを相談し

ていると、宿の婆さんが出て来て、学校の生徒さんが一人、堀田先生ほったにお目にかかりたいててお出いでたぞなもし。今お宅へ参じたのじゃが、お留守るすじゃけれ、大方ここじやろうてて搜さがし当ててお出でたのじゃがなもしと、闕しきいの所へ膝ひざを突ついて山嵐の返事を待つてゐる。山嵐はそうですかと玄関げんかんまで出て行つたが、やがて歸つて来て、君、生徒が祝勝会の余興こうちを見に行かないかつて誘さそいに来たんだ。今日は高知こうちから、何とか踊おどりをしに、わざわざここまで多人数たにんず乗り込んで来ているのだから、是非見物しろ、めつたに見られない踊おどりだという

んだ、君もいつしよに行つてみたまえと山嵐は大いに
乗り気で、おれに同行を勧める。おれは踊なら東京で
たくさん見ている。毎年八幡様のお祭りには屋台が町
内へ廻つてくるんだから汐酌しおくみでも何でもちゃんと心
得ている。土佐っぼの馬鹿踊なんか、見たくもないと
思ったけれども、せっかく山嵐が勧めるもんだから、
つい行く気になつて門へ出た。山嵐を誘みよういに来たもの
は誰かと思つたら赤シャツの弟だ。妙な奴やつが来たもん
だ。

会場へはいると、回向院えこういんの相撲すもうか本門寺ほんもんじの御会式おえしきの

ように幾旒いくながれとなく長い旗を所々に植え付けた上に、世界万国の国旗をことごとく借りて来たくらい、縄なわから縄つな、綱つなから綱へ渡わたしかけて、大きな空が、いつになく賑にぎやかに見える。東の隅すみに一夜作りの舞台ぶたいを設けて、ここでいわゆる高知の何とか踊りをやるんだそうだ。舞台を右へ半町ばかりくると葭簀よしずの囲いをして、活花いけぼなが陳列ちんれつしてある。みんなが感心して眺めているが、一向くだらないものだ。あんなに草や竹を曲げて嬉うれしがるなら、背虫の色男や、跛びつこの亭主ていしゅを持って自慢じまんするがよからう。

舞台とは反対の方面で、しきりに花火を揚げる。花火の中から風船が出た。帝国万歳ていこくばんざいとかいてある。天主の松の上をふわふわ飛んで営所のなかへ落ちた。次はぽんと音がして、黒い団子が、しよつと秋の空を射抜いぬくように揚あがると、それがおれの頭の上で、ぽかりと割れて、青い烟けむりが傘かさの骨のように開いて、だらだらと空中に流れ込んだ。風船がまた上がった。今度は陸海軍万歳と赤地に白く染め抜いた奴が風に揺られて、温泉ゆの町から、相生村あいおいむらの方へ飛んでいった。大方観音様の境内けいだいへでも落ちたろう。

式の時はずいぶんでもなかったが、今度は大変な人出だ。田舎にもこんな人間が住んでるかと思ひ驚ろいたぐらいうじやうじやしている。利口な顔はあまり見当たらないが、数から云うとたしかに馬鹿に出来ない。そのうち評判の高知の何とか踊が始まった。踊というから藤間か何ぞのやる踊りかと早合点していたが、これは大間違いであつた。

いかめしい後鉢巻うしろはちまきをして、立つ付け袴ばかまを穿いた男が十人ばかりずつ、舞台の上に三列に並んで、その三十人がことごとく抜き身を携さげているには魂消たまげた。前列

と後列の間はわずか一尺五寸ぐらいだろう、左右の間隔はそれより短いとも長くはない。たった一人列を離れて舞台の端に立つてゐるのがあるばかりだ。この仲間外れの男は袴だけはつけているが、後鉢巻は儉約して、抜身の代りに、胸へ太鼓を懸けている。太鼓は太神楽の太鼓と同じ物だ。この男がやがて、いやあ、はああと呑気な声を出して、妙な謡をうたいながら、太鼓をぼこぼん、ぼこぼんと叩く。歌の調子は前代未聞の不思議なものだ。三河万歳と普陀洛やの合併したものと思えば大した間違ひにはならない。

歌はすこぶる悠長ゆうちようなもので、夏分の水飴みずあめのように、だらしがないが、句切りをとるためにぼこぼんを入れるから、のべつのようにも拍子ひょうしは取れる。この拍子に応じて三十人の抜き身がぴかぴかと光るのだが、これはまたすこぶる迅速じんそくなお手際で、拝見していても冷々する。隣となりも後ろも一尺五寸以内に生きた人間が居て、その人間がまた切れる抜き身を自分と同じように振り舞まわすのだから、よほど調子が揃そろわなければ、同志撃どうしうちを始めて怪我けがをする事になる。それも動かないで刀だけ前後とか上下とかに振るのなら、まだ危険あぶなくもないが、

三十人が一度に足踏あしぶみをして横を向く時がある。ぐるりと廻る事がある。膝を曲げる事がある。隣りのものが一秒でも早過ぎるか、遅おそ過ぎれば、自分の鼻は落ちるかも知れない。隣りの頭はそがれるかも知れない。抜き身の動くのは自由自在だが、その動く範囲はんいは一尺五寸角の柱のうちにかぎられた上に、前後左右のものと同方向に同速度にひらめかなければならない。こいつは驚いた、なかなかもつて汐酌しおくみや関せきの戸との及およぶところでない。聞いてみると、これははなはだ熟練の入るもので容易な事では、こういう風に調子が合わないそ

うだ。ことにむずかしいのは、かの万歳節のぼこぼん先生だそうだ。三十人の足の運びも、手の働きも、腰こしの曲げ方も、ことごとくこのぼこぼん君の拍子一つで極まるのだそうだ。傍はたで見ていると、この大将が一番呑気そうに、いやあ、はああと気楽にうたってるが、その実ははなはだ責任が重くつて非常に骨が折れるとは思議なものだ。

おれと山嵐が感心のためりこの踊を余念なく見物している、半町ばかり、向うの方で急にわっと云う関おだの声がして、今まで穩おだやかに諸所を縦覧していた連中

が、にわかに波を打って、右左りに揺うごき始める。喧嘩だ喧嘩だと云う声がすると思うと、人の袖そでを潜くぐり抜ぬけて来た赤シャツの弟が、先生また喧嘩です、中学の方で、今朝けさの意趣返いしゆがえしをするんで、また師範しはんの奴と決戦を始めたところです、早く来て下さいと云いながらまた人の波のなかへ潜もぐり込こんでどつかへ行つてしまつた。

山嵐は世話の焼ける小僧だまた始めたのか、いい加減にすればいいのにと逃げる人を避よけながら一散に馳かけ出した。見ている訳にも行かないから取り鎮しずめるつ

もりだろう。おれは無論の事逃げる気はない。山嵐の踵かかとを踏んであとからすぐ現場へ駆けつけた。喧嘩は今まっさいちゆうが真最中である。師範の方は五六十人もあろうか、中学はたしかに三割方多い。師範は制服をつけているが、中学は式後大抵たいていは日本服に着換きえているから、敵味方はすぐわかる。しかし入り乱れて組んづ、解ほれつ戦つてゐるから、どこから、どう手を付けて引き分けていいか分らない。山嵐は困つたなと云う風で、しばらくこの乱雑な有様を眺めていたが、こうなつちや仕方がない。巡查じゆんさがくると面倒だ。飛び込んで分けようと、お

れの方を見て云うから、おれは返事もしないで、いきなり、一番喧嘩の烈しはげそうな所へ躍りおど込んだ。止せ止せ。そんな乱暴をすると学校の体面に関わる。よさないかと、出るだけの声を出して敵と味方の分界線らしい所を突き貫ぬけようとしたが、なかなかそう旨うまくは行かない。一二間はいったら、出る事も引く事も出来なくなつた。目の前に比較ひかくてき的大きな師範生が、十五六の中学生と組み合っている。止せと云ったら、止さないかと師範生の肩かたを持って、無理に引き分けようとする途端とたんにだれか知らないが、下からおれの足をすくつた。

おれは不意を打たれて握にぎった、肩を放して、横に倒たおれた。堅かたい靴くつでおれの背中の上へ乗った奴がある。両手と膝を突いて下から、跳はね起きたら、乗った奴は右の方へころがり落ちた。起き上がって見ると、三間ばかり向うに山嵐の大きな身体が生徒の間に挟はさまりながら、止せ止せ、喧嘩は止せ止せと揉み返されてるのが見えた。おい到底駄目だと云ってみたが聞えないのか返事もしない。

ひゅうと風を切って飛んで来た石が、いきなりおれの頬ほお骨ぼねへ中あたったなと思ったら、後ろからも、背中を棒ぼう

でどやした奴がある。教師の癖くせに出ている、打ぶて打ぶてと云う声がする。教師は二人だ。大きい奴と、小さい奴だ。石を抛なげろ。と云う声もする。おれは、なに生意気な事をぬかすな、田舎者の癖にと、いきなり、傍そばに居た師範生の頭を張りつけてやった。石がまたひゅうと来る。今度はおれの五分刈ぶがりの頭を掠かすめて後ろの方へ飛んで行つた。山嵐はどうなつたか見えない。こくなつちや仕方がない。始めは喧嘩をとめにはいったんだが、どやされたり、石をなげられたりして、恐れ入おそつて引き下がるうんでれがんがあるものか。おれを誰だ

と思うんだ。身長は小さくつても喧嘩の本場で修行を積んだ兄さんだと無茶苦茶に張り飛ばしたり、張り飛ばされたりしていると、やがて巡査だ巡査だ逃げろ逃げろと云う声がした。今まで葛練りくずねの中で泳いでるように身動きも出来なかったのが、急に楽になったと思つたら、敵も味方も一度に引上げてしまった。田舎者でも退却たいきやくは巧妙だ。クロパトキンより旨いくらいである。

山嵐はどうしたかと見ると、紋付もんつきの一重羽織ひとえばおりをずたずたにして、向うの方で鼻を拭ふいている。鼻柱をなぐ

られて大分出血したんだそうだ。鼻がふくれ上がって真赤まっかになつてすこぶる見苦しい。おれは飛白かすりの袷あわせを着ていたから泥どろだらけになつたけれども、山嵐の羽織ほどの損害はない。しかし頬ほぺたがぴりぴりしてたまらない。山嵐は大分血が出ているぜと教えてくれた。

巡査は十五六名来たのだが、生徒は反対の方面から退却したので、捕つかまつたのは、おれと山嵐だけである。おれらは姓名せいめいを告げて、一部始終を話したら、ともかくも警察まで来いと云うから、警察へ行つて、署長の前で事の顛末てんまつを述べて下宿へ歸つた。

十一

あくる日眼^めが覚めてみると、身体^{からだ}中痛くてたまらない。久しく喧嘩^{けんか}をしつけないから、こんなに答えるんだろう。これじゃあんまり自慢^{じまん}もできないと床^{とこ}の中で考えていると、婆^{ばあ}さんが四国新聞を持ってきて枕元^{まくらもと}へ置いてくれた。実は新聞を見るのも退儀^{たいぎ}なんだが、男がこれしきの事に閉口^{へこ}たれて仕様があるものかと無理に腹^{はら}這^はいになって、寝^ねながら、二頁を開けてみ

ると驚ろいた。おど昨日の喧嘩がちゃんと出ている。喧嘩の出ているのは驚ろかないのだが、中学の教師堀田某ほったたぼうと、近頃東京から赴任した生意気なる某とが、順良なる生徒を使喚してこの騒動を喚起せるのみならず、両人は現場にあつて生徒を指揮したる上、みだりに師範生に向つて暴行をほしいままにしたりと書いて、次にこんな意見が附記してある。ふき本県の中学は昔時より善良温順の気風をもつて全国の羨望するところなりしが、軽薄なる二豎子のために吾校の特権を毀損せられて、この不面目を全市に受けたる以上は、吾人は奮然

として起^たつてその責任を問わざるを得ず。吾人は信ず、吾人が手を下す前に、当局者は相当の処分をこの無頼漢^{ぶらいかん}の上に加えて、彼等^{かれら}をして再び教育界に足を入るる余地なからしむる事を。そうして一字ごとにみんな黒点を加えて、お灸^{きゅう}を据^すえたつもりでいる。おれは床の中で、糞^{くそ}でも喰^くらえと云^いいながら、むっくり飛び起きた。不思議な事に今まで身体の関節^{ふしぶし}が非常に痛かったのが、飛び起きると同時に忘れたように軽くなった。

おれは新聞を丸めて庭へ抛^なげつけたが、それでもま

だ気に入らなかつたから、わざわざ後架こうかへ持つて行つて棄すてて来た。新聞なんて無暗むやみな嘘うそを吐つくもんだ。世の中は何が一番法螺ほらを吹ふくと云つて、新聞ほどの法螺吹きはあるまい。おれの云つてしかるべき事をみんな向むこうで並ならべていやがる。それに近頃東京から赴任した生意気な某とは何だ。天下に某と云う名前せいの人があるか。考えてみる。これでもれっきとした姓せいもあり名もあるんだ。系図が見たけりや、多田満仲ただのまんじゆう以来の先祖ひとを一人残らず拝ましてやらあ。——顔を洗つたら、頬ほべたが急に痛くなつた。婆さんに鏡をかせと云つたら、

けさの新聞をお見たかなもと聞く。読んで後架へ棄てて来た。欲しけりや拾つて来いと云つたら、驚おどろいて引き下がった。鏡で顔を見ると昨日きのうと同じように傷がついている。これでも大事な顔だ、顔へ傷まで付けられた上へ生意気なる某などと、某呼ばわりをされればたくさんだ。

今日の新聞に辟易へきえきして学校を休んだなどと云われちや一生の名折れだから、飯を食つていの一号に出頭した。出てくる奴やつも、出てくる奴もおれの顔を見て笑っている。何がおかしいんだ。貴様達にこしらえてもらつ

た顔じゃあるまいし。そのうち、野だが出て来て、いや昨日はお手柄てがらで、——名譽めいよのご負傷でげすか、と送別会の時に撲なぐった返報と心得たのか、いやに冷ひやかしたから、余計な事を言わずに絵筆でも舐なめていろと云つてやった。するとこりや恐おそれい入りやした。しかしさぞお痛い事でげしようと思うから、痛かろうが、痛くなかろうがおれの面だ。貴様の世話になるもんかと怒鳴どなりつけてやったら、向むこう側の自席へ着いて、やつぱりおれの顔を見て、隣となりの歴史の教師と何か内所話をして笑っている。

それから山嵐が出頭した。山嵐の鼻に至っては、
紫色に膨張して、掘ったら中から膿うみが出そうに見える。
自惚うぬぼれのせいか、おれの顔よりよっぽど手ひどく遣や
られている。おれと山嵐は机を並べて、隣り同志の近
しい仲で、お負けにその机が部屋の戸口から真正面に
あるんだから運がわるい。妙な顔が二つ塊かたまっている。
ほかの奴は退屈たいくつにさえなるときつとこつちばかり見
る。飛んだ事だと口で云うが、心のうちではこの馬鹿ばか
がと思つてゐるに相違そういない。それでなければああいう風
に私語合ささやきあつてはくすくす笑う訳がない。教場へ出ると

生徒は拍手をもつて迎えた。むか先生万歳と云うものが
二三人あつた。景気がいいんだか、馬鹿にされてるん
だか分らない。おれと山嵐がこんなに注意の焼点と
なつてゐるなかに、赤シャツばかりは平常の通り傍へ来
て、どうも飛んだ災難でした。僕は君等に対してお氣
の毒でなりません。新聞の記事は校長とも相談して、
正誤を申し込む手續こきにしておいたから、心配しなく
てもいい。僕の弟が堀田君を誘さそいに行つたから、こん
な事が起つたので、僕は実に申し訳がない。それでこ
の件についてはあくまで尽力するつもりだから、どう

かあしからず、などと半分謝罪的な言葉を並べている。校長は三時間目に校長室から出てきて、困った事を新聞がかき出しましたね。むずかしくならなければいいがと多少心配そうに見えた。おれには心配なんかない、先で免職めんしよくをするなら、免職される前に辞表を出してしまっただけだ。しかし自分がわるくないのにこっちから身を引くのは法螺吹きの新聞屋をますます増長させる訳だから、新聞屋を正誤させて、おれが意地にも務めるのが順当だと考えた。帰りがけに新聞屋に談判に行こうと思ったが、学校から取消とりけしの手続きはしたと云う

から、やめた。

おれと山嵐は校長と教頭に時間の合間を見計^みつて、嘘のないところを一応説明した。校長と教頭はそうだろう、新聞屋が学校に恨^{うら}みを抱^{いだ}いて、あんな記事をこ^かとさらに掲^かげたんだろうと論断した。赤シャツはおれ等の行^{こう}為^いを弁解しながら控所^{ひかえじよ}を一人ごとに廻^{まわ}つてある^いていた。ことに自分の弟が山嵐を誘^ふい出^いしたのを自分の過失であるかのごとく吹聴^{ふいちよう}していた。みんなは全く新聞屋がわるい、怪^けしからん、両君は実に災難だと云^いつた。

歸りがけに山嵐は、君赤シャツは臭いくさぜ、用心しないとやられるぜと注意した。どうせ臭いんだ、今日から臭くなつたんじゃなかうと云うと、君まだ気が付かないか、きのうわざわざ、僕等を誘い出して喧嘩のなかへ、捲まき込こんだのは策だぜと教えてくれた。なるほどそこまでは気がつかなかった。山嵐は粗暴そぼうなようだが、おれより智慧ちえのある男だと感心した。

「ああやつて喧嘩をさせておいて、すぐあとから新聞屋へ手を廻してあんな記事をかかせたんだ。実に奸物かんぶつだ」

「新聞までも赤シャツか。そいつは驚いた。しかし新聞が赤シャツの云う事をそう容易く聴くかね」

「聴かなくつて。新聞屋に友達が居りや訳はないさ」

「友達が居るのかい」

「居なくても訳ないさ。嘘をついて、事実これこれだと話しゃ、すぐ書くさ」

「ひどいもんだな。本当に赤シャツの策なら、僕等はこの事件で免職になるかも知れないね」

「わるくすると、遣やられるかも知れない」

「そんなら、おれは明日あした辞表を出してすぐ東京へ帰つ

ちまわあ。こんな下等な所に頼たのんだって居るのはいやだ」

「君が辞表を出したって、赤シャツは困らない」

「それもそうだな。どうしたら困るだろう」

「あんな奸物の遣る事は、何でも証しょうこ拠の挙がらないように、挙がらないようにと工夫するんだから、反はんぱく駁するのにはむずかしいね」

「厄やっかい介ぬれぎぬだな。それじゃ濡衣を着るんだね。面白くもない。面おも白くもない。天道てんどう是耶非かだ」

「まあ、もう二三日様子を見ようじゃないか。それで

いよいよとなったら、温泉の町で取って抑えるより仕方がないだろう」

「喧嘩事件は、喧嘩事件としてか」

「そうさ。こつちはこつちで向うの急所を抑えるのさ」
「それもよからう。おれは策略は下手^{へた}なだから、万事よろしく頼む。いざとなれば何でもする」

俺と山嵐はこれで分れた^{わか}。赤シャツが果た^{はた}して山嵐の推察通りをやったのなら、実にひどい奴だ。到底^{とうてい}智慧比^ちべで勝てる奴ではない。どうしても腕力^{わんりよく}でなくつちや駄目^{だめ}だ。なるほど世界に戦争は絶えない訳だ。個

人でも、とどの詰りつまは腕力だ。

あくる日、新聞のくるのを待ちかねて、披ひらいてみると、正誤どころか取り消しも見えない。学校へ行つて狸たぬきに催促さいそくすると、あしたぐらい出すでしようと云う。

明日になつて六号活字で小さく取消が出た。しかし新聞屋の方で正誤は無論しておらない。また校長に談判すると、あれより手続きのしようはないのだと云う答だ。校長なんて狸のような顔をして、いやにフロック張っているが存外無勢力なものだ。虚偽きよぎの記事を掲げた田舎新聞一つ詫あやまらせる事が出来ない。あんまり腹

が立つたから、それじゃ私が一人で行つて主筆に談判すると云つたら、それはいかん、君が談判すればまた悪口を書かれるばかりだ。つまり新聞屋にかかれた事は、うそにせよ、本当にせよ、つまりどうする事も出来ないものだ。あきらめるより外に仕方がないと、坊主の説教じみた説論せつゆを加えた。新聞がそんな者なら、一日も早く打ぶ潰つぶしてしまつた方が、われわれの利益だろう。新聞にかかれるのと、泥鰌すっぱんに食いつかれるとが似たり寄つたりだとは今日こんにちただ今狸の説明によつて始めて承知つかまつ仕つた。

それから三日ばかりして、ある日の午後、山嵐が憤然^{ふんぜん}とやって来て、いよいよ時機が来た、おれは例の計画を断行するつもりだと云うから、そうかそれじゃおれもやろうと、即座^{そくざ}に一味徒党に加盟した。ところが山嵐が、君はよす方がよかろうと首を傾^{かたむ}けた。なぜと聞くと君は校長に呼ばれて辞表を出せと云われたかと尋^{たず}ねるから、いや云われない。君は？ と聴き返すと、今日校長室で、まことに気の毒だけれども、事情やむをえんから処決^{しよけつ}してくれと云われたとの事だ。

「そんな裁判はないぜ。狸は大方腹鼓^{はらつづみ}を叩^{たた}き過ぎて、

胃の位置が顛倒てんどうしたんだ。君とおれは、いつしよに、祝勝会へ出てさ、いつしよに高知のぴかぴか踊りおどを見てさ、いつしよに喧嘩をとめにはいったんじやないか。辞表を出せというなら公平に両方へ出せと云うがい。なんで田舎いなかの学校はそう理窟りくつが分らないんだろう。焦慮じれついな」

「それが赤シャツの指金さしがねだよ。おれと赤シャツとは今までの行懸りゆきが上到底とうてい両立しない人間だが、君の方は今の通り置いても害にならないと思ってるんだ」

「おれだって赤シャツと両立するものか。害にならな

いと思うなんて生意気だ」

「君はあまり単純過ぎるから、置いたって、どうでも胡魔化ごまかされると考えてるのさ」

「な悪いや。誰だれが両立してやるものか」

「それに先だって古賀が去ってから、まだ後任が事故のために到着とうちやくしないだろう。その上に君と僕を同時に追い出しちゃ、生徒の時間に明きが出来て、授業にさし支つかえるからな」

「それじゃおれを間あいのくさびに一席伺うかがわせる気なんだな。こん畜生ちくしょう、だれがその手に乗るものか」

翌日^{あくるひ}おれは学校へ出て校長室へ入って談判を始めた。

「何で私に辞表を出せと云わないんですか」

「へえ？」と狸はあつけに取られている。

「堀田には出せ、私には出さないで好いと云う法がありますか」

「それは学校の方の都合で……」

「その都合が間違^{まちが}つてまさあ。私が出さなくって済むなら堀田だって、出す必要はないでしょう」

「その辺は説明が出来かねますが——堀田君は去られ

てもやむをえんのですが、あなたは辞表をお出しになる必要を認めませんから」

なるほど狸だ、要領を得ない事ばかり並べて、しかも落ち付きはら払ってる。おれは仕様がなから

「それじゃ私も辞表を出しましょう。堀田君一人辞職させて、私が安閑あんかんとして、留まっていられると思つていらつしやるかも知れないが、私にはそんな不人情な事は出来ません」

「それは困る。堀田も去りあなたも去つたら、学校の数学の授業がまるで出来なくなってしまうから……」

「出来なくなつても私の知った事じゃありません」

「君そう我儘わがままを云うものじゃない、少しは学校の事情

も察してくれなくっちゃ困る。それに、来てから一月立つか立たないのに辞職したと云うと、君の将来の履歴りれきに關係するから、その辺も少しは考えたらいいでしょう」

「履歴なんか構うもんですか、履歴より義理が大切で
す」

「そりゃごもつとも——君の云うところは一々ごもつともだが、わたしの云う方も少しは察して下さい。君

が是非辞職すると云うなら辞職されてもいいから、代りのあるまでどうかやってもらいたい。とにかく、うちでもう一返考え直してみて下さい」

考え直すって、直しようのない明々白々たる理由だが、狸が蒼あおくなったり、赤くなったりして、可愛想かわいそうになつたからひとまず考え直す事として引き下がつた。赤シャツには口もきかなかつた。どうせ遣かたつつけるなら塊かためて、うんと遣かたつつける方がいい。

山嵐に狸と談判した模様を話したら、大方そんな事だろうと思つた。辞表の事はいざとなるまでそのまま

にしておいても差支えあるまいとの話だったから、山嵐の云う通りにした。どうも山嵐の方がおれよりも利巧らしいから万事山嵐の忠告に従う事にした。

山嵐はいよいよ辞表を出して、職員一同に告別の挨拶をして浜の港屋まで下ったが、人に知れないように引き返して、温泉の町の枡屋の表二階へ潜んで、障子へ穴をあけて覗き出した。これを知ってるものはおればかりだろう。赤シャツが忍んで来ればどうせ夜だ。しかも宵の口は生徒やその他の目があるから、少なくとも九時過ぎに極つてる。最初の二晩はおれも十一時

頃まで張番はりばんをしたが、赤シャツの影かげも見えない。三日目には九時から十時半まで覗いたがやはり駄目だ。駄目を踏ふんで夜なかに下宿へ帰るほど馬鹿氣た事はない。四五日しごんちすると、うちの婆さんが少々心配を始めて、奥さんおくのおありるのに、夜遊びはおやめたがええぞなもしと忠告した。そんな夜遊びとは夜遊びが違ちがう。こつちのは天に代ちゆうりくつて誅戮を加える夜遊びだ。とはいふものの一週間も通つて、少しも験げんが見えないと、いやになるもんだ。おれは性急せつかちな性分だから、熱心になると徹夜てつやでもして仕事をするが、その代り何によらず長持

ちのした試しがない。いかに天誅党でも飽^あきる事に変りはない。六日目には少々いやになつて、七日目にはもう休もうかと思つた。そこへ行くと山嵐は頑固^{がんこ}なものだ。宵^{よい}から十二時過^{すぎ}までは眼を障子へつけて、角屋の丸ぼやの瓦斯^{がすとウ}燈の下を睨^{にら}めつきりである。おれが行くと今日は何人客があつて、泊^{とま}りが何人、女が何人といろいろな統計を示すのには驚ろいた。どうも来ないようじやないかと云うと、うん、たしかに来るはずだがと時々腕組^{うでぐみ}をして溜息^{ためいき}をつく。可愛想に、もし赤シャツがここへ一度来てくれなければ、山嵐は、生涯^{しょうがい}天誅

を加える事は出来ないのである。

八日目には七時頃から下宿を出て、まずゆるりと湯に入つて、それから町で鶏卵けいらんを八つ買った。これは下宿の婆さんの芋責いもぜめに応ずる策である。その玉子を四つずつ左右の袂たもとへ入れて、例の赤手拭あかてぬぐいを肩かたへ乗せて、懷手ふところをしながら、枡屋ますやの楷子段はしごだんを登つて山嵐ざしきの座敷の障子をあけると、おい有望有望と韋駄天いだてんのような顔は急に活氣ていを呈した。昨夜ゆうべまでは少し塞ぎふさの気味で、はたで見ているおれさえ、陰氣臭いんきくさいと思つたくらいだが、この顔色を見たら、おれも急にうれしくなつて、何も

聞かない先から、愉快愉快ゆかいと云った。

「今夜七時半頃あの小鈴こすずと云う芸者が角屋へはいった」

「赤シャツといっしょか」

「いいや」

「それじゃ駄目だ」

「芸者は二人づれだが、——どうも有望らしい」

「どうして」

「どうしてって、ああ云う狡ずるい奴だから、芸者を先へよこして、後から忍んでくるかも知れない」

「そうかも知れない。もう九時だろう」

「今九時十二分ばかりだ」と帯の間からニツケル製の時計を出して見ながら云ったが「おい洋燈らんぶを消せ、障子へ二つ坊主頭が写つてはおかしい。狐きつねはすぐ疑ぐるから」

おれは一貫張いっかんばりの机の上にあつた置き洋燈らんぶをふつと吹きつけた。星明りで障子だけは少々あかるい。月はまだ出ていない。おれと山嵐いっしょうけんめいは一生懸命に障子へ面かおをつけて、息を凝こらしている。チーンと九時半の柱時計が鳴った。

「おい来るだろうか。今夜来なければ僕はもう厭いやだ

ぜ」

「おれは錢のつづく限りやるんだ」

「錢つていくらあるんだい」

「今日までで八日分五円六十錢払った。いつ飛び出しても都合のいいように毎晩勘定かんじようするんだ」

「それは手廻しがいい。宿屋で驚いてるだろう」

「宿屋はいいが、気が放せないから困る」

「その代り昼寝ひるねをするだろう」

「昼寝はするが、外出が出来ないんで窮屈きゅうくつでたまらない」

「天誅も骨が折れるな。これで天網恢々てんもうかいかい疎そにして洩もらしちまつたり、何かしちや、つまらないぜ」

「なに今夜はきつとくるよ。——おい見ろ見ろ」と小聲になつたから、おれは思わずどきりとした。黒い帽子ぼうしを戴いたた男が、角屋の瓦斯燈を下から見上げたまま暗い方へ通り過ぎた。違つてゐる。おやおやと思つた。そのうち帳場の時計が遠慮えんりよなく十時を打った。今夜もとうとう駄目らしい。

世間は大分静かになつた。遊廊ゆうかくで鳴らす太鼓たいこが手に取るように聞きこえる。月が温泉ゆの山の後うしろからのつと顔を

出した。往来はあかるい。すると、下しもの方から人声が聞えだした。窓から首を出す訳には行かないから、姿を突つき留める事は出来ないが、だんだん近づいて来る模様だ。からんからんと駒下駄こまげたを引き擦ずる音がする。眼を斜ななめにとするとやつと二人の影法師かげぼうしが見えるくらいに近づいた。

「もう大丈夫だいじょうぶですね。邪魔じやまものは追っ払ったから」正まさしく野だの声である。「強がるばかりで策がないから、仕様がなない」これは赤シャツだ。「あの男もべらんめえに似ていますね。あのべらんめえと来たら、勇み肌はだ

の坊っちゃんだから愛嬌あいぎょうがありますよ」「増給がいやだの辞表を出したいのつて、ありやどうしても神経に異状があるに相違ない」おれは窓をあけて、二階から飛び下りて、思う様打ちぶのめしてやろうと思つたが、やつとの事で辛防しんぼうした。二人はハハハハと笑いながら、瓦斯燈の下を潜くぐつて、角屋の中へはいった。

「おい」

「おい」

「来たぜ」

「とうとう来た」

「これでようやく安心した」

「野だの畜生、おれの事を勇み肌の坊っちゃんだと拔ぬかしやがった」

「邪魔物と云うのは、おれの事だぜ。失敬千万な」

おれと山嵐は二人の歸路を要撃ようげきしなければならな

い。しかし二人はいつ出てくるか見当がつかない。山嵐は下へ行つて今夜ことによると夜中に用事があつて出るかも知れないから、出られるようにしておいてくれと頼たのんで来た。今思たいていうと、よく宿のものが承知したものだ。大抵たいていなら泥棒どろぼうと間違えられるところだ。

赤シャツの来るのを待ち受けたのはつらかったが、出て来るのをじっとして待つてるのはなおつらい。寝る訳には行かないし、始終障子の隙すきから覗めているのもつらいし、どうも、こうも心が落ちつかなくつて、これほど難儀なんぎな思いをした事はいまだにない。いつその事角屋へ踏み込んで現場を取つて抑えおさようと発議ほつぎしたが、山嵐は一言にして、おれの申し出を斥しりぞけた。自分共が今時分飛び込んだつて、乱暴者だと云つて途中とちゆうで遮さへられる。訳を話して面会を求めれば居ないと逃にげるか別室へ案内をする。不用意のところへ踏み込める

と仮定したところで何十とある座敷のどこに居るか分るものではない、退屈でも出るのを待つより外に策はないと云うから、ようやくの事でとうとう朝の五時まで我慢した。

角屋から出る二人の影を見るや否や、おれと山嵐はすぐあとを尾けた。一番汽車はまだないから、二人とも城下まであるかなければならない。温泉ゆの町をはずれると一丁ばかりの杉並木すぎなみきがあつて左右は田圃たんぼになる。それを通りこすところかしこに藁葺わらぶきがあつて、畠はたけの中を一筋に城下まで通る土手へ出る。町さえはずれ

れば、どこで追いついても構わないが、なるべくなら、人家のない、杉並木で捕まえてやろうと、見えがくれについて来た。町を外れると急に馳け足の姿勢で、はやてのように後ろから、追いついた。何が来たかと驚ろいて振り向く奴を待てと云つて肩に手をかけた。野だは狼狽の気味で逃げ出そうという景色だったから、おれが前へ廻つて行手を塞いでしまった。

「教頭の職を持つてゐるものが何で角屋へ行つて泊つた」と山嵐はすぐ詰りかけた。

「教頭は角屋へ泊つて悪むという規則がありますか」

と赤シャツは依然^{いぜん}として鄭寧^{ていねい}な言葉を使つてゐる。顔の色は少々蒼い。

「取締上不都合だから、蕎麦屋^{そばや}や団子屋^{だんごや}へさえはいつてはいかんと、云うくらい謹直^{きんちよく}な人が、なぜ芸者といつしよに宿屋へとまり込んだ」野だは隙を見ては逃げ出そうとするからおれはすぐ前に立ち塞がつて「べらんめえの坊っちゃんた何だ」と怒鳴り付けたら、「いえ君の事を云ったんじゃないんです、全くないんです」と鉄面皮に言訳がましい事をぬかした。おれはこの時気がついてみたら、両手で自分の袂^{たもと}を握^{にぎ}つてゐる。追つ

かける時に袂の中の卵がぶらぶらして困るから、両手で握りながら来たのである。おれはいきなり袂へ手を入れて、玉子を二つ取り出して、やつと云いながら、野だの面へ擲たきつけた。玉子がぐちやりと割れて鼻の先から黄味がだらだら流れだした。野だはよつぽど仰天ぎょうてんした者と見えて、わつと言いながら、尻持しりもちをついて、助けてくれと云った。おれは食うために玉子は買ったが、打ぶつけるために袂へ入れてる訳ではない。ただ肝癪かんしゃくのあまりに、ついぶつけるともなしに打つけてしまったのだ。しかし野だが尻持を突いたところを見て

始めて、おれの成功した事に気がついたから、こん畜生ちくしよう、こん畜生と云いながら残る六つを無茶苦茶に擲たきつけたら、野だは顔中黄色になった。

おれが玉子をたたきつけているうち、山嵐と赤シャツはまだ談判最中である。

「芸者をつれて僕が宿屋へ泊ったと云う証拠しょうこがありますか」

「宵に貴様のなじみの芸者が角屋へはいったのを見て云う事だ。胡魔化せるものか」

「胡魔化す必要はない。僕は吉川君と二人で泊ったの

である。芸者が宵にはいろいろが、はいるまいが、僕の知った事ではない」

げんこつ

「だまれ」と山嵐は拳骨を食わした。赤シャツはよろしたが「これは乱暴だ、ろうぜき狼藉である。理非を弁じないで腕力に訴えるのは無法だ」

「無法でたくさんだ」とまたばかりと撲なぐる。「貴様のような奸物はなぐらなくっちゃ、答えないんだ」とぽかぽかなぐる。おれも同時に野だを散々に擲き据えた。しまいには二人とも杉の根方にうずくまって動けないのか、眼がちらちらするのか逃げようともしない。

「もうたくさんか、たくさんでなけりや、まだ撲なぐつてやる」とぽかんぽかんと兩人ふたりでなぐつたら「もうたくさんだ」と云つた。野だに「貴様もたくさんか」と聞いたら「無論たくさんだ」と答えた。

「貴様等は奸物だから、こうやって天誅を加えるんだ。これに懲こりて以来つつしむがいい。いくら言葉巧たくみに弁解が立つても正義は許さんぞ」と山嵐が云つたら兩人共だまっていた。ことによると口をきくのが退儀たいぎなのかも知れない。

「おれは逃げも隠かくれもせん。今夜五時までは浜の港屋

に居る。用があるなら巡査じゆんさなりなんなり、よこせ」と山嵐が云うから、おれも「おれも逃げも隠れもしないぞ。堀田と同じ所に待つてゐるから警察うったへ訴えたければ、勝手に訴えろ」と云つて、二人してすたすたあるき出した。

おれが下宿へ歸つたのは七時少し前である。部屋へはいるとすぐ荷作りを始めたら、婆さんが驚いて、どうおしるのぞなもと聞いた。お婆さん、東京へ行つて奥さんを連れてくるんだと答えて勘定を済まして、すぐ汽車へ乗つて浜へ来て港屋へ着くと、山嵐は二階

で寝ていた。おれは早速辞表を書こうと思ったが、何と書いていいか分らないから、私儀都合有之わたくしぎ 此れあり辞職の上東京へ歸り申候もうしそろうにつき左様御承知被下度候さようごししょうちくだされたくそろう以上とかいて校長宛あてにして郵便で出した。

汽船は夜六時の出帆しゅつばんである。山嵐もおれも疲れて、ぐうぐう寝込んで眼が覚めたら、午後二時であつた。下女に巡査は来ないかと聞いたら参りませんと答えた。「赤シャツも野だも訴えなかつたなあ」と二人は大きに笑つた。

その夜おれと山嵐はこの不浄ふじような地を離はなれた。船が岸

を去れば去るほどいい心持ちがした。神戸から東京までは直行で新橋へ着いた時は、ようやく娑婆へ出たよしやばうな気がした。山嵐とはすぐ分れたぎり今日まで逢う機会がない。

清きよの事を話すのを忘れていた。——おれが東京へ着

いて下宿へも行かず、革鞆かぼんを提げたまま、清や帰ったよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰って来て下さったと涙なみだをぽたぽたと落した。おれもあまり嬉うれしかったから、もう田舎いなかへは行かない、東京で清とうちを持つんだと云った。

その後ある人の周旋しゆうせんで街鉄がいてつの技手になった。月給は二十五円で、家賃は六円だ。清は玄関げんかん付きの家でなくつても至極満足の様子であつたが気の毒な事に今年の二月肺炎はいえんに罹かかつて死んでしまった。死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋うめて下さい。お墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待っておりますと云つた。だから清の墓は小日向こびなたの養源寺にある。

（明治三十九年四月）

底本…「ちくま日本文学全集 夏目漱石」筑摩書房

1992（平成4）年1月20日第1刷発行

底本の親本…「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年10月27日第1刷発行

※底本の注にれば、本作品の原稿には、「そのうち学校もいやになった。」の後に、漱石自身による2字あけの指定があるという。このファイルでは、その情報にもとづいて、当該の箇所を2字あけとした。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5―86）を、大振りにつくっています。

入力..真先芳秋

校正..柳沢成雄

1999年9月13日公開

2004年2月27日修正

青空文庫作成ファイル..

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、
校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで
す。